

上大利北土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書XII

牛頸梅頭遺跡群Ⅲ

～ 第3次調査 ～

大野城市文化財調査報告書 第85集

2008

大野城市教育委員会

上大利北土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ

うし くび うめ がしら い せき ぐん
牛頸梅頭遺跡群Ⅲ

～ 第3次調査 ～

大野城市文化財調査報告書 第85集



2008

大野城市教育委員会



2号窯跡全景(南から)

序

今回報告する牛頸梅頭遺跡第3次調査地は、三兼池北側の丘陵部にありました。現在調査地周辺は三兼池公園として整備され、市民の憩いの場として利用されています。調査地からは、須恵器窯跡2基と丘陵斜面に竪穴状遺構が確認されました。竪穴状遺構からは、たくさんの土器とカマドが確認され、梅頭2次調査地と同じように須恵器工人集落があったと考えられます。また、須恵器窯跡は1基を三兼池に面した緑地内に現状のまま保存しました。さらに調査をおこなった1基は、焚口部で遺体を火葬した痕跡があり、近畿地方で確認されるカマド塚と似た構造であることが分かりました。このことは、牛頸窯跡群の須恵器工人が近畿地方との強い結びつきがあったことを示すものとして注目される資料で、大変重要な調査となりました。

土地には時代を問わずそこで起こった様々な出来事が遺跡・遺構・遺物といった形で記録されています。大野城市では、この残された埋蔵文化財に関して、慎重に発掘調査を進め、人々の生活を記録し保存しています。本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり広く活用され、文化財愛護の精神が高揚することを心から願うとともに、今後とも文化財行政に対し、尚一層ご理解とご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、上大利北土地区画整理組合をはじめ(株)大成建設、工事関係者及び地元の方々にご理解とご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成20年9月30日

大野城市教育委員会
教育長 古賀 宮太

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が上大利北土地区画整理事業に伴って発掘調査を実施した、大野城市大字上大利所在の梅頭遺跡第3次調査の報告書である。なお上大利地区は牛頸窯跡群の範囲に含まれており、こうした歴史事象を踏まえたことから本書の表題を『牛頸梅頭遺跡群』とした。
2. 発掘調査は、大野城市上大利北土地区画整理組合の委託を受け大野城市教育委員会が実施した。
3. 遺構写真は、石木秀啓・島田拓（現兵庫県上郡町教育委員会）・岸見康宏（現愛媛県松山市教育委員会）・上田恵（現小郡市教育委員会）が撮影した。
4. 遺物写真は、(株)埋蔵文化財サポートシステム（松尾直子・毛利恒彦）が撮影した。
5. 遺構平面実測図・地形測量図は、(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託し、個別遺構実測図は石木・島田・岸見・上田が作成した。なお、地形測量図のコンターは25cm間隔である。
6. 遺構実測図中の方位は磁北を表し、図上の座標は国土座標（第Ⅱ系）を示す。
7. 遺物実測図・拓本・観察表・製図は、(株)埋蔵文化財サポートシステム（中島朋子・福田京子・中尾陽介・本川美穂子・嶋田聡・種浦加代子・多々良正人・村上久美子・古賀栄子）が作成した。
8. 2号窯跡焚口・燃焼部の土壌サンプルについては、(株)古環境研究所に分析を委託し、分析原稿を掲載した。
9. 本書に掲載した遺跡分布図は、国土地理院発行の1/25,000地形図『福岡南部』『太宰府』を使用したものである。
10. 遺物の名称の内、須恵器蓋杯については平城宮分類による呼称を用いる。
11. 本書の遺物・実測図・写真はすべて大野城市教育委員会が管理・保管している。
12. 本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修を使用した。
13. 本書の執筆は、Ⅰ・Ⅱ－Ⅰ・Ⅱ－Ⅱ（Ⅰ）窯跡の遺構説明・Ⅳを石木、他を(株)埋蔵文化財サポートシステム（平島義孝）が担当し、編集は石木の指導の下、(株)埋蔵文化財サポートシステム（平島）が行った。

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査体制	1～8
II. 調査の結果	
1. 調査概要	11
2. 遺構と遺物	12～68
観察表	69～76
III. 自然科学分析の結果	
大野城市、梅頭遺跡第3次調査におけるリン・カルシウム含量分析	77～79
IV. まとめ	
1. 遺構の時期	80～81
2. 斜面上に立地する集落の時期と性格	81～83
3. カマド塚状遺構について	83～86

図版目次

図版1	(1) 1区全景(西から)
	(2) 2区全景(南から)
図版2	(1) 3区全景(南から)
	(2) 4区全景(北東から)
図版3	(1) 5区全景(南東から)
	(2) 6区全景(北東から)
図版4	(1) 1号窯跡全景(東から)
	(2) 2号窯跡検出状況(南から)
図版5	2号窯跡柱穴検出・焼成部床面粘土層検出状況(南から)
図版6	2号窯跡柱穴検出状況(南から)
図版7	(1) 2号窯跡窯体内左側壁全景(南東から)
	(2) 2号窯跡窯体内右側壁全景(南西から)
図版8	(1) 2号窯跡焚口部左側壁粘土壁全景(東から)
	(2) 2号窯跡焚口部～焼成部左側壁全景(南東から)
図版9	(1) 2号窯跡焼成部左側壁全景(南東から)
	(2) 2号窯跡焼成部左側壁還元面残存状況(南東から)
図版10	(1) 2号窯跡焚口部右側壁粘土壁全景(西から)
	(2) 2号窯跡焚口部～焼成部右側壁全景(南西から)

- 図版11 (1) 2号窯跡焼成部右側壁全景 (南西から)
(2) 2号窯跡焚口部炭化材検出状況 (南から)
- 図版12 (1) 2号窯跡焚口部左半部炭化材検出状況 (南から)
(2) 2号窯跡焚口部右半部炭化材検出状況 (南から)
- 図版13 (1) 2号窯跡焚口部S P 05検出状況 (南西から)
(2) 2号窯跡焚口部S P 12検出状況 (南から)
- 図版14 (1) 2号窯跡焚口部S P 02土層 (西から)
(2) 2号窯跡焚口部S P 05土層 (西から)
(3) 2号窯跡焚口部S P 07土層 (西から)
- 図版15 (1) 2号窯跡焚口部S P 09土層 (東から)
(2) 2号窯跡焚口部S P 11土層 (西から)
(3) 2号窯跡焚口部S P 12土層 (西から)
- 図版16 (1) 2号窯跡焚口部炭化材除去状況 (南東から)
(2) 2号窯跡焚口部炭化材・焼土完掘状況 (南東から)
- 図版17 (1) 2号窯跡窯体G - G' 面横断土層 (南から)
(2) 2号窯跡窯体焼成部下位縦断土層 (南西から)
(3) 2号窯跡窯体F - F' 面横断土層 (南から)
- 図版18 (1) 2号窯跡窯体E - E' 面左半部横断土層 (南から)
(2) 2号窯跡窯体E - E' 面右半部横断土層 (南から)
(3) 2号窯跡窯背部土坑縦断土層 (南西から)
- 図版19 (1) 2号窯跡断割後全景 (南から)
(2) 2号窯跡c - c' 面断割土層 (南から)
(3) 2号窯跡f - f' 面断割土層 (南東から)
- 図版20 (1) 2号窯跡灰原右下区西壁 (南東から)
(2) 2号窯跡灰原中央西壁 (南東から)
(3) 2号窯跡灰原確認トレンチ (南西から)
- 図版21 (1) S X 01完掘状況 (北西から)
(2) S X 01土層 (南西から)
(3) S X 02完掘状況 (北西から)
(4) S X 02土層 (南西から)
(5) S X 06土層 (南西から)
(6) S X 06遺物出土状況 (北西から)
(7) S X 09土層 (東から)
(8) S X 10検出状況 (南東から)
- 図版22 (1) S X 11完掘状況 (南東から)
(2) S X 12・13完掘状況 (南東から)

- 図版23 (1) S X12完掘状況 (南東から)
(2) S X12-2 遺物出土状況 (南東から)
(3) S X12 c - c ' 面土層 (南東から)
- 図版24 (1) S X13 d - d ' 面土層 (南東から)
(2) S X15完掘状況 (南東から)
(3) S X15 c - c ' 面土層 (東から)
- 図版25 (1) S X17完掘状況 (東から)
(2) S X17土層 (南西から)
(3) S X18完掘状況 (南東から)
(4) S X18土層 (南東から)
(5) S X19完掘状況 (南西から)
(6) S X19土層 (南西から)
- 図版26 (1) S X21完掘状況 (北西から)
(2) S X22完掘状況 (北西から)
(3) S X23完掘状況 (北西から)
(4) S X24完掘状況 (北東から)
(5) S X25完掘状況 (南東から)
(6) S X25土層 (南東から)
- 図版27 (1) S X25・26完掘状況 (南東から)
(2) S X26土層 (北東から)
- 図版28 (1) S X26-2 遺物出土状況 (南東から)
(2) S X27完掘状況 (南東から)
(3) S X27土層 (北東から)
- 図版29 (1) S X28完掘状況 (南から)
(2) S X28 d - d ' 面土層 (北東から)
(3) S X28 b - b ' 面土層 (北東から)
- 図版30 (1) S X29完掘状況 (東から)
(2) S X29-2 遺物出土状況 (東から)
- 図版31 (1) S X30完掘状況 (南から)
(2) S X30 h - h ' 面土層 (東から)
(3) S X30 m - m ' 面土層 (東から)
(4) S X30-3 遺物出土状況 (南西から)
(5) S X30-5 焼土・遺物出土状況 (南東から)
- 図版32 (1) S X31完掘状況 (北から)
(2) S X32完掘状況 (北西から)
(3) S X32土層・遺物出土状況 (南西から)

- 図版33 (1) S X32焼土検出状況 (南西から)
 (2) S X33完掘状況 (東から)
 (3) S X33土層 (西から)
- 図版34 (1) S X34半截状況 (北東から)
 (2) S J 01出土状況 (北西から)
 (3) S J 01下甕底部出土状況 (南西から)
- 図版35 (1) S D01 a - a ' 面土層 (南から)
 (2) S D01 d - d ' 面土層 (南から)
 (3) S D01 j - j ' 面土層 (南から)
 (4) S D02・03 a - a ' 面土層 (南から)
 (5) S D04 a - a ' 面土層 (南から)
 (6) S D05 a - a ' 面土層 (南から)

図版36～45 出土遺物①～⑩

図版46 3次調査地周辺の現況 (南西から) (平成20年3月撮影)

挿 図 目 次

第1図	梅頭遺跡第3次調査地および梅頭遺跡第1・2次調査地位置図 (1/5,000)	2
第2図	上大利土地区画整理地周辺旧地形測量図 (1948年米軍撮影) (1/5,000)	3
第3図	上大利土地区画整理事業地内計画平面図	4
第4図	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	5・6
第5図	調査地全体図 (1/500)	9・10
第6図	2号窯跡実測図 (1/60)	13・14
第7図	2号窯跡窯体内・灰原・作業路土層実測図 (1/60)	15・16
第8図	2号窯跡窯体内・灰原土層実測図 (1/60)	17・18
第9図	2号窯跡カマド塚状遺構実測図 (1/30)	20
第10図	1号・2号窯跡出土遺物実測① (1/3)	22
第11図	2号窯跡出土遺物実測図② (26・27は1/6、他は1/3)	23
第12図	S X01・02実測図 (S X01は1/60、S X02は1/40)	25
第13図	S X01・02・05・06出土遺物実測図 (1/3)	26
第14図	S X03～05実測図 (1/40)	27
第15図	S X06・08・09実測図 (1/40)	29
第16図	S X10・11実測図 (S X10は1/20、S X11は1/40)	31
第17図	S X10・11出土遺物実測図 (45は1/6、他は1/3)	32
第18図	S X12・13実測図 (1/60)	33

第19図	S X12・13出土遺物実測図（1／3）	34
第20図	S X15・16実測図（1／40）	35
第21図	S X15出土遺物実測図①（1／3）	36
第22図	S X15出土遺物実測図②（1／3）	37
第23図	S X15出土遺物実測図③（1／2）	38
第24図	S X16・18出土遺物実測図（87・88は1／2、他は1／3）	39
第25図	S X17・18実測図（1／60）	40
第26図	S X19・21・22実測図（1／40）	41
第27図	S X19・20・23・24出土遺物実測図（1／3）	42
第28図	S X23～25実測図（1／40）	44
第29図	S X26・27実測図（1／40）	46
第30図	S X26出土遺物実測図①（1／3）	47
第31図	S X26出土遺物実測図②（1／3）	48
第32図	S X28実測図（1／60）	50
第33図	S X28・29出土遺物実測図（1／3）	51
第34図	S X29・31実測図（1／40）	52
第35図	S X30実測図（1／60）	53・54
第36図	S X30出土遺物実測図①（136は1／6、他は1／3）	55
第37図	S X30出土遺物実測図②（142は1／2、他は1／3）	56
第38図	S X32実測図（1／40）	57
第39図	S X32出土遺物実測図①（1／3）	58
第40図	S X32出土遺物実測図②・S X33出土遺物実測図（1／3）	59
第41図	S X33・34実測図（S X33は1／40、S X34は1／20）	60
第42図	S J 01実測図（1／20）	61
第43図	S J 01甕棺実測図（1／6）	62
第44図	S D01～05実測図（平面実測図は1／120、土層実測図は1／40）	63
第45図	S D02～05土層実測図（1／40）	64
第46図	S D・S P出土遺物実測図（1／3）	65
第47図	調査区内表採遺物実測図①（173は1／6、他は1／3）	66
第48図	調査区内表採遺物実測図②（178、179は1／2、他は1／3）	67
第49図	2号窯跡焚口・燃焼部サンプル採取位置（1／40）	78
第50図	牛頸梅頭遺跡第2次調査地遺構変遷図（1／1000）	81
第51図	牛頸梅頭遺跡第3次調査地遺構変遷図（1／1200）	82
第52図	上寺山古墳墓室木組構造復元図（1／80）	85
第53図	牛頸梅頭遺跡第3次2号窯跡カマド塚状遺構構造推定復元図	86

表 目 次

表 1	梅頭遺跡第 3 次調査出土遺物観察表①	69
表 2	梅頭遺跡第 3 次調査出土遺物観察表②	70
表 3	梅頭遺跡第 3 次調査出土遺物観察表③	71
表 4	梅頭遺跡第 3 次調査出土遺物観察表④	72
表 5	梅頭遺跡第 3 次調査出土遺物観察表⑤	73
表 6	梅頭遺跡第 3 次調査出土遺物観察表⑥	74
表 7	梅頭遺跡第 3 次調査出土遺物観察表⑦	75
表 8	梅頭遺跡第 3 次調査出土遺物観察表⑧	76
表 9	大野城市、梅頭遺跡第 3 次調査における蛍光 X 線分析結果	79
表10	梅頭遺跡第 3 次調査における各試料のリン・カルシウム含量	79

巻頭図版目次

巻頭カラー図版 2 号窯跡全景（南から）

I. はじめに

1. 調査にいたる経過

上大利北土地地区画整理事業地内における埋蔵文化財の調査経緯については、『牛頸梅頭遺跡群Ⅰ』（大野城市文化財調査報告書第60集）に詳述している。また、年度ごとの調査経過については『牛頸本堂遺跡群Ⅳ』（75集）、『牛頸本堂遺跡群Ⅴ』（76集）、『牛頸本堂遺跡群Ⅵ』（80集）、『牛頸本堂遺跡群Ⅶ』（81集）、『牛頸梅頭遺跡群Ⅳ』（86集）で詳述しているため、以下では梅頭遺跡3次調査の調査にいたる経過について記述する。

梅頭遺跡3次調査地は、大野城市大字上大利573-1外にあたり、調査対象面積は約13,000㎡である。当地は三兼池北側の丘陵部にあたり、池本体の大きな谷から西側に入りこんだ小谷に位置する。伐採後、現地を歩くとコンクリートパイルなどの産業廃棄物が著しく、北側に所在した生活道路から重機で進入した痕跡があり、丘陵の稜線には作業路が造成されていたことから遺構の残存状況はよくないものと予想された。しかし、斜面に遺物が散布しており、西側では梅頭遺跡2次調査地で遺構が確認されていたことから、29次試掘調査として丘陵斜面全体を表土剥ぎすることになった。

試掘調査に入ったところ、斜面上に遺構の展開を認めた。また、遺構は南側斜面を中心に確認され、表土剥ぎ中から須恵器をはじめたくさんの遺物が出土した。

試掘調査は、平成14年11月9日～12月16日まで実施した。また、発掘調査は平成14年11月11日～5月13日の間実施した。調査は島田拓（現上郡町教育委員会）が担当した。調査中には、窯体内焚口から遺体を火にかけた痕跡が認められたことから、梅頭遺跡1・2次調査の成果と合わせ、窯を墳墓に転用したものと考え、平成15年4月10日に記者発表をおこない、4月12日に現地説明会を実施した。

また、調査区東側では調査された窯跡とは別に奈良時代の窯跡1基を確認したが、検出と遺物表採のみに止め、現状のまま池に面する緑地部分に保存している。保存にあたっては、上大利北土地地区画整理組合および㈱大成建設のご協力により緑地部の設計変更がおこなわれた。記して感謝申し上げます。

2. 調査体制

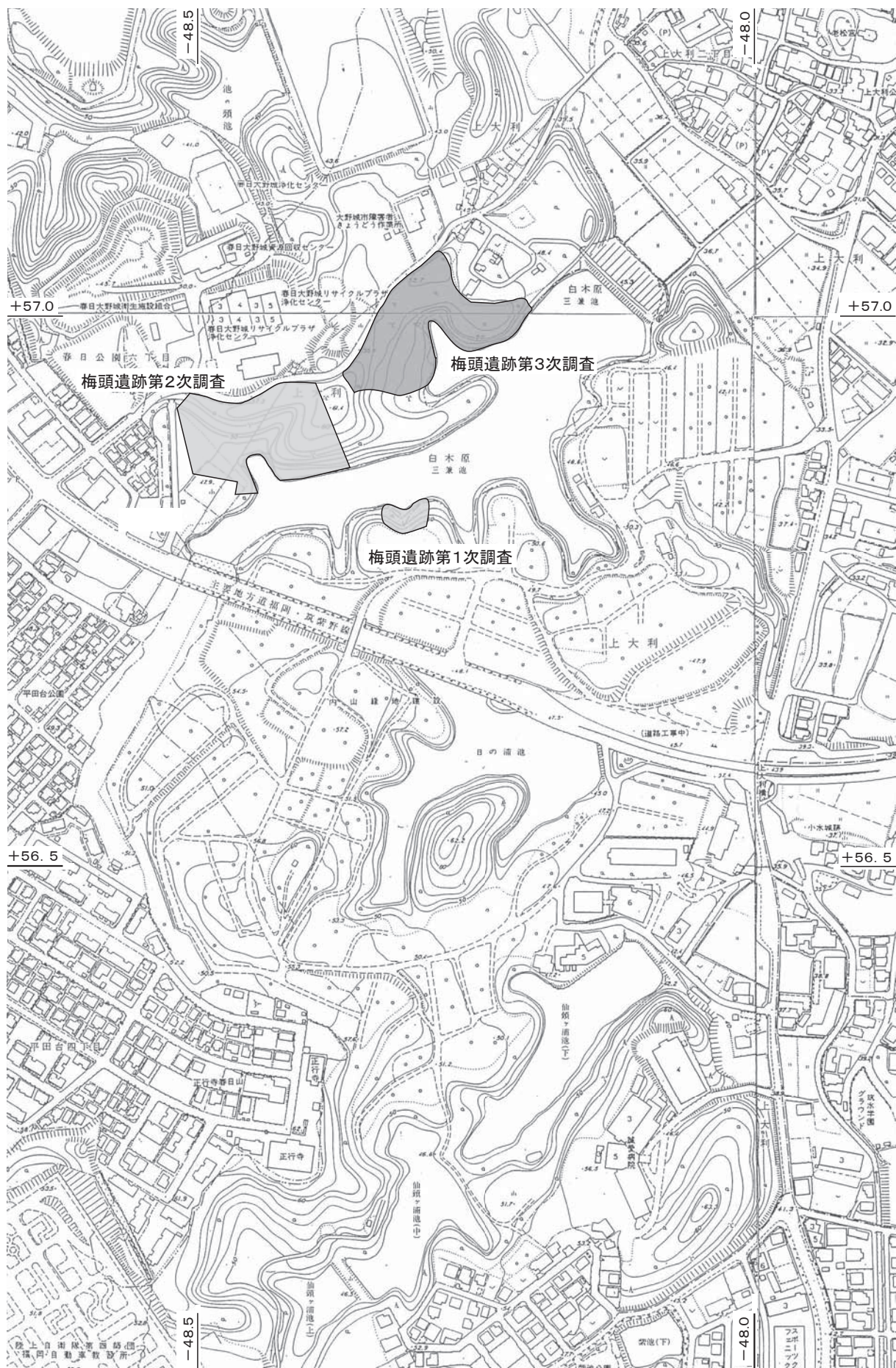
平成14～20年度における発掘調査ならびに整理作業における調査体制は以下のとおりである。なお、現地作業は大野城市教育委員会が実施したが、整理作業は遺物の点検・実測遺物取り上げ・実測図の検査等を本市がおこない、㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託して報告書作成をおこなった。

〔大野城市教育委員会〕

教 育 長

堀内貞夫（～15年6月）

古賀宮太（15年6月～）



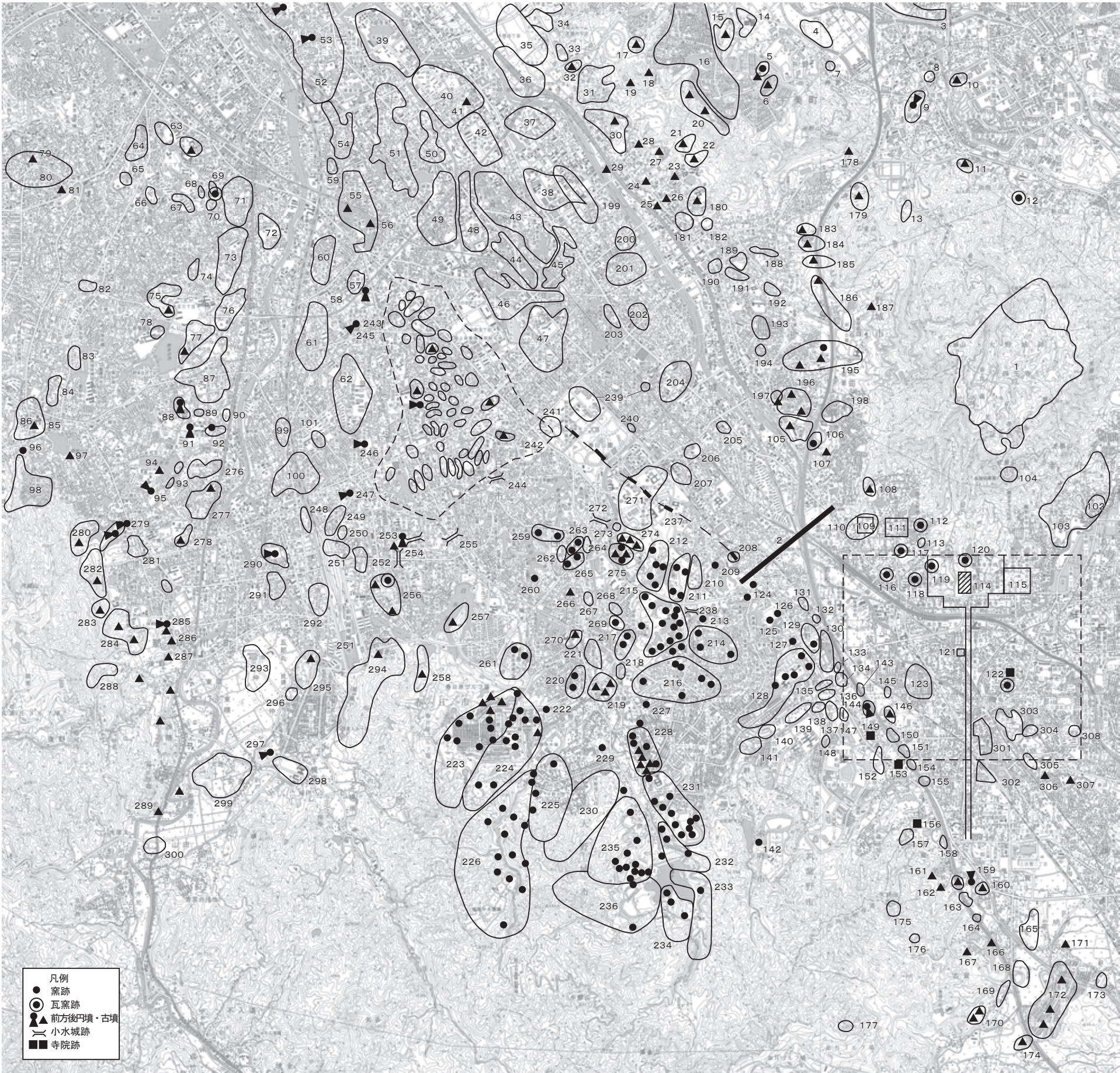
第1図 梅頭遺跡第3次調査地および梅頭遺跡第1・2次調査地位置図 (1/5,000)



第2図 上大利土地区画整理地周辺旧地形測量図（1948年米軍撮影）（1／5,000）



第3図 上大利土地区画整理事業地内計画平面図



第4図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

1. 大野城跡	77. 野多目B遺跡・古墳群	154. 塔原遺跡	224. 小田浦遺跡群
2. 水城跡	78. 野多目浦ノ池遺跡	155. 樋田山遺跡	225. 大谷窯跡群
宇美町	79. 穴観音古墳	156. 武蔵寺跡	226. 石坂窯跡群
3. 神領・浦尻古墳群	80. 寺塚A古墳群	157. 武蔵寺経塚群	227. 東浦窯跡
4. 川原田・供田遺跡群	81. 寺塚B古墳群	158. 道場山遺跡	228. 中通遺跡群・古墳群
5. 岩長浦古墳群	82. 屋形原遺跡	159. 原口古墳・古墳群	229. 城ノ山窯跡群
6. 観音浦古墳群	83. 花畑C遺跡群	160. 鷺田山遺跡・古墳群	230. 原窯跡
7. ウソフキ古墳	84. 花畑B遺跡群	161. 八限裏山古墳	231. ハセムシ窯跡群
8. 宇美中学校遺跡	85. 花畑A遺跡群	162. 八限古墳群	232. 道ノ下窯跡群
9. 正籠古墳群	86. 三十田古墳	163. 畑添遺跡	233. 長者原窯跡群
10. 湯湧古墳群	87. 野多目C遺跡群	164. 山の口遺跡	234. 笹原窯跡群
11. 花ノ木古墳群	88. 卯内尺古墳・古墳群	165. 立明寺地区遺跡	235. 井手窯跡群
12. 寺浦窯跡	89. 老司A遺跡	166. 扇祇古墳群	236. 足洗川窯跡群
13. 内野谷古墳群	90. 老司B遺跡	167. 江永浦古墳	237. 池田・池の上遺跡
志免町	91. 老司古墳	168. 貝元遺跡	238. 上大利水城跡
14. 松ヶ上・松ヶ下遺跡	92. 老松神社古墳群	169. トドギ遺跡	春日市
15. 松ノ尾古墳群	93. 老司池A・B遺跡群	170. 古賀古墳群	239. 駿河遺跡
16. 桜ヶ丘古墳群	94. 中尾古墳	171. 厳島神社古墳	240. 原ノ口遺跡
福岡市	95. 浦ノ田古墳群	172. 上の山古墳群	241. 立石遺跡
17. 熊野古墳群	96. 中島窯跡	173. 大牟田西遺跡	242. 須玖・岡本遺跡群
18. 七曲古墳群	97. 箱池古墳	174. 萩原古墳群	243. 御陵遺跡群・古墳
19. 金剛山古墳群	98. 四十塚・大牟田古墳群	175. 天判山城	244. 小倉水城跡
20. 持田ヶ浦古墳群A群	99. 警弥郷A遺跡	176. 飯盛城跡	245. 野藤1号墳
21. 持田ヶ浦古墳群B群	100. 警弥郷B遺跡	177. 博多見城跡	246. 下白水大塚古墳
22. 持田ヶ浦古墳群C群	101. 弥永遺跡群	301. 二日市宿跡	247. 日拝塚古墳
23. 持田ヶ浦古墳群D群	太宰府市	302. 堀池遺跡	248. 柏田遺跡
24. 持田ヶ浦古墳群E群	102. 浦城跡	303. 釜畑遺跡	249. 辻田遺跡
25. 持田ヶ浦古墳群F群	103. 原遺跡	304. 修理田遺跡	250. 上白水西遺跡
26. 今里不動古墳	104. 岩屋城跡	305. 通り浦遺跡	251. 門田遺跡
27. 堤ヶ浦古墳群	105. 成屋形古墳群	306. 五穀神古墳	252. 天神の木遺跡
28. 影ヶ浦古墳群	106. 裏ノ田遺跡	307. カケ塚古墳	253. 天神山古墳
29. 丸山古墳	107. 裏ノ田古墳	308. 米嚙城	254. 天神山水城跡
30. 金隈遺跡群	108. 陣の尾古墳群・遺跡群	大野城市	255. 大土居水城跡
31. 立花寺遺跡群	109. 筑前国分尼寺跡	178. 唐山古墳群	256. ウトグチ遺跡群
32. 文殊谷古墳群	110. 国分松本遺跡	179. 乙金北古墳群	257. 白水池古墳群
33. 上月隈B遺跡	111. 筑前国分寺跡	180. 御陵古墳群	258. 西浦古墳群
34. 上月隈遺跡群	112. 国分瓦窯跡	181. 塚口遺跡	259. 惣利窯跡群
35. 下月隈C遺跡群	113. 御笠团印出土地	182. 御陵前の椽遺跡	260. 大牟田窯跡
36. 立花寺B遺跡群	114. 大宰府政庁跡	183. 善一田古墳群	261. 浦ノ原窯跡群
37. 井相田D遺跡群	115. 観世音寺	184. 王城山古墳群	262. 惣利西遺跡
38. 井相田C遺跡	116. 松倉瓦窯跡	185. 古野古墳群	263. 惣利遺跡
39. 那珂君休遺跡群	117. 坂本瓦窯跡	186. 原口古墳群	264. 惣利北遺跡
40. 板付遺跡	118. 来木古墳群・瓦窯跡	187. 此岡古墳群	265. 惣利東遺跡
41. 板付八幡古墳	119. 来木北瓦窯跡	188. 松葉園遺跡	266. 惣利古墳
42. 高畑遺跡	120. 都府楼北瓦窯跡	189. 森園遺跡	267. 円入遺跡
43. 麦野A遺跡	121. 榎寺	190. ヒケシマ遺跡	268. 春日平田遺跡群
44. 麦野B遺跡	122. 般若寺・瓦窯跡	191. 中・寺尾遺跡	269. 春日平田西遺跡
45. 麦野C遺跡	123. 市ノ上遺跡	192. 薬師の森遺跡	270. 塚原古墳群
46. 南八幡遺跡群	124. 神ノ前窯跡群	193. 銀山遺跡	271. 九州大学筑紫キャンパス遺跡群
47. 雑餉隈遺跡群	125. 篠俵遺跡・窯跡	194. 原門遺跡	272. 春日水城跡
48. 三筑遺跡	126. 尊田窯跡	195. 埴ヶヶ尾遺跡・窯跡	273. 向谷北遺跡
49. 笹原遺跡群	127. 長浦窯跡	196. 釜蓋原古墳群	274. 向谷古墳群
50. 諸岡B遺跡	128. 宮ノ本遺跡群・窯跡群	197. 金山遺跡	275. 春日平田北遺跡
51. 諸岡A遺跡	129. 日焼遺跡群・窯跡群	198. 釜蓋原遺跡	那珂川町
52. 比恵・那珂遺跡群	130. 前田遺跡	199. 仲島遺跡	276. 野口遺跡群
53. 那珂八幡古墳	131. 原口遺跡	200. 川原遺跡	277. 観音堂遺跡群
54. 五十川遺跡群	132. 久郎利遺跡	201. 御笠の森遺跡	278. 井河古墳群
55. 井尻B遺跡	133. 上川久保遺跡	202. 村下遺跡	279. 小丸古墳群
56. 井尻B-1号古墳	134. 雛川遺跡	203. 雑餉隈遺跡	280. 浦ノ原古墳群
57. 寺島遺跡	135. フケ遺跡	204. 石勺遺跡	281. 井河遺跡群
58. 笠拔遺跡	136. 尾崎遺跡	205. 原ノ口古墳群	282. 丸ノ口古墳群
59. 井尻A遺跡	137. 脇道遺跡	206. 後原遺跡	283. 白石古墳群
60. 横手遺跡群	138. 殿城戸遺跡	207. 御供田遺跡	284. 荒原池古墳群
61. 日佐遺跡群	139. 京ノ尾遺跡	208. 谷川遺跡	285. 妙法寺古墳
62. 弥永原遺跡群	140. カヤノ遺跡	209. 出口窯跡・遺跡	286. 油田古墳群
63. 野間A・B遺跡	141. 長ヶ坪遺跡	210. 上園遺跡	287. 大万寺前古墳
64. 中村町遺跡	142. 野口窯跡	211. 本堂遺跡群	288. 国太子古墳群
65. 若久A遺跡	筑紫野市	212. 梅頭遺跡群	289. 松尾古墳群
66. 若久B遺跡	143. 井ノ尻遺跡・古墳	213. 谷蟹窯跡	290. 今光宗石遺跡群・貝徳寺古墳
67. 大橋B遺跡	144. 剣塚遺跡・古墳群・瓦窯跡	214. 大浦窯跡群	291. 松ノ木遺跡群
68. 大橋C遺跡	145. 杉塚大坪遺跡	215. 野添遺跡群	292. 中原・塔ノ元遺跡群
69. 大橋D遺跡・三宅瓦窯跡	146. 埴安神社古墳	216. 平田窯跡群	293. 仲遺跡群
70. 三宅A遺跡・三宅廃寺	147. 和久堂城跡	217. 華無尾遺跡群	294. 観音山古墳群・深原遺跡
71. 大橋E遺跡	148. 杉塚山の谷遺跡	218. 屏風田遺跡	295. エゲ古墳・カクチガ浦古墳群
72. 三宅C遺跡	149. 杉塚廃寺	219. 塚原遺跡群	296. 炭焼古墳群
73. 三宅B遺跡	150. 唐人塚遺跡・古墳群	220. 畑ヶ坂遺跡群	297. 安徳大塚古墳
74. 和田A遺跡群	151. 前田遺跡	221. 日ノ浦遺跡群	298. 平蔵遺跡群
75. 和田B遺跡群	152. 脇田遺跡	222. 月ノ浦1号窯跡	299. 安徳台遺跡群
76. 野多目A遺跡	153. 塔原廃寺	223. 後田遺跡群	300. 山田西遺跡群

教 育 部 長	鬼塚春光（14年 3 月～17年 3 月） 小嶋 健（17年 4 月～20年 3 月） 森岡 勉（20年 4 月～）
社 会 教 育 課 長	秋吉正一（14年 4 月～17年 3 月） 水野邦夫（17年 4 月～18年 3 月）
ふるさと文化財課長	舟山良一（18年 4 月～）
文 化 財 担 当 係 長	舟山良一（～18年 3 月） 中山 宏（18年 4 月～）
主 査	徳本洋一 石木秀啓 緒方一幹（16年 4 月～18年 3 月） 丸尾博恵
主 任 主 事	大道和貴（～16年 3 月）
主 任 技 師	林 潤也 早瀬 賢（16年 4 月～）
技 師	上田龍児（19年 4 月～）
嘱 託	平島義孝（～16年 3 月） 上田 恵（14年 4 月～15年 4 月） 島田 拓（14年 4 月～15年 6 月） 岸見泰宏（14年 4 月～16年 3 月） 一瀬 智（15年11月～17年 7 月） 西堂将夫（15年 4 月～18年 3 月） 井上愛子（16年 4 月～20年 3 月） 北川貴洋（16年 4 月～19年 3 月） 城門義廣（18年 4 月～19年 8 月） 岡田裕之（18年 5 月～19年 3 月） 田尻義了（19年 4 月～6 月） 遠藤 茜（19年 4 月～） 石川 健（19年 7 月～） 大里弥生（19年10月～） 甲斐康大（20年 4 月～） 中島 圭（20年 4 月～） 栗津剛史（16年 4 月～18年 6 月） 能塚由紀（18年 8 月～20年 8 月）

整理作業員

松岡信子 町井裕子 鬼塚穂子 白井典子 村山律子 井上理香 渡部美香 城真奈美

橋本悦子 渡辺直美 仲村美幸

発掘作業員

原田敬子 大海雅子 高木幸子 満富スエコ 吉嗣波津子 岩切ふえ 前田チエ子 西田幸子
那波幸子 高木冴子 藤田和子 三原ひろみ 吉田香織 岡本妙子 馬場孝子 田中照子
寺垣みゆき 中垣親 松山洋子 日野律子 小林敏子 坂本泰子 渡辺久美子 小林久美子
西村清子 貞包由起子 広渡隆子 穴井和子 立石律子 船越桃子 樋之口浩一 深野人美
大藺英美 仲前富美子 井口るみ子 倉富倫子 釣屋種利 飯田三治 溝口忍 金澤好子
田浦秀子 小川ケイ子 三善公子 山下隆子 團野ハマ子 篠崎繁美 東島真弓 安里由利子
中山文子 牧野和美 川村真樹子 村岡真由美 槇坂陽子 原口美奈子 山口文代
大島五津子 大浦旗江 清成健悟 高木由佳 木村奈津子 織田徹 松田和美 戸渡京子
野崎美智子 倉住孝枝 稲富久子 山田賢治 松尾純子 末永勝 安達はるみ 西本福雄
田中悦子 田野和代 吉村秀子 宮原ゆかり 尾ノ口英晴 碓井ふき子 木室友希 川岸昌子

[上大利北土地区画整理組合]

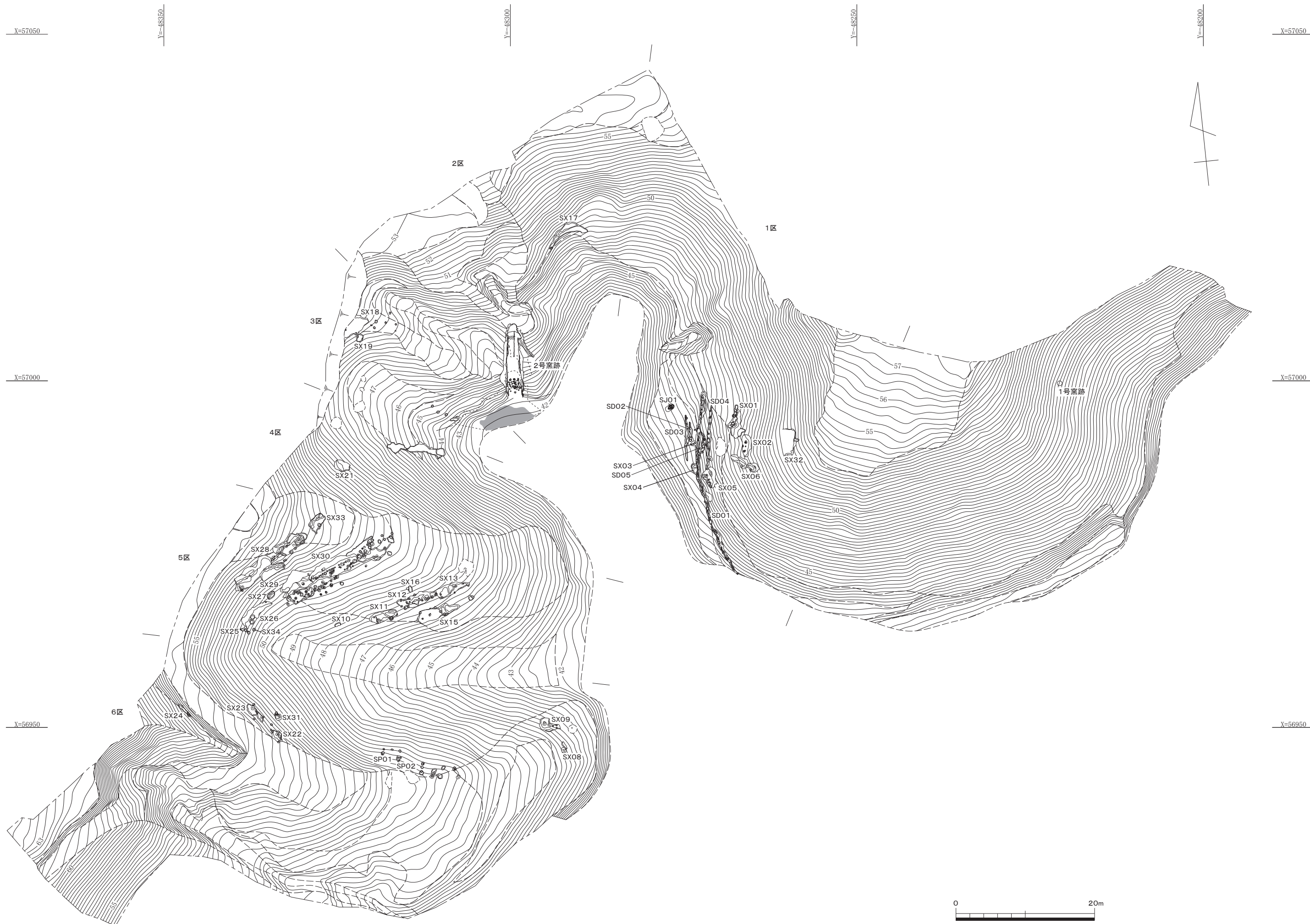
理 事 長	伊藤雅都
副 理 事 長	樋口敬記
	林 尚司
事 務 局 長	平川松丸
技 術 職	吉次俊二（～19年3月）
	林 圭一（～18年3月）
	山下 健（16年4月～20年6月）
	濱本泰司（18年4月～20年3月）
事 務 職	伊藤衆子

[榊埋蔵文化財サポートシステム 福岡支店]

支 店 長	松尾直子
係 長	古閑健一
主 任	中尾陽介
技 師	毛利恒彦
	本川美穂子
	平島義孝
	嶋 田 聡

整理作業員

藤井文子 上田光子 木村美子 山内由美 長沼貞子



第5図 調査地全体図(1／500)

II. 調査の結果

1. 調査概要（第5図、図版1～4）

第3次調査地は、三兼池北側の丘陵部に位置する。大野城市大字上大利573-1外にあたり、調査面積は13,000㎡である。調査前、斜面上には重機の進入路が認められ、産業廃棄物が放置されていたことから遺構の残存状況は危ぶまれたが、全面表土剥ぎを実施した結果、多くの遺構を確認することができた。掘り下げは谷底部までを目標とし、2号窯跡の灰原が深くもぐりこんでいるのを確認したが、地盤が軟弱であることと、谷の出口側において築堤工事が並行しておこなわれたため滞水の恐れがあり、完全に掘り下げをおこなうことはできなかった。このため、遺構を確認したのは概ね標高42～43mまでであり、それ以下は遺構を確認することができなかった。

発掘調査は平成14年11月11日～平成15年5月13日の間に実施し、斜面上からは窯跡をはじめ多くの竪穴住居跡・掘立柱建物・土坑・溝・甕棺墓などが確認された。調査は、丘陵斜面を1～6区に区割りをおこない、平成14年度・15年度調査分に分けて順次検出・調査をおこなった。窯跡以外の遺構については、斜面部の比高差が極めて大きく、遺構検出時には土の搬出が容易ではなかったことから検出に手間取った。また、埋土も地山と類似しており、掘方もプランが不整形なものが多く、掘り下げは困難であった。特に埋土中で確認された焼土はカマドの火床にあたる可能性が高いが、袖の確認はほとんどできなかった。一方、遺構内からは須恵器を中心としてたくさんの遺物が出土した。また、粘土の出土が目につき、斜面上の土坑等は須恵器工人の作業場兼住居跡と考えられる。

窯跡は2基確認され、1基は組合と大成建設のご好意により設計変更がおこなわれ、現状のまま三兼池の北側に保存することができた。もう1基は、全長10m近い大型の溝付窯であった。灰原は谷底深くもぐりこむ状況が確認でき、操業は盛んであったと推測できるが、最終的には窯体の側壁・天井壁・床面の還元面・酸化面を全面削り取っていることが明らかになった。また、燃焼部両側壁には粘土を貼り、床面には柱穴が確認され、柱穴で囲まれた中には炭化材が検出された。このように、粘土で壁を立てることと柱を使用することは通有の窯では確認できないものである。あるいは窯の構築に必要な構築材の痕跡かと考えたが、炭化材が柱穴群の中だけに見られることから可能性は低い。こうした事例について、近畿から東海地方にかけて分布する横穴式木室と同様に、柱で囲まれた中で遺体を火にかけた可能性が高いと判断し、記者発表を行い、平成15年4月12日に現地説明会を実施した。また、後日炭化材付近の土と周辺の土の分析をおこなったところ、炭化材付近の土にリンが多く含まれることが明らかとなり、遺体を火にかけた可能性がより高まった。

調査の結果、窯跡・土坑が確認された。出土遺物は、須恵器が非常に多いが、土師器煮炊具も斜面上の土坑群から出土している。その他、丘陵裾部には弥生時代中期の甕棺墓が1基ポツンと確認された。さらに、丘陵斜面に細い溝が巡らされ、11～12世紀代の遺物が出土しており、何らかの施設が存在した可能性があるが、明らかにできない。

2. 遺構と遺物

(1) 窯跡

1号窯跡（図版4）

1号窯跡は調査区の東側に位置し、南側に短く突き出す丘陵東側斜面に位置する。表土剥ぎをおこなったところ、灰原と径20cm程度の煙出し部を確認した。窯跡は長さ3mほどの小型のものと判断され、灰原は4～5mの範囲に広がるが、それほど厚くはない。状況から見て、窯跡は1基のみと判断できる。灰原からは、須恵器杯蓋・杯身が採集された。

検出当初、1号窯跡は造成範囲に入っていたが、協議の結果、上大利北土地区画整理組合のご好意により公園部分の造成計画の見直しがおこなわれ、窯体は保存されることとなった。このため、調査は窯跡の存在を確認するに止め、遺構の掘り下げはおこなわなかった。窯跡は貼芝された後、現状のまま三兼池に面した斜面に保存されている。区画整理組合のご好意に、記して感謝申し上げたい。

出土遺物（第10図、図版36）

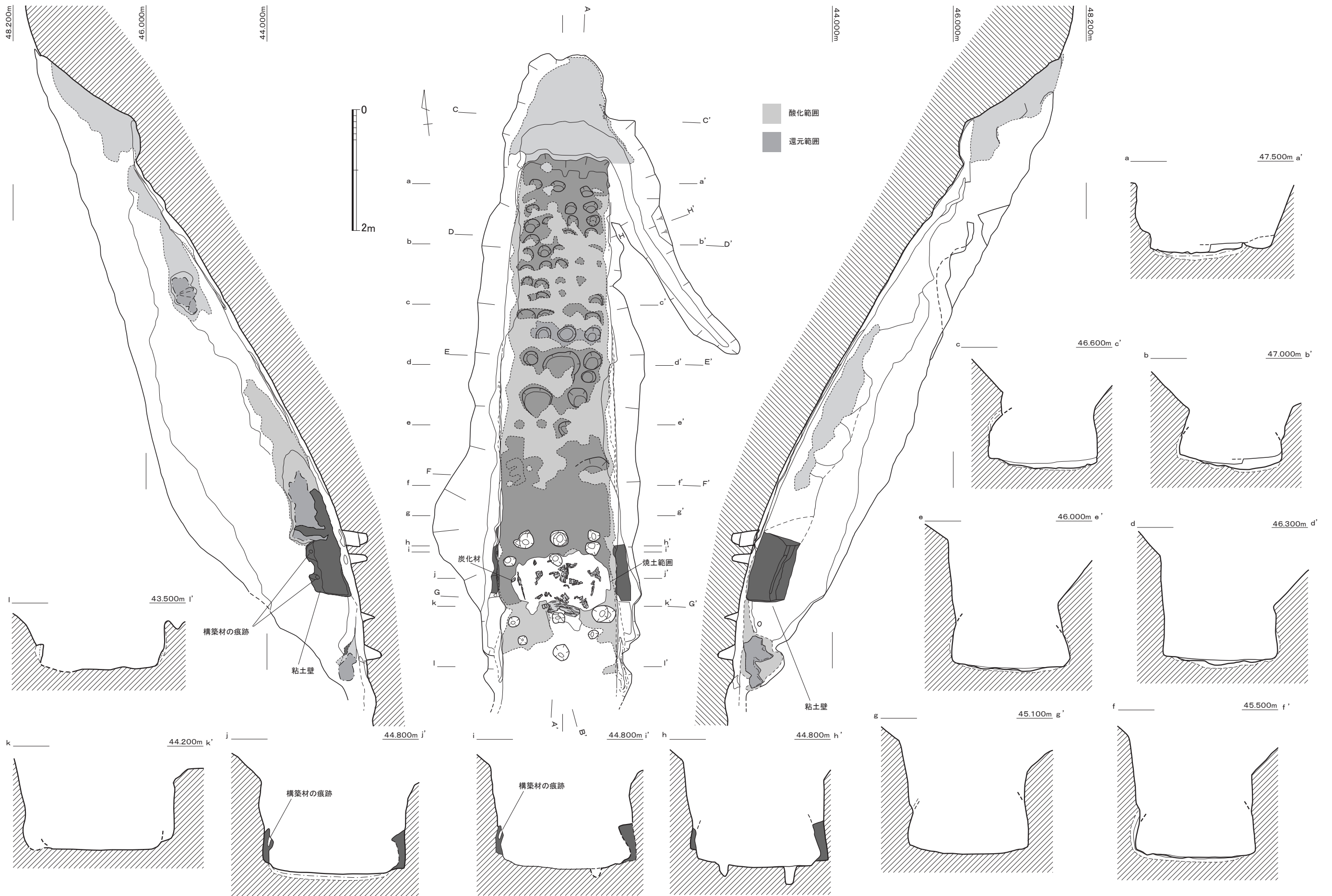
須恵器（1・2） 1は杯B蓋で、口径14.0cmを測る。口縁端部は断面三角形を呈し、天井部は外面約2/3に回転ヘラケズリを施す。つまみは扁平なボタン状を呈す。2は杯B身で、口径13.7cmを測る。体部～口縁部は直線的にのび、大きく開く。底部には低い高台がつき、底部外面では板状圧痕が見られる。

2号窯跡（第6～9図、図版4～20）

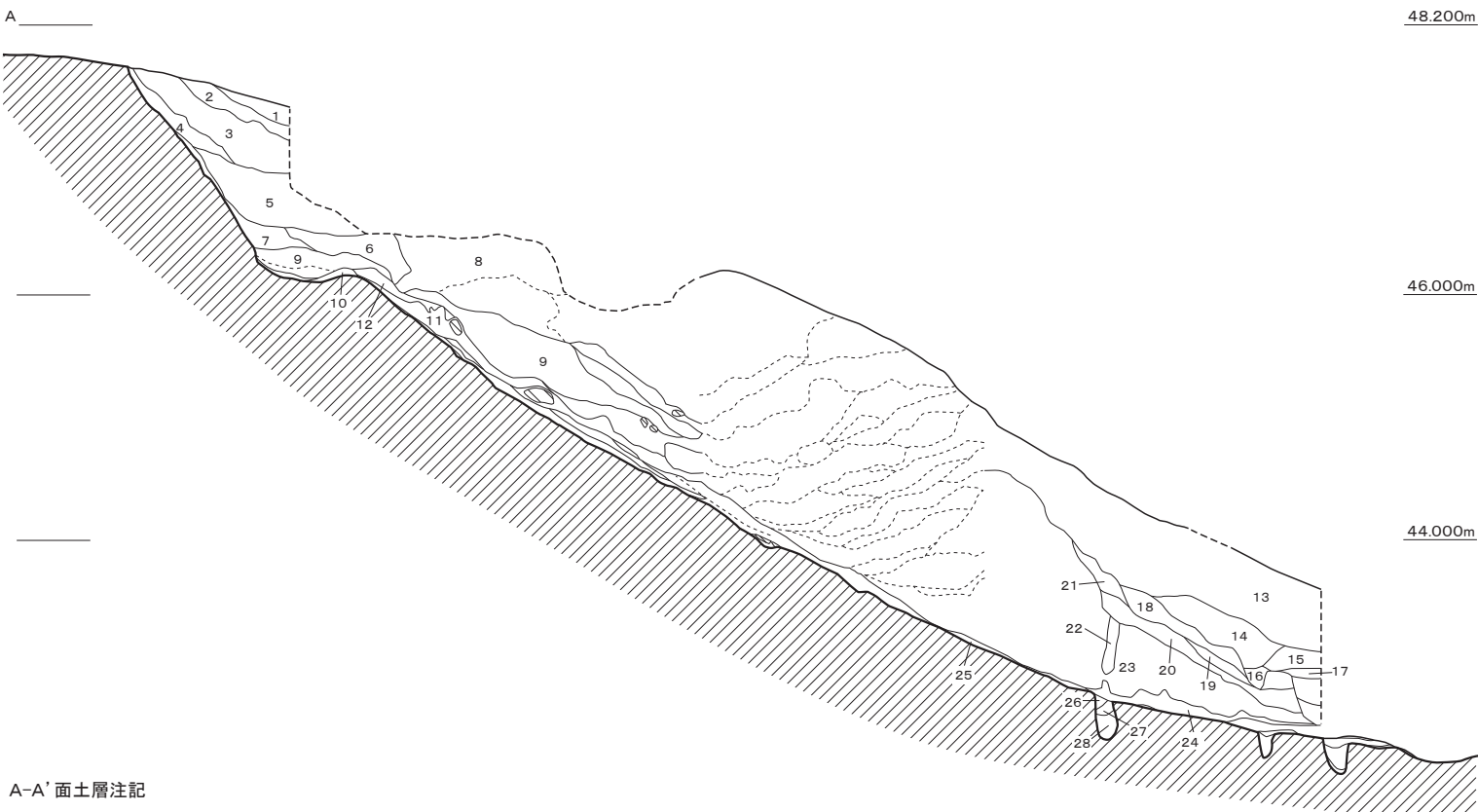
2号窯跡は2区に位置し、南東側に張り出した小丘陵に所在する。主軸はN-3°-E、ほぼ南北方向にとり、焚口を南側に向ける。窯の形態から、地下式で、牛頸窯跡群特有の多孔式煙道窯にあたるが、後述するように操業終了後に大幅な改造をおこなっており、操業時の姿はほぼ失われている。

検出時、2区斜面裾部に灰原が確認された。灰原は狭く、右上には窯体と思われる落ち込みのラインが認められた。このため、落ち込みと灰原が一連となる窯跡が存在すると想定し、灰原を右・中央・左の3区に分けて掘り下げをおこない窯体の検出に努めた。掘り下げをおこなったところ、灰原は一部が深くなり、焼台・炭が確認された。一方、窯体と思われる落ち込みは掘り下げても窯壁が検出できず、空焚き段階で落ちた窯跡ではないかと考えた。このことから、灰原上と落ち込みの部分にそれぞれ窯跡が存在するものと考え、前者を2号窯跡、後者を3号窯跡とした。掘り下げを進めていくと、3号窯跡とした落ち込みの下方に窯壁が確認されたものの、灰原上からは窯体を確認できず、結局窯跡は1基のみ確認された。確認された窯跡は、当初3号窯跡としたが、窯跡が1基のみであることが確認された後は2号窯跡と名称の変更をおこなった。

窯体は焚口・燃烧部手前側を図化できていないが、計測できる範囲では排煙部まで8.94m、作業路上端まで10.63mである。窯跡の平面プランは焚口部付近が最も広く、排煙部にむかってすばまる。排煙部右側には作業路が取り付け、斜面下方にむかって直線的にのびた後、わずかに向きを変える。



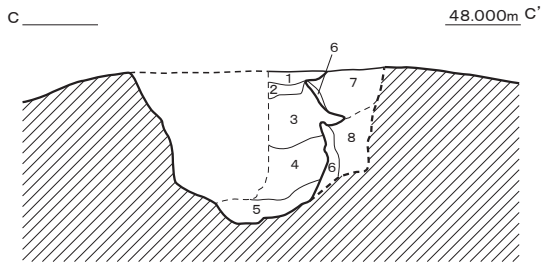
第6図 2号窯跡実測図 (1/60)



A-A' 面土層注記

1. にぶい黄褐色土(10YR5/4)バイラン土を少量含む。炭少量混じる。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2)バイラン土を少量含む。炭多く混じる。
3. にぶい黄褐色土(10YR5/4)バイラン土を少量含む。灰黄褐色土(10YR4/2)ブロックをわずかに含む。
4. にぶい黄褐色土(10YR5/4)にぶい赤褐色土(5YR5/3)ブロックを多く含む。炭僅かに含む。
5. 明黄褐色土(10YR6/6)灰黄褐色土(10YR5/2)を薄く層状に含む。互層か？バイラン土を多く含む。
6. にぶい黄褐色土(10YR5/4)バイラン土を多く含む。
7. 褐色土(10YR4/6)バイラン土を多く混じる。
8. 明黄褐色土(10YR6/6)灰黄褐色土(10YR5/2)を薄く層状に含む。バイラン土を多く含む。
9. 黄褐色土(10YR5/6)と灰白色土(10YR7/1)の互層。
10. 赤褐色土(5YR4/6)
11. 褐色土(10YR4/4)黒褐色土(10YR2/2)ブロック多く含む。硬く締まる。褐色土(7.5YR4/3)ブロック(焼土、窯壁か？)を多く含む。
12. 明黄褐色土(10YR6/6)粘質土。バイラン土若干混じる。
13. にぶい黄褐色土(10YR5/4)バイラン土を多く含む。炭少量混じる。遺物含む。窯の天井崩落後の流入土。
14. 明黄褐色土(10YR6/6)バイラン土を多く含む。地山層。
にぶい黄褐色土(10YR5/4)が多く混じる。窯の天井崩落土。
15. にぶい黄褐色土(10YR4/3)炭少量混じる。バイラン土を多く含む。遺物含む。
16. にぶい黄褐色土(10YR5/4)灰黄褐色土(10YR5/2)多く混じる。バイラン土を多く含む。
17. 褐色土(10YR4/4)バイラン土を多く含む。炭、遺物を含む。マンガンの沈着がみられる。

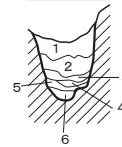
18. 褐色土(10YR4/4)明黄褐色土(10YR7/6)・バイラン土多く含む。地山)のブロックを僅かに含む。
19. にぶい黄褐色土(10YR5/4)バイラン土を多く含む。
20. にぶい黄褐色土(10YR4/3)灰黄褐色土(10YR4/2)を多く含む。
21. 黄褐色土(10YR5/6)バイラン土を多く含む。
22. にぶい黄褐色土(10YR5/4)バイラン土僅かに混じる。
23. 灰白色土(2.5Y8/2)バイラン土・明黄褐色土(10YR7/6)に灰黄褐色土(10YR5/2)が縞状に混じる。
24. 暗褐色土(10YR3/4)炭多く混じる。
赤褐色土(5YR4/6)の焼土塊を多く含む。焚口部の炭化材。
25. 黄褐色土(2.5Y5/4)やや締まる。灰白色(2.5Y8/2)バイラン土を多く含む。
にぶい赤褐色土(5YR4/4)の焼土塊を多く含む。炭多く混じる。
26. 褐色土(10YR4/4)ビット(SP03)内埋土。
27. にぶい黄褐色土(10YR5/4)明黄褐色土(10YR6/6)の小ブロックを僅かに含む。ビット内埋土。
28. 褐色土(10YR4/4)灰オリーブ色土(5Y4/2)ブロックを少量含む。ビット内埋土。



C-C' 面土層注記

1. にぶい黄褐色土(10YR5/4)バイラン土を少量含む。炭少量混じる。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2)バイラン土を少量含む。炭多く混じる。
3. にぶい黄褐色土(10YR5/4)バイラン土を少量含む。
灰黄褐色土(10YR5/2)を薄く層状に含む。炭若干混じる。明赤褐色土(5YR5/6)酸化焙焼成された窯壁の小ブロックを僅かに含む。締まり悪い。
4. 明黄褐色土(10YR6/6)灰黄褐色土(10YR5/2)の互層。橙色土(7.5YR6/6)ブロック、にぶい黄色土(2.5Y6/3)のブロックを多く含む。
3層に比べて、やや締まり強い。3・4層ともに、6層(窯壁)付近は明褐色(7.5YR5/6)に変色している。
5. 褐色土(10YR4/6)バイラン土を多く含む。
6. 赤褐色土(5YR4/6)バイラン土を多く含む。地山層・窯壁。
7. 橙色土(7.5YR6/6)暗灰黄色土(2.5Y5/2)バイラン土を多く含む。地山層。熱による部分変色か？
8. 黄褐色土(10YR5/6)バイラン土を多く含む。褐色土(10YR4/4)少量混じる。暗灰黄色土(2.5Y5/2)多く含む。地山層。

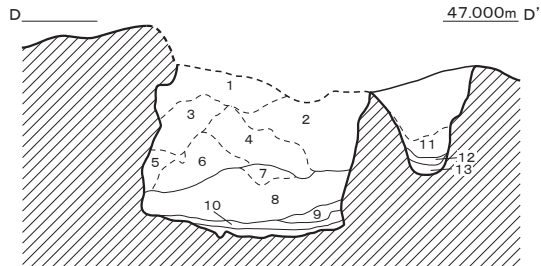
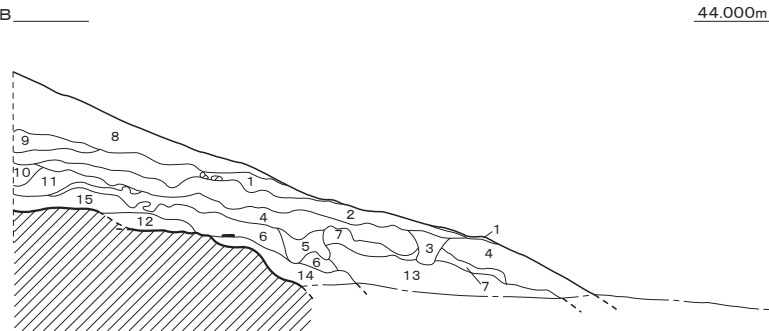
H 46.600m H' H-H' 面土層注記



1. 黄褐色土(10YR5/6)硬く締まる。バイラン土を多く含む。灰黄褐色土(10YR5/2)ブロックを僅かに含む。
2. 灰黄褐色土(10YR6/2)バイラン土を多く含む。にぶい黄褐色土(10YR7/4)が多く混じる。
3. 黄褐色土(10YR5/6)バイラン土を多く含む。赤褐色土(5YR4/6)酸化焙焼成窯壁乃至は天井を僅かに含む。
4. にぶい黄褐色土(10YR5/3)バイラン土を僅かに含む。
5. 黄褐色土(10YR5/6)バイラン土を多く含む。
6. 明黄褐色土(10YR6/6)バイラン土を多く含む。

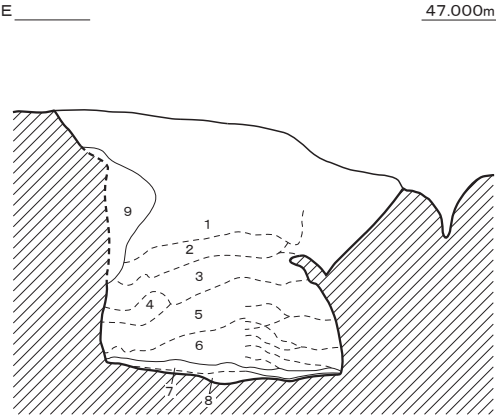
B-B' 面土層注記

1. 褐色土(10YR4/4)粘質土。バイラン土を多く含む。窯壁、遺物、炭を含む層。マンガンの沈着あり。
2. 黒褐色土(10YR3/2)バイラン土を多く含む。黄褐色土(10YR5/6)ブロック僅かに含む。炭、遺物を含む層。灰原の層か？
3. 黒色土(5Y2/1)炭、遺物を僅かに含む。
4. 黒褐色土(10YR3/1)バイラン土を多く含む。炭、遺物を含む。にぶい黄褐色土(10YR5/4)ブロックを多く含む。灰原の層。
5. 黒褐色土(10YR3/2)4層より砂の割合多い。バイラン土を少量含む。マンガンの沈着みられる。炭を含む層。灰原から一部流出した層か？
6. にぶい黄褐色土(10YR4/3)細礫を多く含む。黒褐色土(10YR3/2)を薄く層状に含む。炭・遺物含む。
7. にぶい黄褐色土(10YR5/4)バイラン土を多く含む。炭を僅かに含む。
8. にぶい黄褐色土(10YR5/4)バイラン土を多く含む。炭混・遺物含む。窯の天井崩落後の流入土。
9. にぶい黄褐色土(10YR4/3)8層より細粒砂の割合多い。炭・バイラン土を多く含む。8層より少ない。窯の天井崩落後の流入土。
10. にぶい黄褐色土(10YR4/3)バイラン土僅かに含む。炭混、マンガンの沈着が見られる。
11. 褐色土(10YR4/4)バイラン土を多く含む。炭混マンガンの沈着が見られる。
12. 褐色土(10YR4/6)バイラン多く含む。暗褐色土(10YR3/3)炭混。バイラン土多く含む。にぶい橙色土(7.5YR6/4)バイラン土を僅かに含む。
斑状に含む層。上面は一部酸化焙焼成により明赤褐色(5YR5/6)に変色している。貼床部、上面は最終作業面。
13. 褐色土(10YR4/4)バイラン土僅かに含む。炭僅かに混。マンガンの沈着見られる。黒褐色土(10YR3/1)ブロックを僅かに含む。
14. にぶい黄褐色土(10YR5/3)バイラン土を多く含む。黒褐色土(10YR3/1)ブロックを僅かに含む。にぶい黄褐色土(10YR6/4)ブロックを僅かに含む。
15. 褐色土(10YR4/4)バイラン土を僅かに含む。灰黄褐色土(10YR4/2)ブロックを僅かに含む。マンガンの沈着がわずかにみられる。



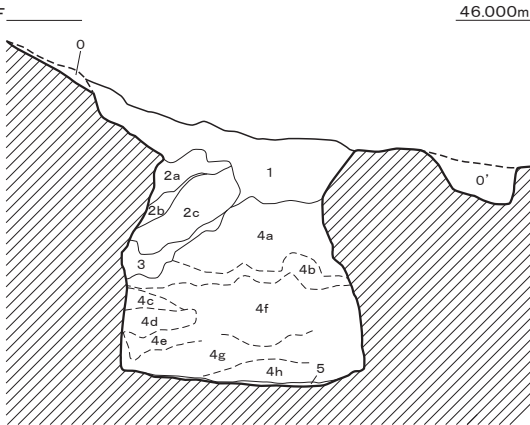
D-D' 面土層注記

1. 明褐色土(7.5YR5/6)と灰黄褐色土(10YR5/2)が混じる。灰色土(N4/)多く含む。バイラン土の中でも顕著である。
2. にぶい黄褐色土(10YR5/4)と明褐色土(7.5YR5/6)が混じる。バイラン土を多く含む。灰色土(N4/)が特に顕著である。
3. 灰白色土(2.5Y8/2)にぶい黄褐色土(10YR5/4)僅かに混じる。灰色土(N4/)を顕著に含む。
4. にぶい黄褐色土(10YR5/4)灰黄褐色土(10YR5/2)多く混じる。明褐色土(7.5YR5/6)ブロックを少量含む。
5. 明褐色土(7.5YR5/6)褐色土(10YR4/4)を多く含む。
6. 灰白色土(2.5Y8/2)にぶい黄褐色土(10YR5/4)多く混じる。灰色土(N4/)を多く含む。
7. 黄褐色土(10YR5/6)灰黄褐色土(10YR5/2)を多く含む。バイラン土を多く含む。
8. 明褐色土(7.5YR5/6)バイラン土多く混じる。灰黄褐色土(10YR5/2)多く混じる。灰白色土(2.5YR8/2)地山層ブロックを含む。
9. にぶい黄褐色土(10YR5/4)灰黄褐色土(10YR5/2)を多く含む。バイラン土を多く含む。赤褐色土(2.5YR4/6)天井、窯壁を僅かに含む。
10. にぶい黄色土(2.5Y6/4)バイラン土を多く含む。炭混じる。天井、窯壁片を多く含む。貼床部か？
11. にぶい黄褐色土(10YR5/4)バイラン土を多く含む。炭若干混じる。
12. 灰黄褐色土(10YR5/2)
13. にぶい黄褐色土(10YR5/4)バイラン土を多く含む。明褐色土(7.5YR5/6)ブロックを僅かに含む。



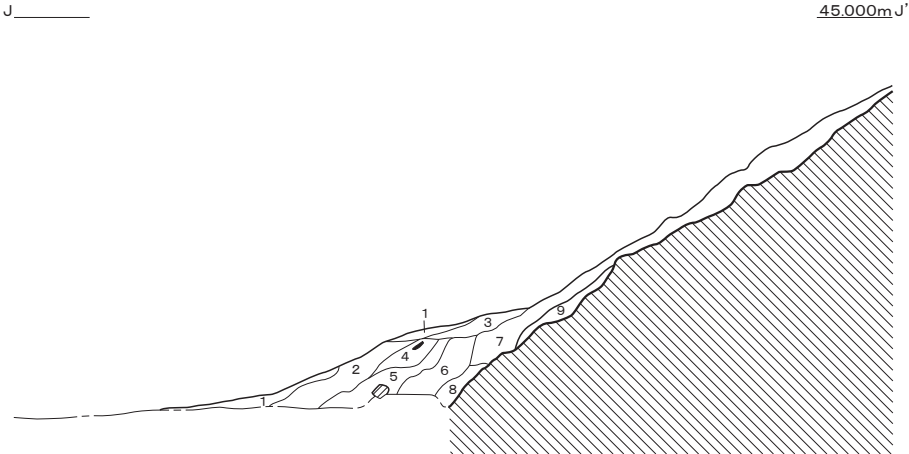
E-E' 面土層注記

1. 明黄褐色土 (10YR6/6) 灰色土 (N4/) 多く含む。にぶい黄褐色土 (10YR5/4) を多く含む。
2. 灰白色土 (2.5Y8/2) 灰色土 (N4/) 多く含む。灰黄褐色土 (10YR5/2) を多く含む。明黄褐色土 (10YR6/6) ブロック僅かに含む。
3. 明褐色土 (7.5YR5/6) 灰色土 (N4/) 多く含む。にぶい黄褐色土 (10YR5/4) が少量混じる。
4. 灰白色土 (2.5Y8/2) 灰色土 (N4/) 多く含む。黄褐色土 (2.5Y5/4) 多く混じる。
5. 灰白色土 (2.5Y8/2) 灰色土 (N4/) 多く含む。



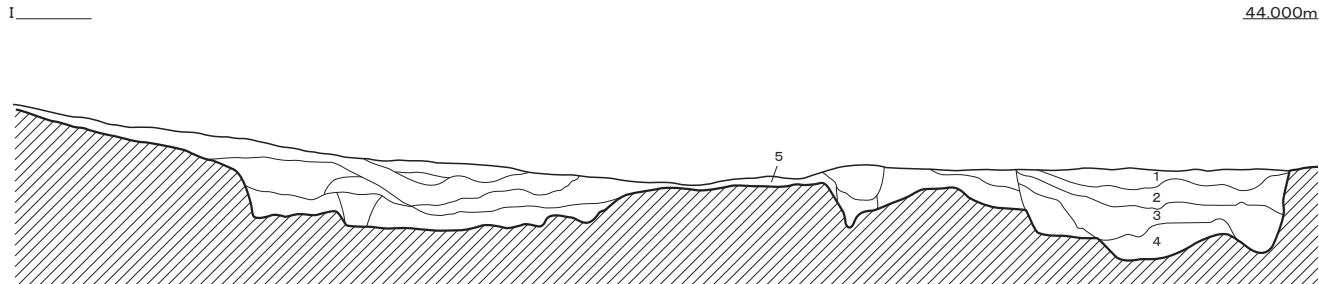
F-F' 面土層注記

0. 雨水による侵食
0. 地山層 (法面掘削部分)
1. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 明褐色土 (7.5YR5/6) 混じる。ほぼ均等に混じるが、前者の方が若干割合が多いように思われる。パイラン土を多く含む。
 2. a. 明褐色土 (7.5YR5/6) 地山層。
b. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) パイラン土を多く含む。
c. 明褐色土 (7.5YR5/6) 灰白色土 (2.5Y8/2) に灰色土 (N4/) パイラン土を多く含む。斑状を呈する地山層。
 3. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) パイラン土を多く含む。
 4. a. 明褐色土 (7.5YR5/6) 灰白色土 (2.5Y8/2)・灰色土 (N4/)・パイラン土を多く含む。
b. 明褐色土 (7.5YR5/6) 灰白色土 (2.5Y8/2)・灰色土 (N4/)・パイラン土を多く含む。灰黄褐色土 (10YR5/2) 多く含む。
c. 灰白色土 (2.5Y8/2) 灰黄褐色土 (10YR5/2) 少量含む。灰色土 (N4/) パイラン土・明黄褐色土 (10YR6/6) を多く含む。
d. 灰白色土 (2.5Y8/2) 灰色土 (N4/)・パイラン土を多く含む。灰黄褐色土 (10YR5/2) 多く含む。
e. 明黄褐色土 (10YR6/6) パイラン土を多く含む。
f. 明黄褐色土 (10YR6/6) パイラン土を多く含む。灰黄褐色土 (10YR5/2) 多く混じる。
g. 灰白色土 (2.5Y8/2) パイラン土を多く含む。地山層と明黄褐色土 (10YR6/6) の互層。
h. 灰白色土 (2.5Y8/2) パイラン土・灰黄褐色土 (10YR5/2)・明黄褐色土 (10YR6/6) を多く含む。
 5. 褐色土 (10YR4/6) 粘土混じる。



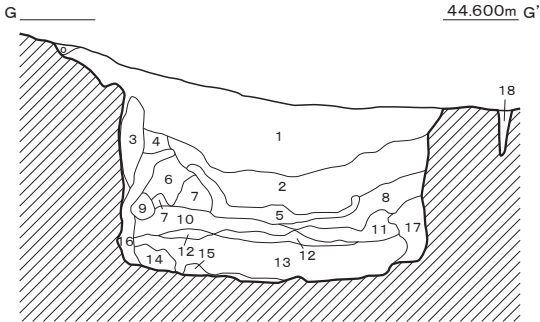
J-J' 面土層注記

1. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) パイラン土を少量含む。炭・遺物を若干含む。
2. 黄褐色土 (10YR5/8) 粘質土。パイラン土を少量含む。炭・遺物を含む。1層より多い。
3. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) パイラン土を少量含む。
4. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) パイラン土を少量含む。炭・遺物・窯壁を含む。灰原の層。
5. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) パイラン土を多く含む。炭・遺物を含む。4層より多い。灰原の層。
6. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) パイラン土を僅かに含む。マンガンの沈着がみられる。
7. 黄褐色土 (2.5Y5/4) パイラン土を多く含む。橙色土 (7.5YR6/6) ブロック多く含む。
8. 灰黄褐色土 (10YR4/2) パイラン土を僅かに含む層。マンガンの沈着がみられる。
9. 灰黄褐色土 (10YR4/2) パイラン土を僅かに含む。地山層。



I-I' 面土層注記

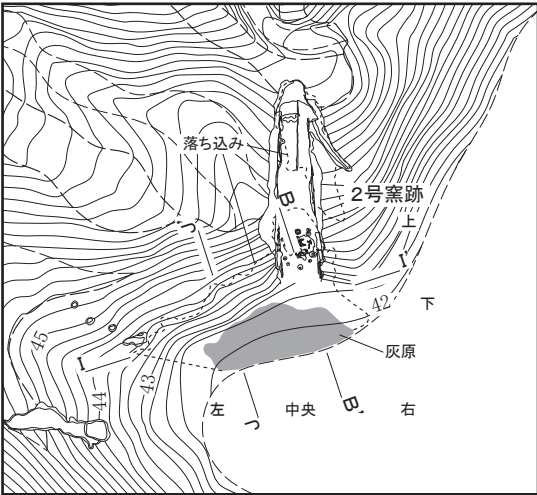
1. 褐色土 (10YR4/4) 粘質土。パイラン土を多く含む。窯壁、遺物、炭を含む層。マンガンの沈着あり。
2. 黒褐色土 (10YR3/2) パイラン土を多く含む。黄褐色土 (10YR5/6) ブロック僅かに含む。炭・遺物を含む層。灰原の層か？
3. 黒褐色土 (10YR3/1) パイラン土を多く含む。炭、遺物を含む。にぶい黄褐色土 (10YR5/4) ブロックを多く含む。灰原の層。
4. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 細礫を多く含む。黒褐色土 (10YR3/2) を薄く層状に含む。炭・遺物含む。
5. 黄褐色土 (2.5Y5/4) パイラン土を多く含む。橙色土 (7.5YR6/6) ブロック多く含む。



G-G' 面土層注記

0. 雨水による侵食
1. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) パイラン土を多く含む。炭少量混じる。遺物含む。窯の天井崩落後の流入土。
 2. 明黄褐色土 (10YR6/6) パイラン土を多く含む。地山層ににぶい黄褐色土 (10YR5/4) が多く混じる。窯の天井崩落土。
 3. 白色土 (5Y8/1) に灰黄褐色土 (10YR4/2)・明黄褐色 (10YR7/6) を含む。パイラン土 (地山層)。天井崩落土。
 4. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 3層のブロックを多く含む。
 5. 褐色土 (10YR4/4) 粘質土。比較的硬く締まる。崩落した天井部か？
 6. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 明黄褐色土 (10YR6/6)・パイラン土を多く含む。地山層をブロック状に多く含む。
 7. 褐色土 (10YR4/4) 粘質土。にぶい黄褐色土 (10YR5/4) との互層。天井崩落後の流入土。
 8. 明黄褐色土 (10YR6/6) にぶい黄褐色土 (10YR5/4) がほぼ同じ割合で混じる層。パイラン土を多く含む。天井崩落後の流入土。
 9. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘質土。暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3) ブロックを多く含む。生焼け状態の窯壁の流入か？
 10. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) パイラン土を多く含む。
 11. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 粘質土。にぶい黄色土 (2.5Y6/4) を層状に僅かに含む。明赤褐色土 (5YR5/6) ブロックを僅かに含む。天井崩落後の流入土。
 12. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 天井崩落後の流入土。
 13. 明黄褐色土 (10YR6/6) パイラン土 (地山層) を多く含む。にぶい黄褐色土 (10YR5/4) を多く含む。天井崩落土、或いは崩落後の流入土。
 14. 暗褐色土 (10YR3/3) パイラン土を僅かに含む。明黄褐色土 (10YR6/6)・灰白色土 (5Y8/1) いずれも地山層が多く混じる。焼成時の堆積層か？
 15. 暗褐色土 (10YR3/4) 炭多く混じる。焼成時の堆積層か？
 16. 褐色土 (10YR4/4) 粘質土。にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘質土。下方へ向かうにつれて漸移的に変化。硬く締まる。補修壁。
 17. 褐色土 (10YR4/4) 粘質土。硬く締まる。パイラン土を少量含む。マンガンの沈着みられる。窯の補修壁。
 18. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) パイラン土を多く含む。ピット内埋土。

2号窯跡・灰原土層位置図



(1/400)



完掘した結果、窯体は還元面のほとんどすべてを削り取り、焚口・燃烧部～烧成部に柱穴・炭化材・焼土・粘土壁をもつ極めて特殊な窯跡であることが判明した。窯体内の堆積土は、天井部を構成する地山層の崩落土は認められるが、還元・酸化した窯壁の出土はほとんどなかった。この窯跡は、後述するようにカマド塚状遺構と考え、科学分析の結果からも遺体を火化した可能性が高く、梅頭1・2次調査事例と同様に須恵器窯を墳墓に転用したものと考えられる。

焚口・燃烧部 焚口部は側壁に烧成部入口と認められる天井壁が残っており、位置を確定できない。また、床面は酸化面まで削り取られるが、側壁を見ると還元面が手前側まで残存している。ここも削られて、燃烧部手前側は失われている可能性が高いが、仮にここを燃烧部の境としておく。烧成部との境は床面の傾斜変換点とすると、燃烧部長は主軸上で1.2m、幅1.88～1.93m。烧成部へむかって4°上がる。床面にはカマド塚状遺構の手前側の柱穴がかかる。また窯体内縦断土層を見ると、天井部を構成していたと思われる地山崩落土（A-A'面19層）が柱穴上にあることが確認できる。

烧成部 烧成部はほぼ直線的にすばまる。最大幅は燃烧部との境でとり1.93m、烧成部上位では幅1.40mと最も狭くなる。烧成部長は主軸上で7.45m、下位から弓なり状に上がり、下位では12°、上位では34°となる。床面が削られているため作業時の傾斜角度は不明であるが、あまり著しい差はないものと思われる。

床面は、還元面を大部分削っており、酸化面がむき出しになる。削り残された還元面では、置台の痕跡が認められる。これから見ると、傾斜変換点から約3.5m入ったところから上位は段状に置台が配置されており、11段程度が復元できようか。上位は径15cm程度の置台が多いが、中位は径50cm程度の大型のものが多くようである。貼床は、窯尻を除いてほとんど失われている。また、下位にはカマド塚状遺構の柱穴が確認できた。

烧成部の土層観察では、天井部と考えられる窯壁がほとんどなかった。あるいは窯壁上の地山部分を掘り上げた可能性も考えたが、床面には地山由来の崩落土層が確認され、窯体内が削られカマド塚状遺構が作られる段階はトンネルが開いた状態であったと言える。

排煙部 窯尻床面には、抑焰柱の痕跡は認められなかった。烧成部上位の窯体側壁が両側とも大きく削り取られていることから、窯体内の削りこみの時にここまで削った可能性がある。幅1.33m。

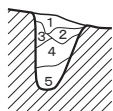
作業路 作業路は窯尻から南東方向に直線的にのびた後、わずかに方向を変える。窯尻の後背に設けられる土坑に接続し、土坑は主軸上で1.69m、作業路接続部まで1.75m、接続部から作業路先端までは約4m。幅は検出面で30～74cm、床面で10～23cmと狭い。埋土は黄褐色土を主体とする。

窯背部土坑は、床面は浅く掘りこまれ、排煙部よりやや下がる。深さは最大1.5mほどである。土坑内はほぼ全面的に被熱を受けており、全体的に酸化面が広がる。窯体内の削り込みは、この部分には認められないようである。

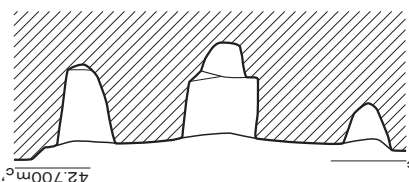
前庭部・灰原 前庭部はすでに失われており、詳細は不明。灰原は焚口・燃烧部では確認できず、燃烧部から続く平坦面の落ち際からはじまる。主には斜面下方にのびるが、一部トレンチを設定して重機で掘り下げをおこない、灰層を確認し遺物を取り上げた程度で深さがどの範囲に続くかは確定できない。検出時に確認できたのは、幅約7m×長さ2.6mの範囲である。

SP05

d 43.100m d'



1. にぶい黄褐色土(10YR4/3)赤褐色土(5YR4/6)酸化燐焼成窯壁、ないしは天井を多く含む。
2. 褐色土(10YR4/6)バイラン土を多く含む。
3. にぶい黄褐色土(10YR5/4)バイラン土を僅かに含む。
4. にぶい黄褐色土(10YR4/3)バイラン土を多く含む。
5. 明赤褐色土(5YR5/6)を僅かに含む。
5. にぶい黄褐色土(10YR5/4)バイラン土を少量含む。



SP06

e 42.700m e'



1. にぶい黄褐色土(10YR5/4)バイラン土を多く含む。炭僅かに含む。下部に僅かにシルト含む。

SP09

f 42.500m f'



1. 黄褐色土(10YR5/6)バイラン土を多く含む。マンガンの沈着が若干みられる。

SP10

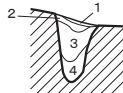
g 42.500m g'



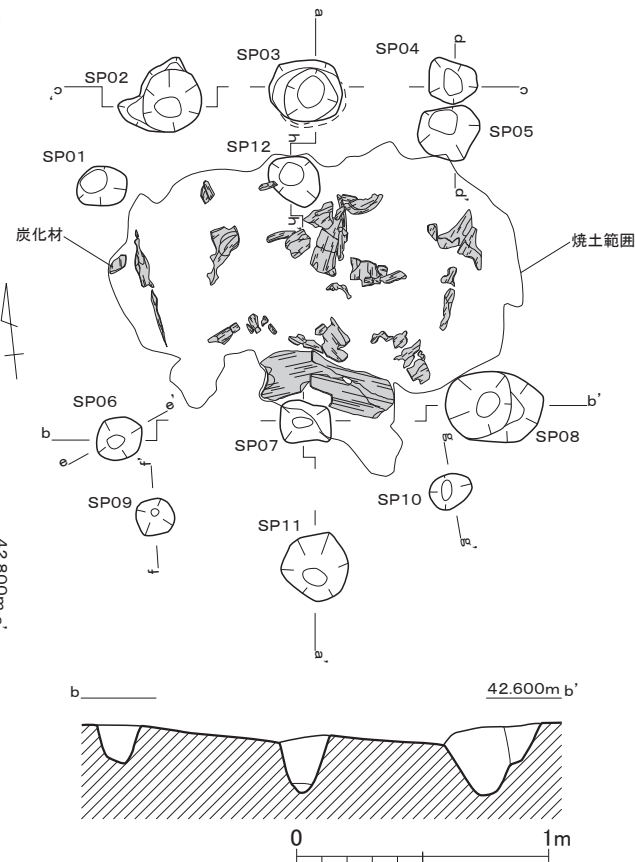
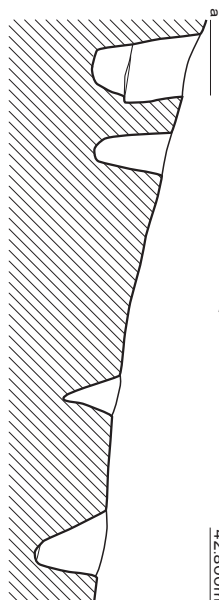
1. 黄褐色土(10YR5/6)バイラン土を多く含む。
2. 灰白色土(5Y8/1)バイラン土-地山層

SP12

h 43.000m h'



1. 赤褐色土(5YR4/8)褐色土(7.5YR4/3)の焼土塊を僅かに含む。炭多く含む。バイラン土を少量含む。
2. 褐灰色土(10YR4/1)窯壁の流れ込みか？
3. 暗褐色土(7.5YR3/3)
4. 暗褐色土(7.5YR3/4)



第9図 2号窯跡カマド塚状遺構実測図 (1/30)

カマド塚状遺構 焚口・燃烧部～焼成部において検出された。まず、遺構の検出状況について記しておく。遺構を初めに確認したのは、焚口部の掘り下げ時であった。まず確認されたのは、側壁部分に粘土壁が認められたことである。粘土壁は厚さ7cmほどあり、横断面の写真で確認できるように、窯体内の埋土とは明らかに区別できるものであったが、部分的な粘土の沈み込みかと思い、手前側は除去してしまった。さらに床面まで掘り下げると、灰層が全く認められず、代わりに部分的に炭化材・焼土の集中が認められた。この時点で、改めて粘土壁の断面を観察したところ、側壁に貼り付けられた状況が確認できたことから、通常の須恵器窯の焚口・燃烧部とは異なる遺構が存在することが明らかとなった。窯の掘り下げにあたっては、検出された炭化材・焼土を除去せずに保護措置をとりながら慎重に進めていったところ、その周辺に柱穴が検出された。柱穴は、埋土中に炭化材の存在を認めることはできず、窯体内埋土とは異なるものであった。さらに窯内を掘り下げると、還元面を失った状況が明らかになり、焚口・燃烧部～焼成部で確認された柱穴・炭化材・焼土・粘土壁と合わせて須恵器窯を利用して別種の施設を作っているものと判断された。

次に、焚口・燃烧部～焼成部で確認された遺構について記しておく。まず床面上に確認されるの

は、炭化材・焼土と柱穴である。炭化材・焼土は窯体主軸に直交し、長さ1.63m×幅1.31mの範囲で確認され、炭化材下には焼土が含まれる。炭化材を精査したところ、最大長さ50cm×幅17cmの比較的大型のものをはじめ、多数の材を確認することができた。検出された材を観察すると、左側に長さ47cmの細長い材を窯体主軸とほぼ平行する方向に置き、同様の材は右側にも長さ25cm程度のものが観察できる。両者の間は約1.2mである。それ以外の炭化材は、おおむね窯体主軸と直交する方向に配置される。また、炭化材の中には樹皮を有する材や小径の丸木材は確認できず、旧状を復元できるものはないが、板材が使用されているものと考えたい。

続いて柱穴について取り上げる。柱穴は12基が確認され、手前側から規則的に配置される。最も手前には、S P 11（径25cm、深さ29cm）が窯体のほぼ中央に認められる。S P 11の両側60cm、奥へ10cmのところには、S P 09・10（径15～18cm、深さ6cm、柱間1.15m）、さらに奥へ30cmのところへS P 06・07・08（径18～25cm、深さ14～26cm、柱間0.75m）が配置される。この列の奥側には炭化材・焼土が広がる。S P 06列の奥側1mにはS P 01・12・05（径16～23cm、深さ30～40cm、柱間0.65～0.78m）、さらに奥側30cmにS P 02・03・04（径17～33cm、深さ21～42cm、柱間0.75m）が配置される。柱穴の配置全体を見ると、窯体主軸に比べて若干ずれている。また、炭化材・焼土に面したS P 01列・S P 06列とS P 02列・S P 09列は柱間隔・配置が異なっている。柱穴の埋土は、柱痕・炭化材の痕跡は認められなかったが、縦断面土層上のS P 03上に幅20cm弱の細長い柱状の土層が見られる。

側壁は、右側壁は幅1.72mで20cm、左側壁は幅1.84mで30cmほど掘り込んで、厚さ7～15cm、高さ32～92cmの粘土壁を貼っており、この範囲は床面上の柱穴の配置範囲とほぼ合っている。粘土壁内には炭化材の痕跡が認められ、構築材と考えられる。また左側壁には、壁を高さ65cm、幅10cmほど溝状に掘り込んで粘土を詰め込んだ状況が確認できる。これより奥壁側の粘土壁は薄く、1cm程度であり、溝状に掘り込んだ箇所は床面で確認される最も奥側のS P 02列と同じ位置にあたる。

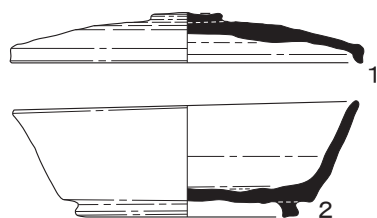
なお、梅頭・本堂遺跡群の窯跡出土炭化材の分析結果は『牛頸梅頭・本堂遺跡群』大野城市文化財調査報告書第87集に掲載しているが、カマド塚状遺構の炭化材はスダジイ・クスノキなど窯の燃料材とほとんど変わらないことが指摘されている。また、炭化材・焼土下と柱穴列奥側の土のリン・カルシウム分析結果から、炭化材下の方がリンの数値が高い結果が得られている。詳しくは、各報告を御覧頂きたい。

以上、梅頭3次2号窯跡で検出されたカマド塚状遺構の調査状況と検出遺構および科学分析結果について述べてきたが、すでに『大野城市史 上巻』などにおいて明らかにしているように、須恵器窯を墳墓に転用したものと考えている。詳しくは、まとめの項で触れたい。

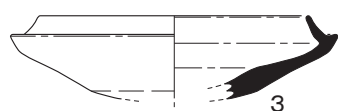
出土遺物（第10・11図、図版36・37）

須恵器（3～11） 3は杯H身で、復元口径10.6cmを測る。立ち上がりは内傾し、底部は外面約1／3に回転ヘラケズリを施す。4～9は杯H蓋で、復元口径は13.2～14.4cmを測り、7～9の器高は比較的低い。口縁部はなだらかに開くもの（4・6・8）と直立に近い傾きになるもの（5・7・9）がある。天井部外面の調整は手持ちヘラケズリ（4）、中央部をナデ、その周辺を回転ヘ

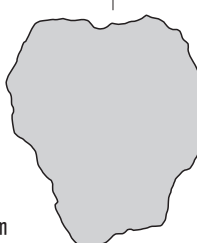
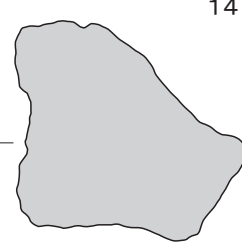
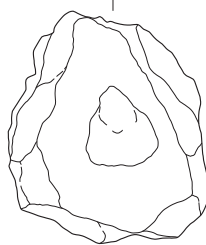
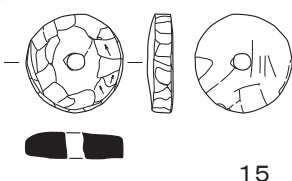
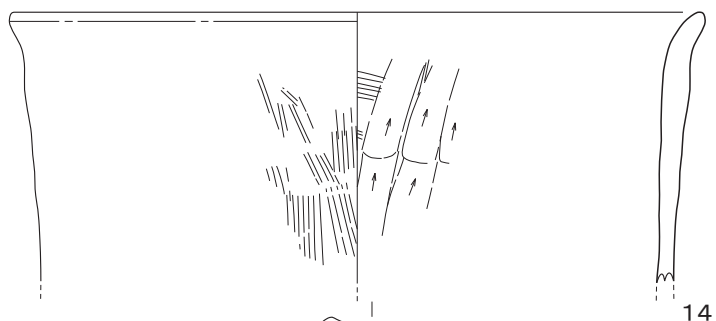
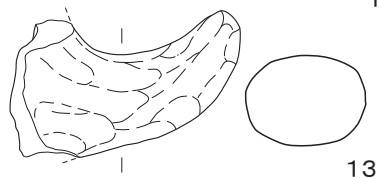
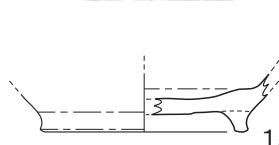
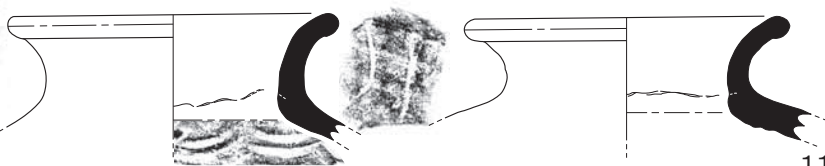
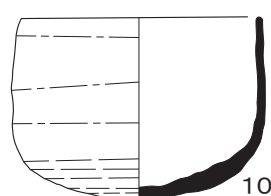
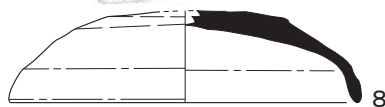
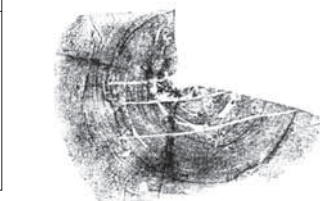
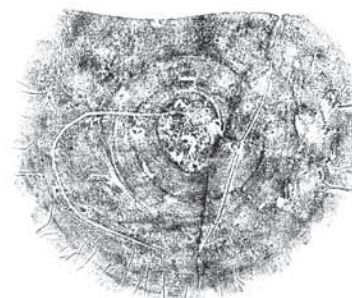
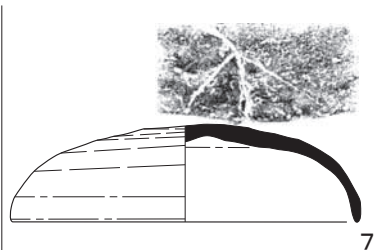
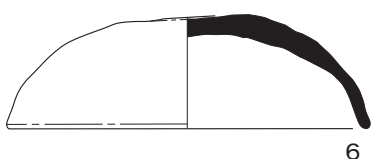
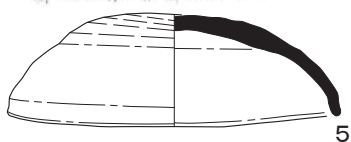
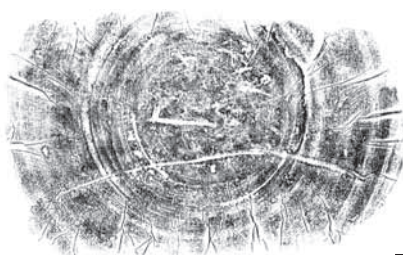
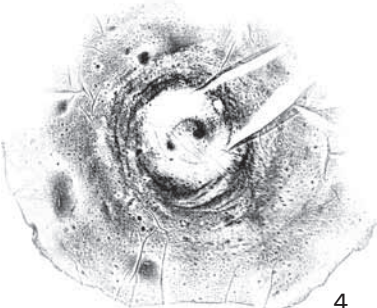
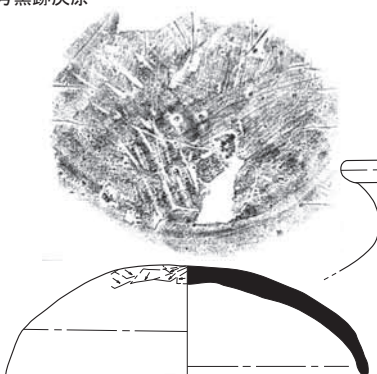
1号窯跡灰原



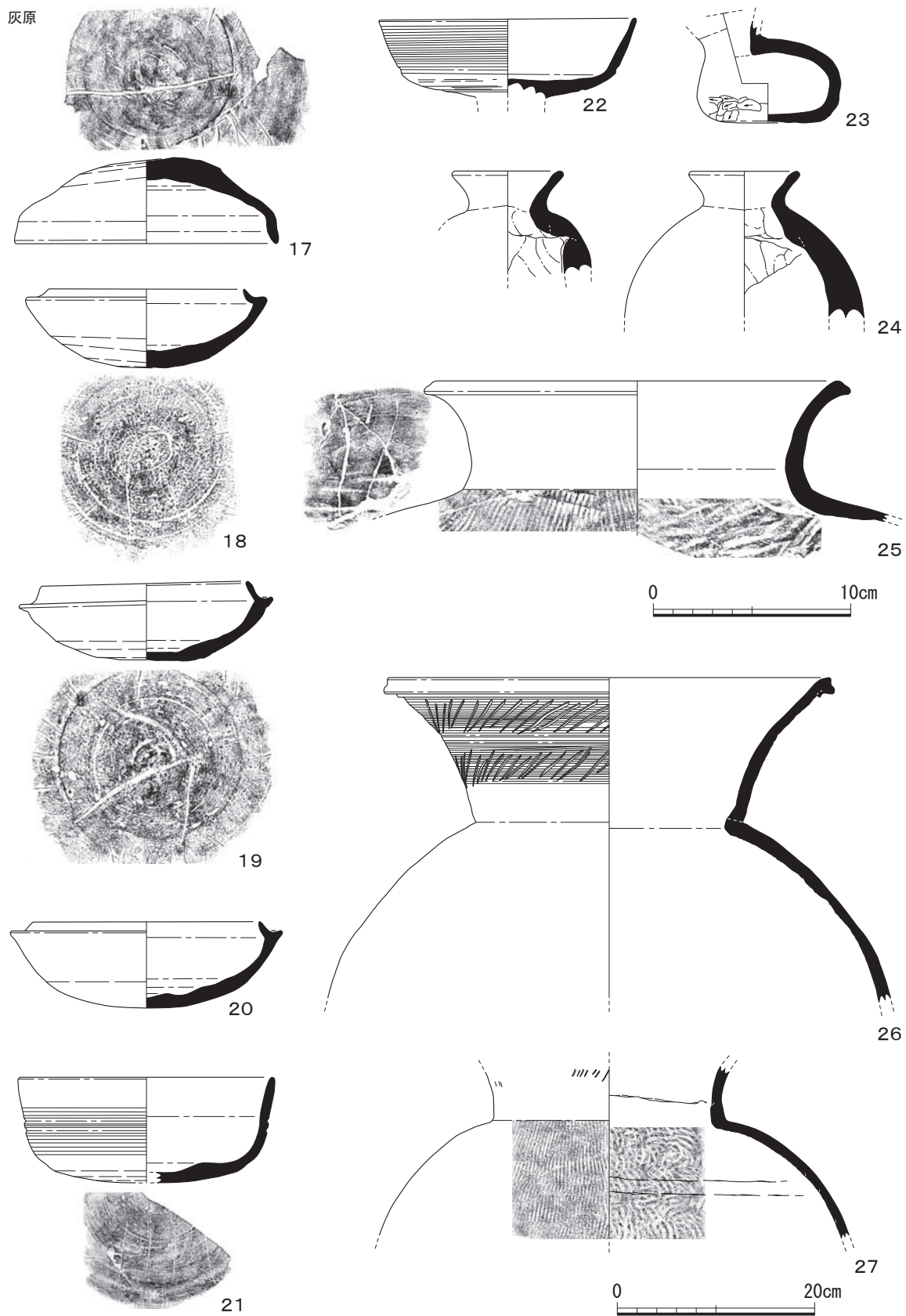
2号窯跡窯体内最下層



2号窯跡灰原



第10図 1号・2号窯跡出土遺物実測図① (1/3)



第11図 2号窯跡出土遺物実測図② (26・27は1/6、他は1/3)

ラケズリ（5）、回転ヘラケズリ（8・9）に分かれる。4の内面ではシッタ痕が見られる。10は椀で、口径は9.6cmを測る。体部～口縁部は直線的にのび、直立に近い傾きになる。底部は回転ヘラケズリにより丸みを持つ。11は横瓶で、口径12.95～13.15cmを測る。口縁部は大きく外反し、端部は丸く仕上げられる。頸部外面ではヘラ記号が見られる。

土師器（12～14） 12は椀で、底端部に低い高台がつく。13・14は甑である。13は把手で、ナデによる調整で整形される。14は復元口径27.6cmを測り、口縁部はやや外反する。

土製品（15・16） 15は須恵質の紡錘車である。直径3.9cmを測り、ケズリにより整形する。16は窯壁である。上面はやや還元している。

須恵器（17～27） 17は杯H蓋で、復元口径13.4cmを測る。口縁部は直立に近い傾きになり、天井部では外面約2／5に回転ヘラケズリを施す。18～20は杯H身で、復元口径9.9～11.4cmを測る。立ち上がりは内傾し、底部外面は回転ヘラケズリを施す。21は杯G身で、復元口径13.0cmを測る。体部～口縁部は直線的にのび、やや外傾する。体部外面では沈線・カキメを施す。底部外面は回転ヘラケズリで整形する。22は高杯の杯部で、復元口径13.0cmを測る。体部～口縁部は直線的にのび、大きく開く。外面はカキメを施し、体部下位・底部2ヵ所に沈線が巡る。23は平瓶のミニチュア土器である。全体をナデし、体部下位～底部外面は手持ちヘラケズリを施す。24は提瓶で、復元口径5.6cmを測る。口縁部は回転ナデ、体部は手づくねにより整形する。25は甕で、復元口径21.6cmを測る。口縁端部は断面三角形を呈し、頸部外面ではヘラ記号を施す。26・27は大甕で、26の復元口径は44.8cmを測る。26の口縁端部は四角形に仕上げ、端部外面に窪みをつける。頸部外面ではカキメが見られ、沈線を施した後、沈線上下位に連続斜線文を施文する。体部外面は擬格子タタキ、内面では同心円文当て具痕が見られる。27は頸部外面に連続斜線文を施す。

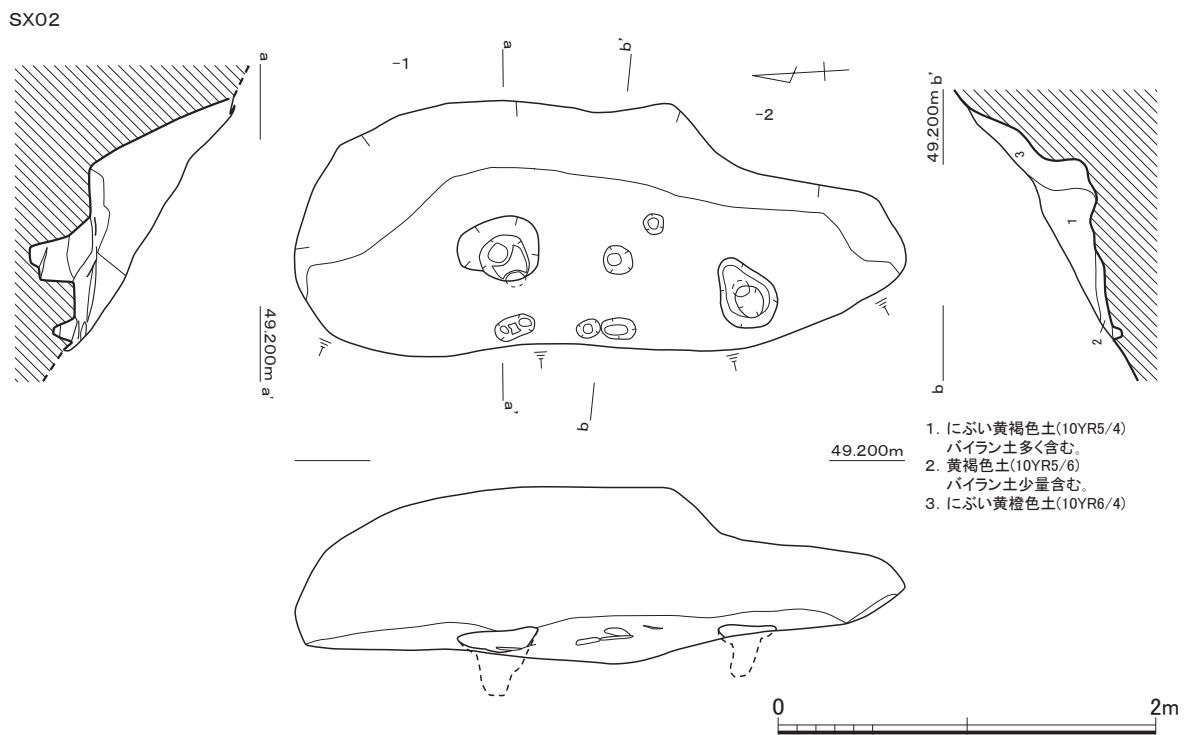
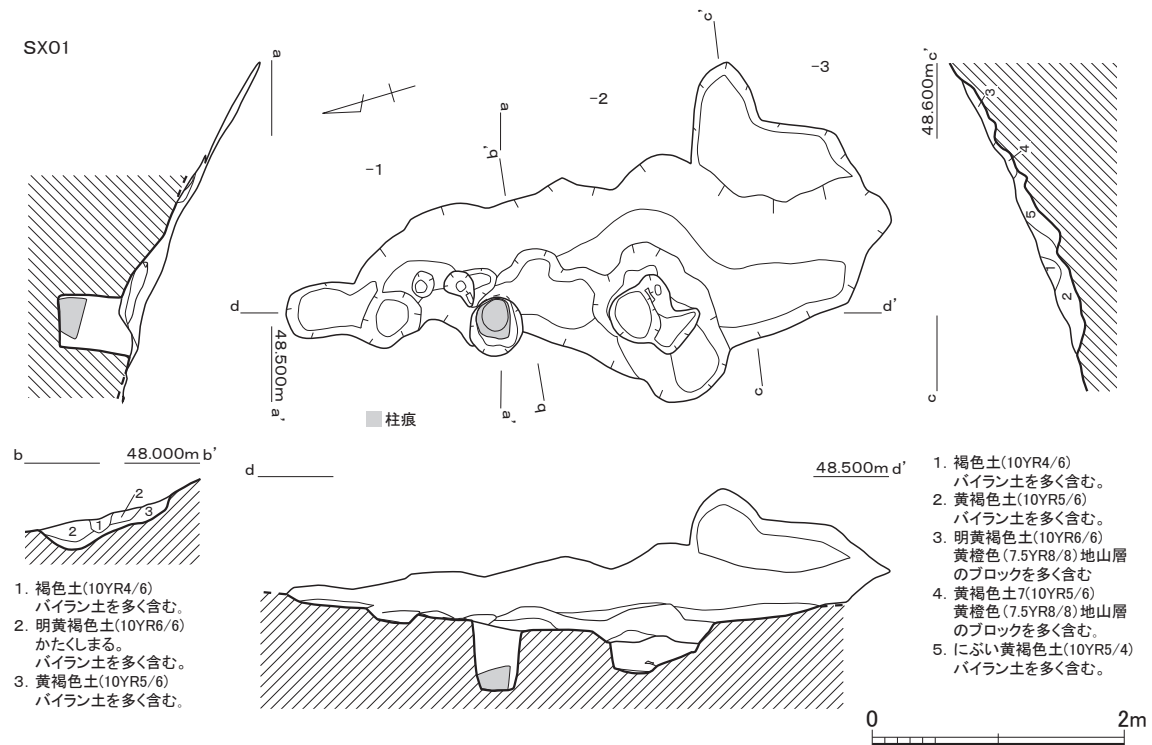
（2）土坑

S X 01（第12図、図版21）

1区に位置する。標高47.3～48.4mの西側斜面に位置し、周辺にはS X 02・06・32、S D 04がある。平面プランは不整形な長楕円形を呈し、長さ4.78m、最大幅2.19m、最深部0.5mを測る。遺構内は階段状になり、床面ではピットが見られる。その内の1基では柱痕が確認できたが、床面の不整さから住居ではない別の性格の建物の可能性が高い。埋土は黄褐色土を主体とする。出土遺物には須恵器・土師器がある。

出土遺物（第13図、図版37）

須恵器（28～32） 28・29は杯H蓋で、それぞれの口径は13.25cm・12.9cmを測る。いずれも口縁部は直立に近い傾きになり、天井部では外面約2／3に回転ヘラケズリを施す。30は杯H身で、口径は11.7cmを測る。受部は短く、断面三角形を呈す。立ち上がりも短く、内傾する。底部では外面約2／3に回転ヘラケズリを施す。31は高杯で、復元口径12.1cmを測る。直線的な口縁部から体部は底部との境で丸みを帯び屈曲する。やや丸みを持つ底部外面ではカキメが見られる。脚部は短脚で、裾部から大きく開き端部付近でなだらかに屈曲する。端部は断面台形状を呈す。32は短頸壺で、復元口径5.6cmを測る。口縁部はほぼ直立し、体部は扁平な球形を呈す。体部外面の一

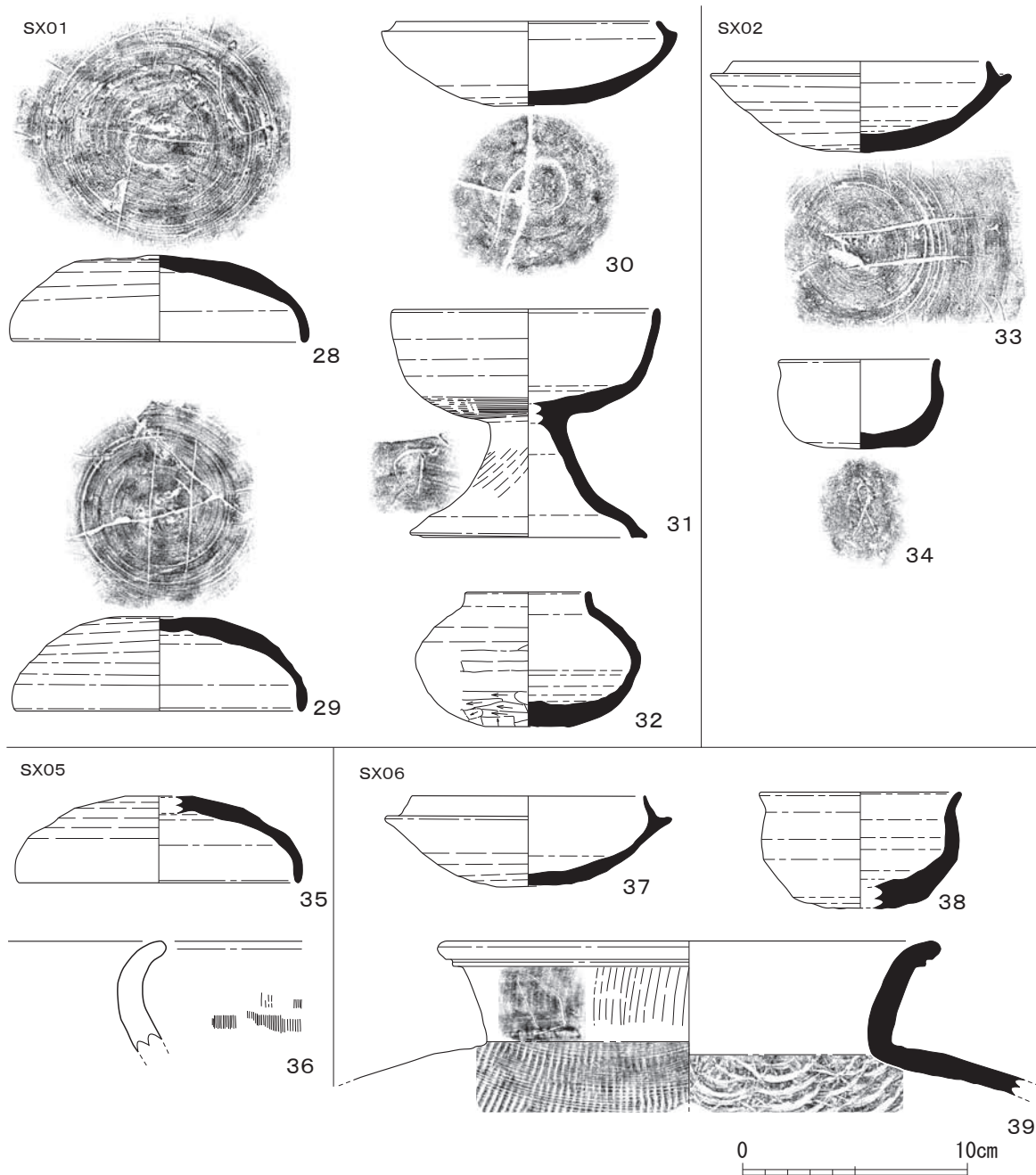


第12図 SX01・02実測図 (SX01は1/60、SX02は1/40)

部では回転ヘラケズリが確認でき、底部外面では手持ちヘラケズリを施す。

SX02 (第12図、図版21)

1区に位置する。標高48.1～49.1mの西側斜面に位置し、周辺にはSX01・06・32、SD04がある。平面プランは長楕円形を呈し、長さ3.23m、幅1.28m、最深部0.78mを測る。床面には30cm大のピットが2基と小ピットが見られる。埋土は黄褐色土を主体とする。床面はほぼ水平



第13図 SX01・02・05・06出土遺物実測図（1／3）

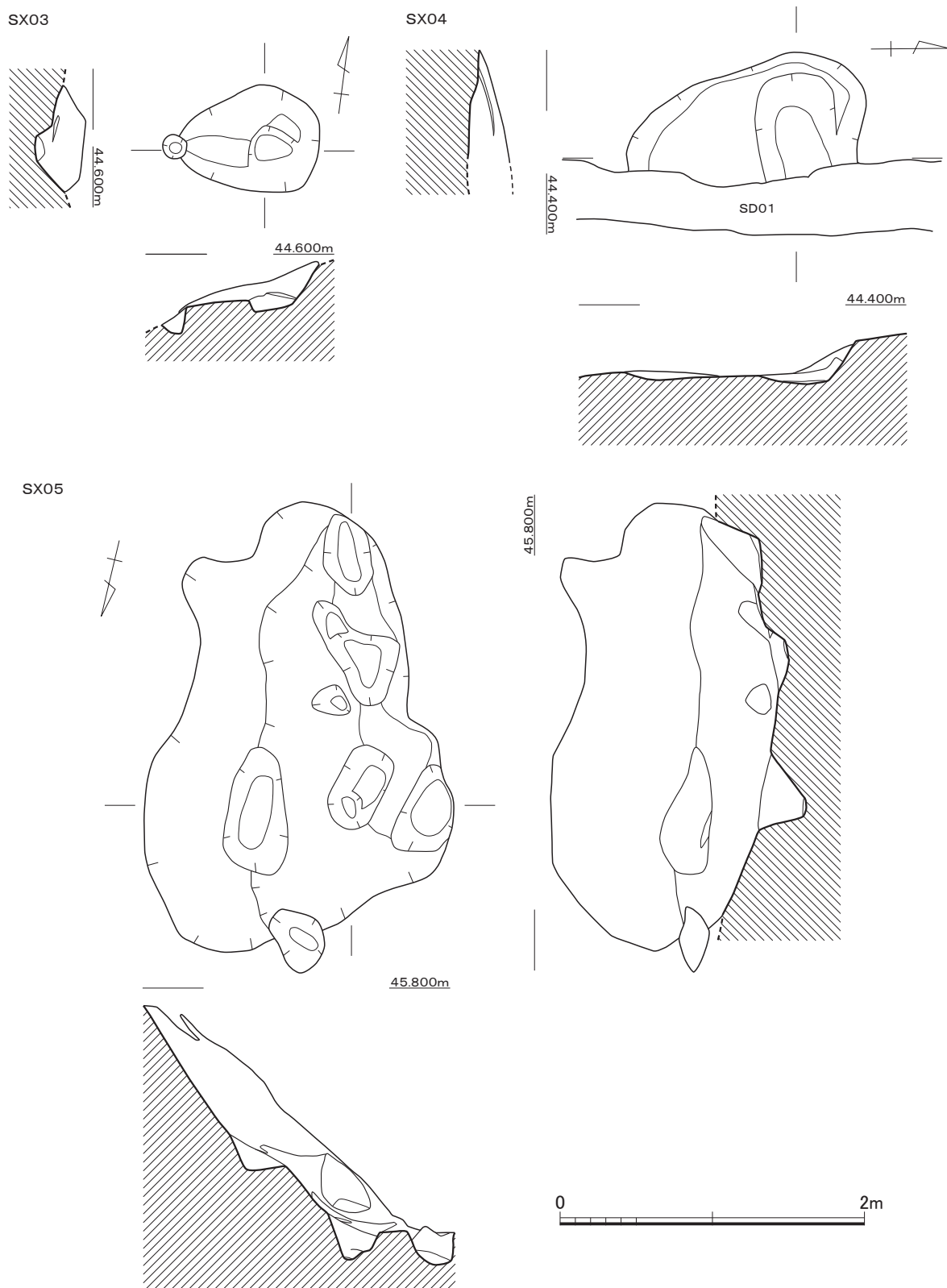
となり、竪穴住居跡と考えられる。出土遺物には須恵器の杯身があり、床より約5cm上位で出土した。出土状況は正位置の状態であった。

出土遺物（第13図、図版37）

須恵器（33・34） 33は杯H身で、口径11.5cmを施す。立ち上がりは短く、内傾する。底部は外面約4／5に回転ヘラケズリを施す。34は鉢で、復元口径7.2cmを測る。口縁部がやや外反する。底部は平底を呈し、外面にヘラ記号と思われる線刻が確認できる。

SX03（第14図）

1区に位置する。標高44.2～44.5mの西側斜面に位置し、周辺にはSD01～03がある。平面プランは楕円形を呈し、長さ0.92m、幅0.7m、最深部0.25mを測る。検出当初はピットのように見



第14図 SX03~05実測図 (1/40)

えたが、掘方は不整であり木根の可能性が高い。出土遺物には須恵器があるが、図化できるものはなかった。

S X 04 (第14図)

1区に位置する。標高44.0～44.2mの西側斜面に位置し、S D 01と切合うが前後関係は不明である。残存部の平面プランは隅丸方形を呈し、長さ1.62m、幅0.79m以上、最深部0.25mを測る。床面では長方形のピットが見られる。出土遺物には須恵器があるが、図化できるものはなかった。

S X 05 (第14図)

1区に位置する。標高44.2～45.8mの西側斜面に位置し、周辺にはS X 04・S D 01・04がある。平面プランは不整形な楕円形を呈し、長さ3.0m、幅2.02m、最深部0.95mを測る。床面はすり鉢状になり、多数のピットが見られるが、不整であり、木根の可能性が高い。出土遺物には須恵器・土師器がある。

出土遺物 (第13図)

須恵器 (35) 杯H蓋で、復元口径12.6cmを測る。口縁部は直立に近い傾きになり、天井部は外面約3／4に回転ヘラケズリを施す。

土師器 (36) 甕である。口縁部は外反し、体部外面ではハケメが確認できる。内面はケズリを施す。

S X 06 (第15図、図版21)

1区に位置する。標高47.3～49.3mの東側斜面に位置し、周辺にはS X 02・32がある。平面プランは不整形に細長く、北西・南東方向にのびる。長さ4.52m、最大幅1.43m、最深部0.83mを測る。床面は段掘り状になり、中央部が一番深い。遺構状況から、住居とは考えにくく、流路状である。北西部の平坦面では須恵器の甕片が集中して出土した。埋土は黄褐色土を主体とする。出土遺物には須恵器・土師器がある。

出土遺物 (第13図、図版38)

須恵器 (37～39) 37は杯H身で、口径10.4cmを測る。立ち上がりの器壁は薄く、内傾し端部は直立に近い傾きになる。底部は外面約2／3に回転ヘラケズリを施す。38は鉢で、復元口径9.0cmを測る。口縁部は外傾し、体部は膨らまず、中位で屈曲する。39は甕で、復元口径22.4cmを測る。口縁端部は丸く仕上げられ、端部外面には断面三角形の沈線を施す。頸部外面ではタタキと思われる痕跡が見られ、またヘラ記号を施す。

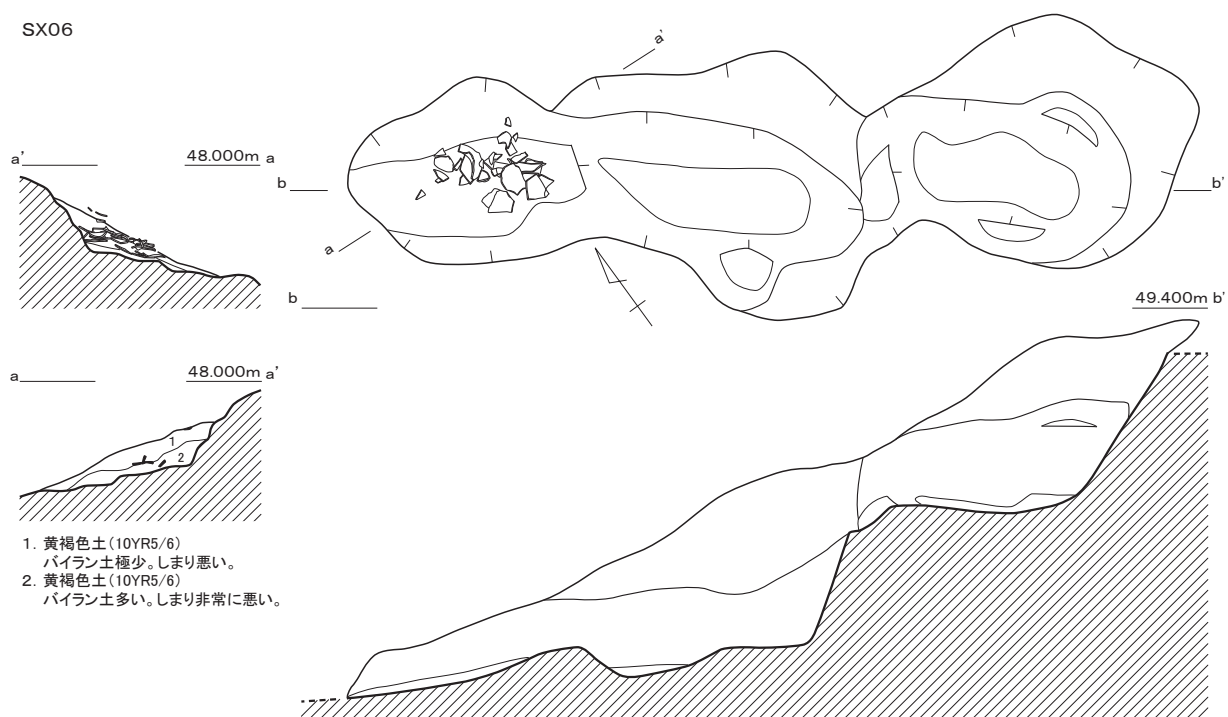
S X 08 (第15図)

6区に位置する。標高44.6～44.9mの東側斜面に位置し、周辺にはS X 09がある。平面プランは楕円形と溝形状が組み合う形状を呈す。楕円形遺構は長さ0.82m、幅0.6m、最深部0.28m、溝状遺構は長さ1.17m、幅0.44m、最深部0.25mを測る。楕円形遺構の埋土では炭化物を多量に含んでおり、他の遺物は含まなかった。

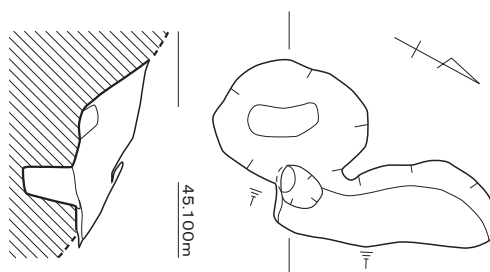
S X 09 (第15図、図版21)

6区に位置する。標高44.4～44.8mの東側斜面に位置し、周辺にはS X 08がある。平面プランは不整形なL字形を呈し、長さ3.09m、最大幅1.9m、最深部0.62mを測る。床面は段掘り状で、遺構東部が一段低くなる。出土遺物には須恵器・土師器があるが、図化できるものはなかった。

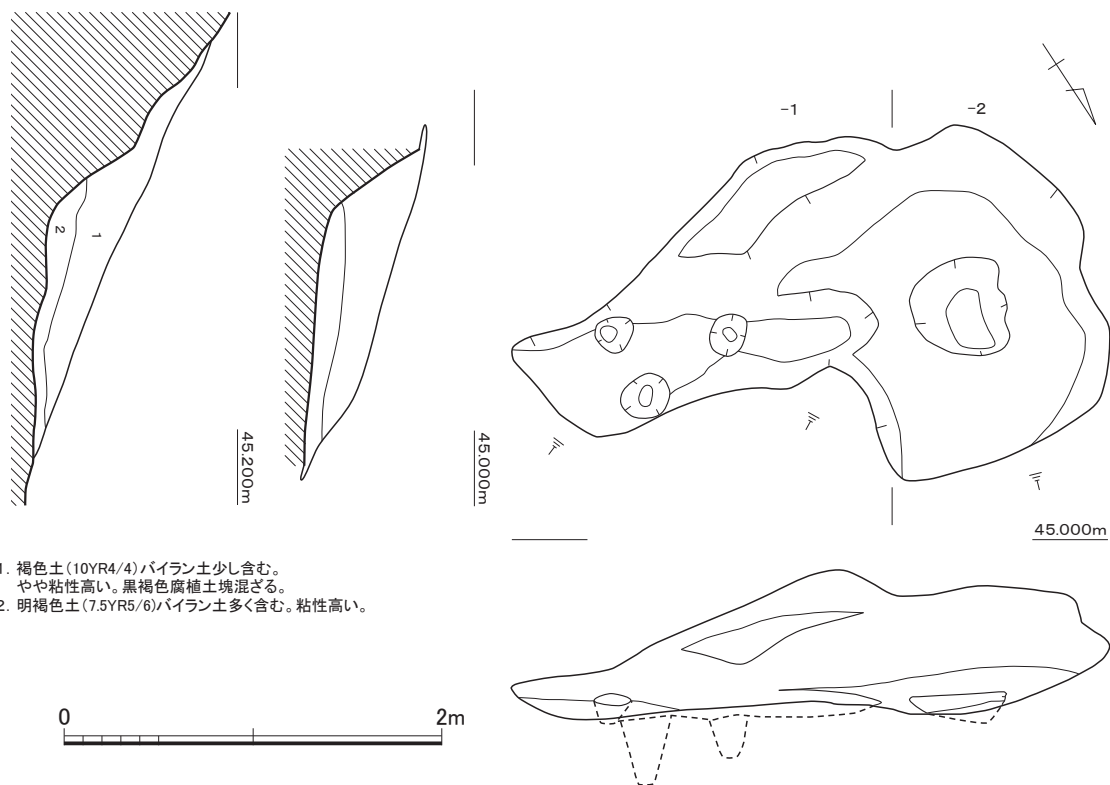
SX06



SX08



SX09



第15図 SX06・08・09実測図 (1/40)

S X 10（第16図、図版21）

5区に位置する。標高48.7～48.8mの南側斜面に位置し、周辺にはS X 11・30がある。平面プランは長楕円形を呈し、長さ0.92m、幅0.43m、最深部0.17mを測る。遺構内では黄褐色・青灰色の粘土が厚さ約10cm程度溜まっていた。粘土貯留遺構と考えられる。出土遺物には須恵器がある。

出土遺物（第17図）

須恵器（40） 椀で、復元口径10.7cmを測る。体部は直線的にのび、口縁端部でやや内湾する。口縁部～体部外面は沈線・カキメを施し、体部下位～底部外面は手持ちヘラケズリにより丸く仕上げる。

S X 11（第16図、図版22）

5区に位置する。標高47.8～48.4mの南側斜面に位置し、周辺にはS X 10・12・15がある。平面プランは長楕円形を呈し、長さ4.13m、幅1.56m、最深部0.49mを測る。床面では直径約60cmの柱穴が2基あり、いずれも柱痕が見られ、竪穴住居跡と考えられる。柱穴間は約2.0mある。埋土は黄褐色土を主体とする。出土遺物には須恵器・土師器・焼土塊がある。

出土遺物（第17図）

須恵器（41～45） 41～43は杯H蓋で、復元口径は12.5～13.8cmを測る。口縁部は直立に近い傾きになるもの（41・42）、なだらかに開くもの（43）がある。いずれも天井部は外面約1／3～2／3に回転ヘラケズリを施す。44は杯H身で、復元口径11.6cmを測る。立ち上がりは直立し、底部は外面約1／3に回転ヘラケズリを施す。45は甕で、体部は球形を呈す。

土師器（46） 甕で、復元口径29.2cmを測る。口縁部は緩やかに外反し、頸部内面には稜が付く。

S X 12（第18図、図版22～24）

5区に位置する。標高47.8～48.8mの南側斜面に位置し、S X 13と接するが前後関係は不明である。平面プランは不整形を呈し、東西方向にのびる。長さ5.38m、幅1.82m、最深部0.58mを測る。床面は段掘りになり、多数のピットが見られる。また、遺構内中央の壁際では須恵器の甕片が集中して出土していた。埋土は上層に黄褐色土、下層に橙色土が堆積する。竪穴住居跡と考えるが、床面が不整である。出土遺物は須恵器・土師器・瓦・鉄滓を含む。

出土遺物（第19図、図版38）

須恵器（47～49） 47・48は杯H蓋で、47の復元口径は10.8cm、48の口径は11.45cmを測る。47の口縁部は直立に近い傾きになり、天井部外面はナデを施す。48の口縁部はなだらかに開き、天井部外面は回転ヘラケズリを施す。49は鉢か？口縁部はわずかに外反する。器壁が厚い。

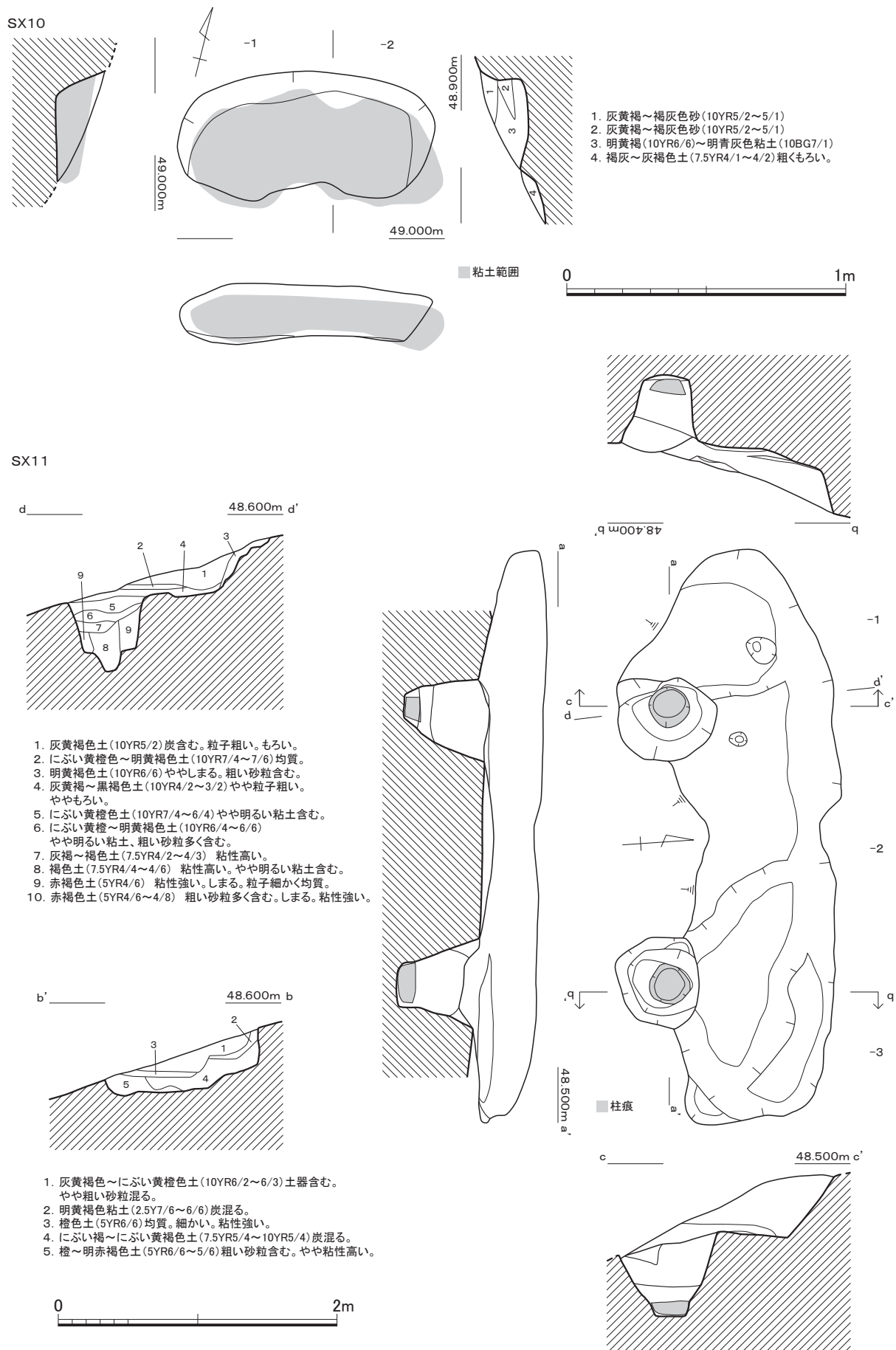
土師器（50） 甕で、復元口径19.2cmを測る。口縁部は外反し、外面にハケメを施す。

瓦（51） 平瓦である。土師質で、凹面には布目、凸面では平行タタキが見られる。

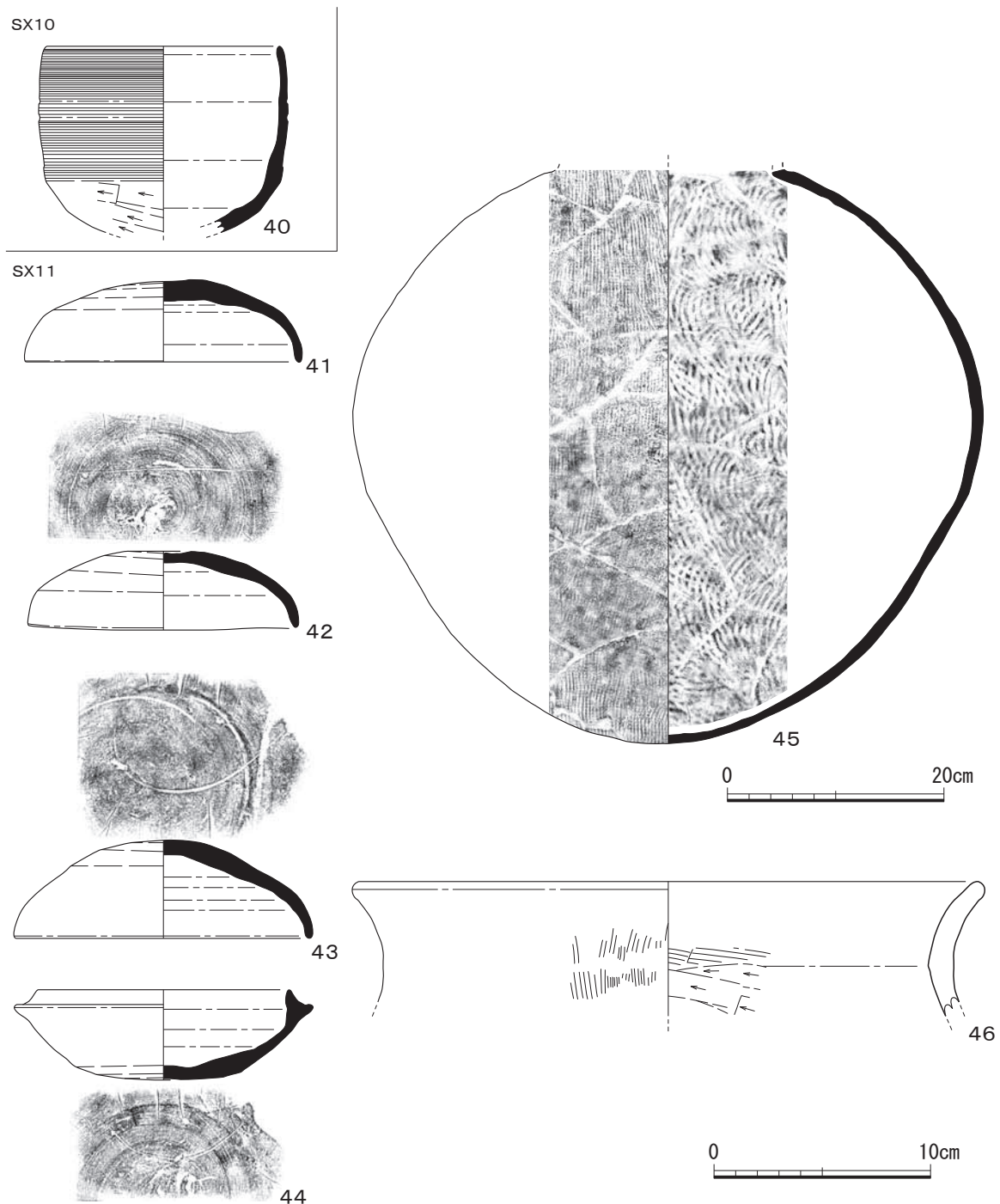
鉄滓（52） 重量7.0gを測り、磁力にわずかな反応がある。

S X 13（第18図、図版22）

5区に位置する。標高47.5～48.8mの南側斜面に位置し、S X 12と接するが前後関係は不明である。平面プランは不整形を呈し、東西方向にのびる。長さ5.43m、幅1.62m、最深部0.48mを測る。床面はS X 12より一段下がっており、不整である。住居跡とも考えられるが、他の性格を持つと



第16図 SX10・11実測図 (SX10は1/20、SX11は1/40)



第17図 SX10・11出土遺物実測図（45は1／6、他は1／3）

思われる。出土遺物には須恵器・土師器・瓦がある。

出土遺物（第19図、図版38）

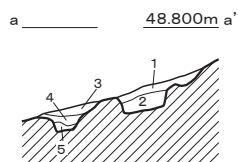
須恵器（53） 杯H身である。体部は丸みを持ち、底部外面はナデにより平坦に仕上げる。比較的器壁が薄い。

瓦（54） 丸瓦である。土師質で、凸面は平行タタキが見られる。

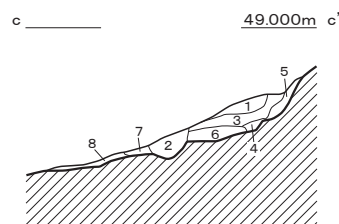
S X 15（第20図、図版24）

5区に位置する。標高47.1～47.7mの南側斜面に位置し、周辺にはS X11～13がある。平面ブ

SX12・13

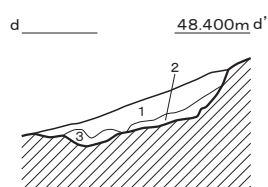


1. 灰黄褐色土(10YR5/2)均質、細かい、やや粘性強い。
2. にぶい褐色土(7.5YR5/3～5/4)ややしまる。パイラン混じる。土器含む。
3. 灰黄褐色土(10YR5/2)均質、細かい、やや粘性強い。
4. 黒～黒褐色土(7.5YR2/1～3/1)土器・炭混る。にぶい黄褐色土(10YR5/3)含む。
5. にぶい黄褐色土(10YR6/3～6/4)炭椀まれに含む。花崗岩風化粒を含む、粘性やや高い。

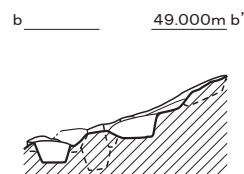
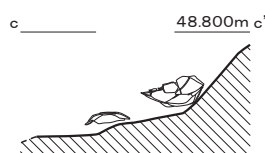
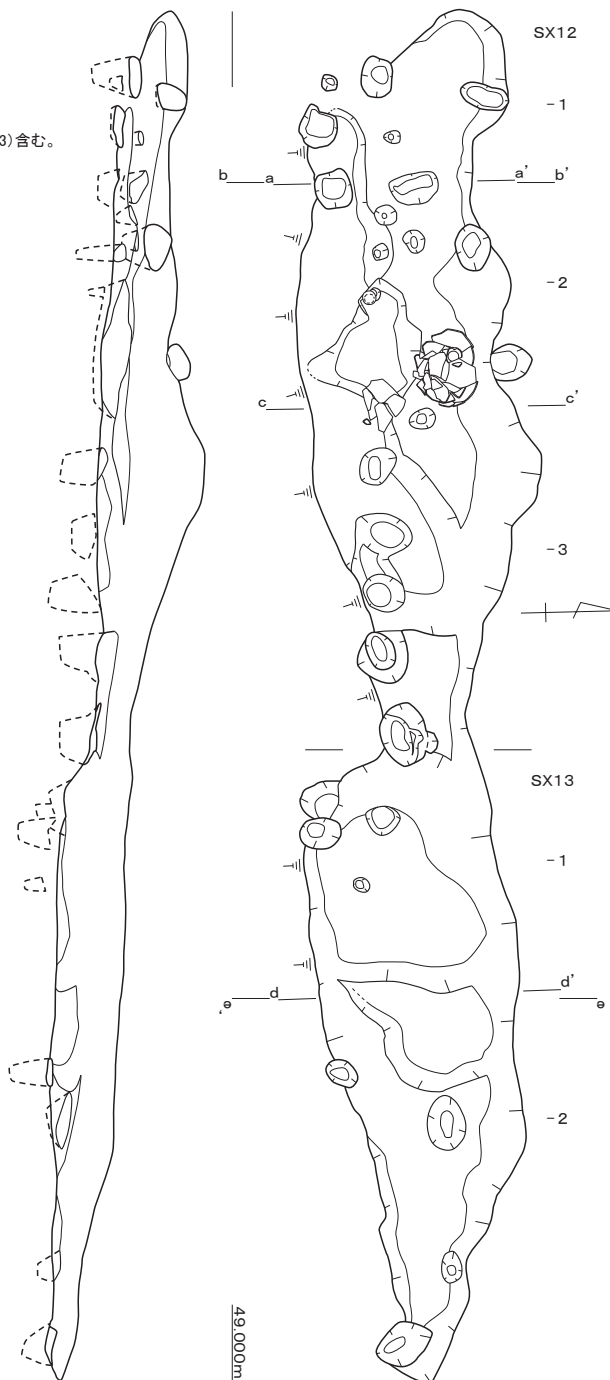
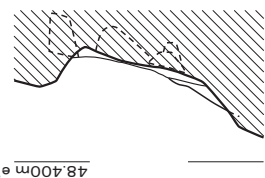


1. にぶい黄褐色土(10YR5/3～4/3)7mm以下の砂粒含む。やや粘性高い。土器、炭含む。
2. にぶい黄褐色土(10YR5/3～5/4)10mm以下の砂粒含む。1より粒子が粗く、もろい。土器含む。1の流入か？
3. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)粗い砂粒混る。
4. 褐灰～灰黄褐色土(10YR4/1～4/2)均質粘性高い。もろくずれる。
5. 橙～暗褐色土(7.5YR6/6～3/4)花崗岩風化粒・パイラン土・炭まれに混る。粘性やや強い。
6. 橙色土(7.5YR6/6～6/8)花崗岩風化粒・パイラン土・炭まれに混る。粘性やや強い。5よりややパイランの混りが多い。
7. 黄灰色土(2.5Y4/1)粗い砂粒混る。3と同じか？
8. 橙色土(7.5YR6/6～6/8)と暗灰黄土(2.5Y5/2)の混じり。橙色はパイラン土。粘性やや強い。

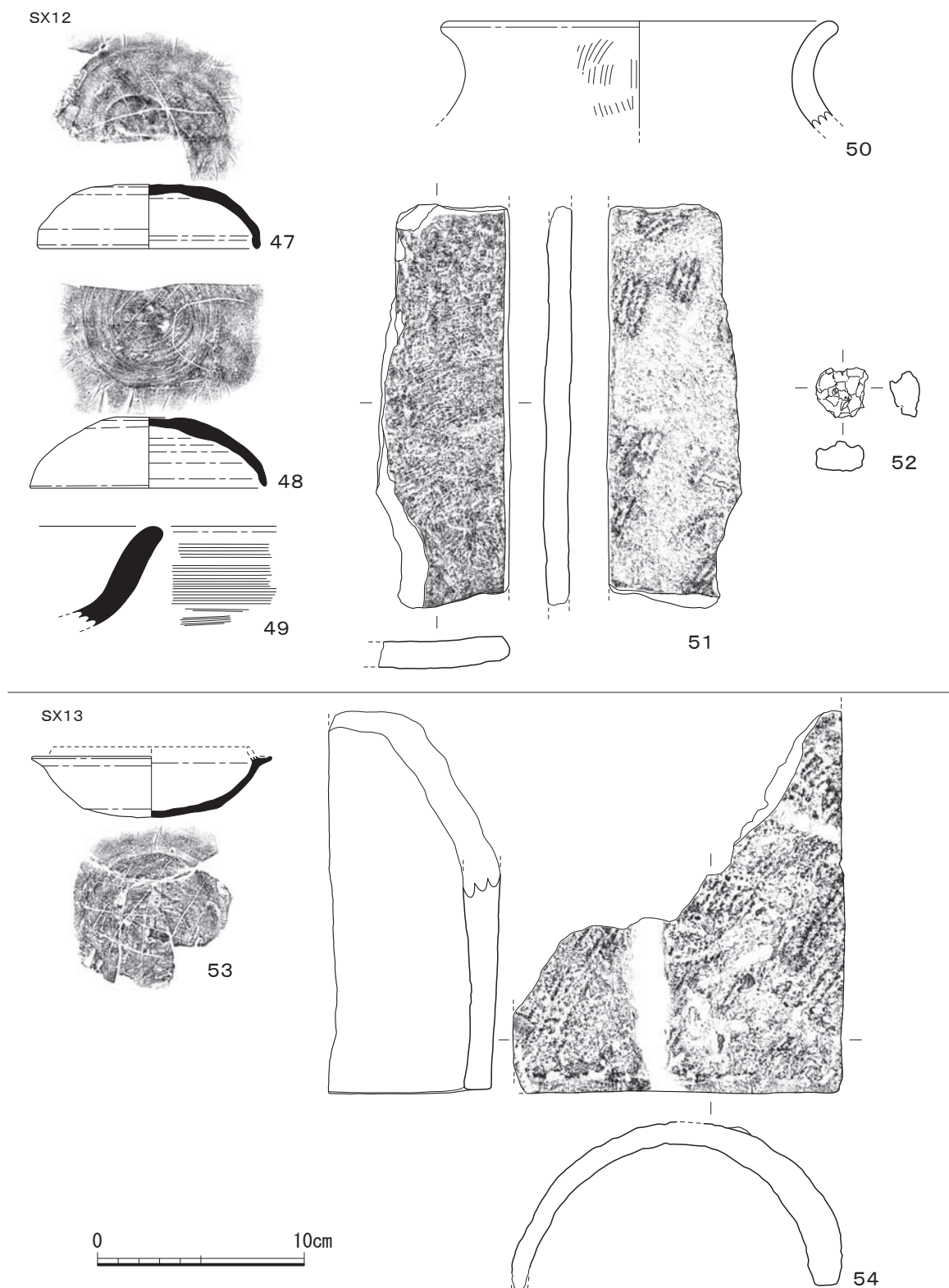
SX13



1. 灰黄褐色～にぶい黄褐色土(10YR5/2～5/3)炭、土器少量含む。花崗岩風化粒含む。ややもろい。
2. 橙色パイラン土(7.5YR7/6～6/6)灰黄褐色～にぶい黄褐色土(10YR5/2～5/3)塊混る。
3. 灰黄褐色土(10YR6/2～5/2)パイラン土混る。橙色土(7.5YR6/8)均質で細かい塊混る。



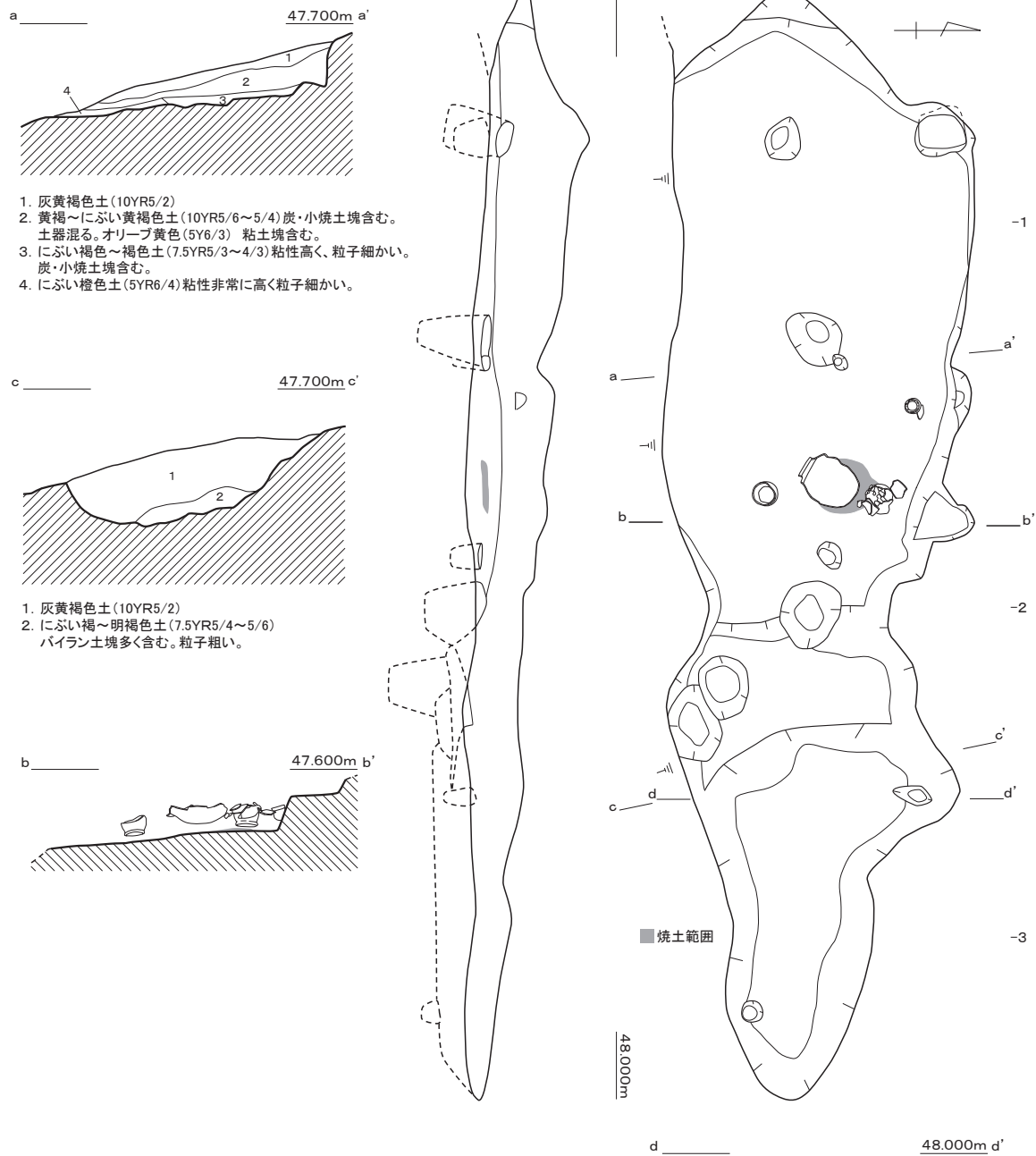
第18図 SX12・13実測図 (1/60)



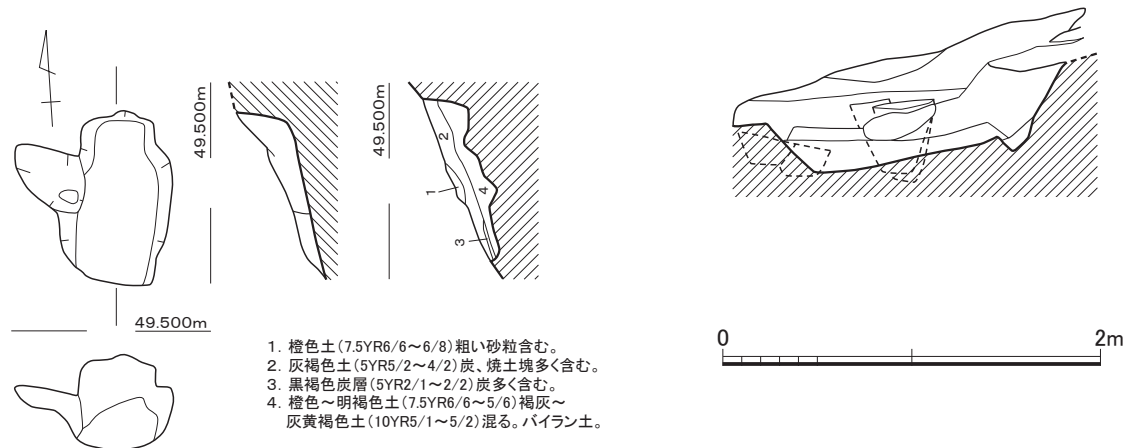
第19図 SX12・13出土遺物実測図 (1/3)

ランは方形に近い。長さ6.58m、幅1.67m、最深部0.53mを測る。床面は東に向かって段掘りになり、低くなる。遺構西側の平端部では壁際に近い床面に焼土が確認でき、焼土上やその周辺には土師器の甕が出土する。出土状況は床面よりやや上位にあり、甕の全体像が分かるほど残存していた。このことから、焼土はカマドの可能性が高く、西側は竪穴住居跡とすることができる。一方東側は床

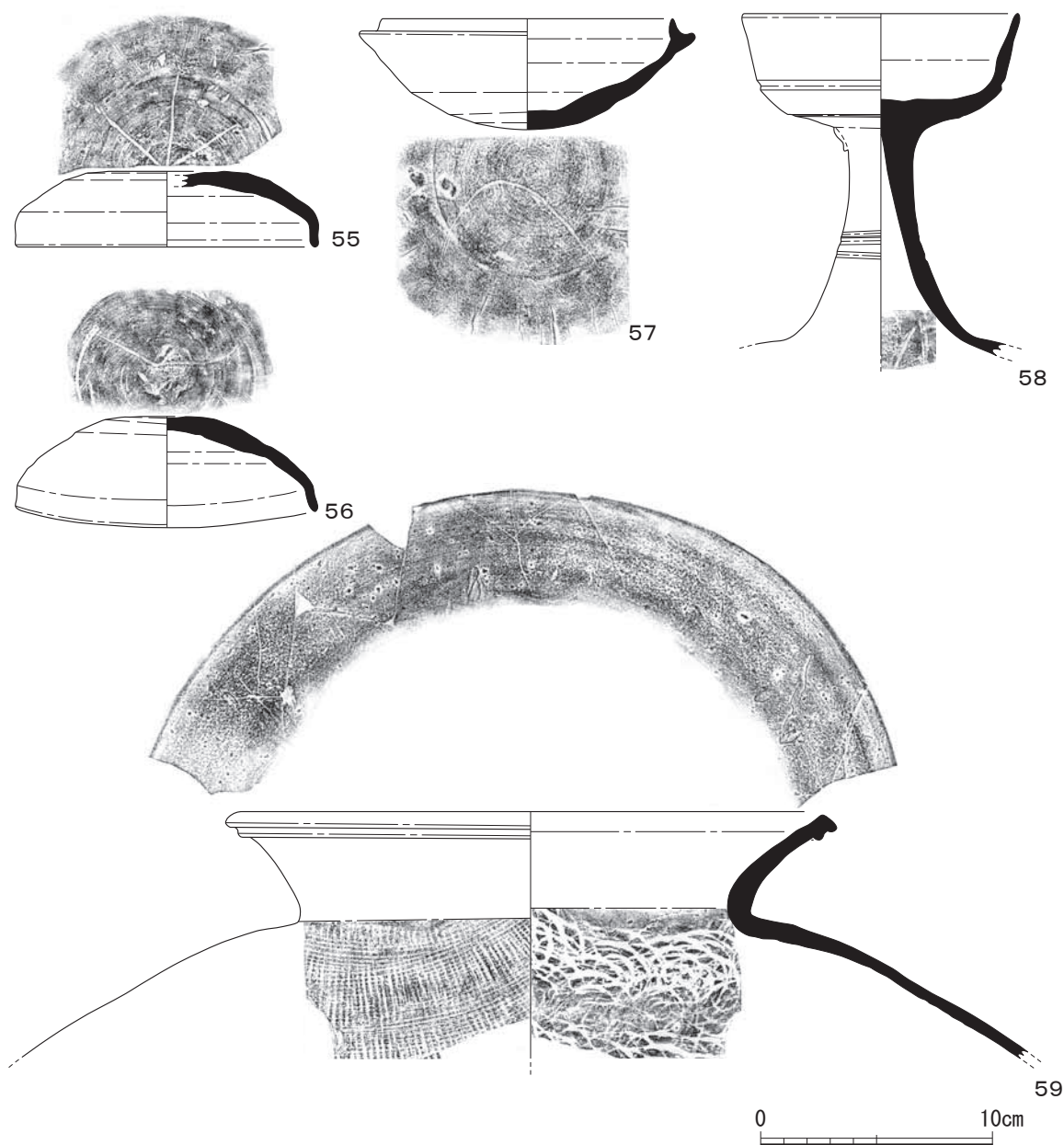
SX15



SX16



第20図 SX15・16実測図 (1/40)

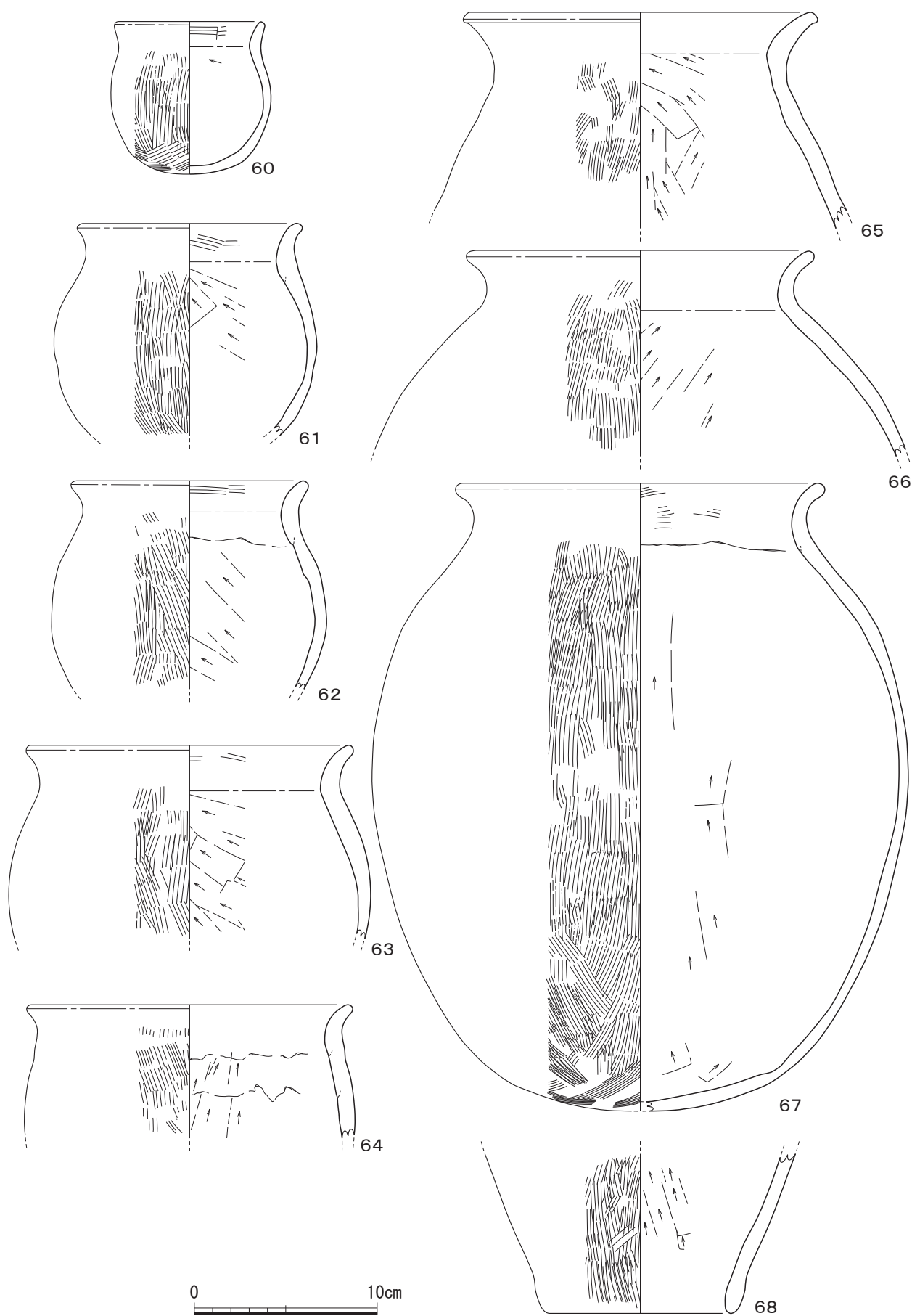


第21図 SX15出土遺物実測図① (1/3)

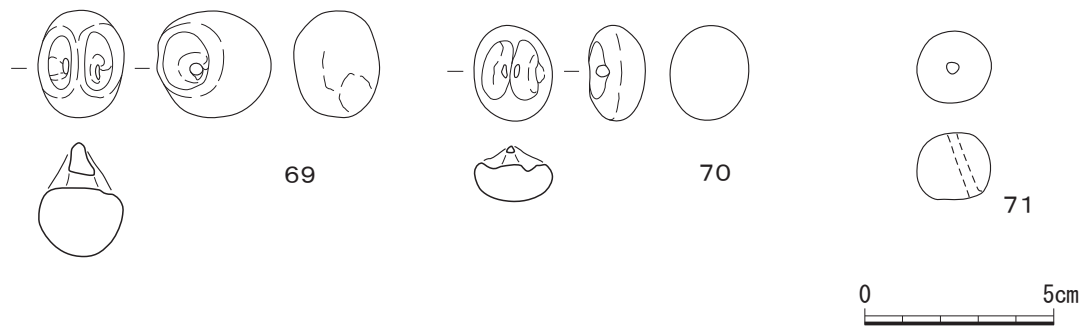
面が平らではなく住居に付属する別の遺構と考えられる。出土遺物には、須恵器・土師器のほか祭祀遺物と考えられる土製の模造鏡・土玉がある。

出土遺物 (第21～23図、図版38・39・44)

須恵器 (55～59) 55・56は杯H蓋で、復元口径11.2～13.1cmを測るが、56は器体が歪んでいるため法量は不確定である。いずれも口縁部は直立に近い傾きになり、天井部は外面約1/3に回転ヘラケズリを施す。57は杯H身で、口径12.55cmを測る。立ち上がりは直立に近い傾きになり、底部は外面約1/2に回転ヘラケズリを施す。58は高杯で、復元口径12.0cmを測る。体部～口縁部は直線的にのび、体部・底部外面に沈線を巡らせる。脚部は長脚で、外面に沈線、内面にヘラ記号を施す。脚部はなだらかに外反し、裾部で大きく開く。59は甕で、口径26.35cmを測る。口縁端部は断面四角形を呈し、外面に沈線を巡らせる。



第22図 SX15出土遺物実測図② (1/3)



第23図 SX15出土遺物実測図③ (1/2)

土師器 (60～68) 60～62は小型の甕で、復元口径は8.2～13.0cmを測る。いずれも口縁部はやや外反し、体部は球形を呈すと思われる。60の頸部内面には稜が付く。63～67は甕で、復元口径17.9～20.2cmを測る。65の口縁部は比較的長く、大きく開くように外傾する。また、口縁端部は断面四角形を呈す。体部は直線的にのびる。他の甕は口縁部が外反し、端部は丸く仕上がる。体部は丸みを持つ。63の頸部内面は稜が付く。68は甕で、器形は底部に向かってすばまる。底端部は器壁が肉厚になり、断面形状が丸く仕上がる。

土製品 (69～71) 69・70は模造鏡である。いずれも球形もしくは扁平な球形につまみを作り出した形状を呈す。つまみには穿孔を施す。71は土玉である。製品の中心から斜めに穿孔を施す。

S X 16 (第20図)

5区に位置する。標高48.9～49.4mの南側斜面に位置し、周辺にはS X 11～13がある。平面プランは不整形で、長さ0.92m、幅0.58m、最深部0.27mを測る。床面は傾斜する。埋土は褐色土を主体とし、上層は炭化物・焼土を多量に含んでいる。出土遺物には須恵器がある。

出土遺物 (第24図)

須恵器 (72・73) 72は杯B蓋で、復元口径16.6cmを測る。口縁端部は断面三角形を呈す。73は杯B身である。底部外面は回転ヘラケズリを施し、低い高台が付く。

S X 17 (第25図、図版25)

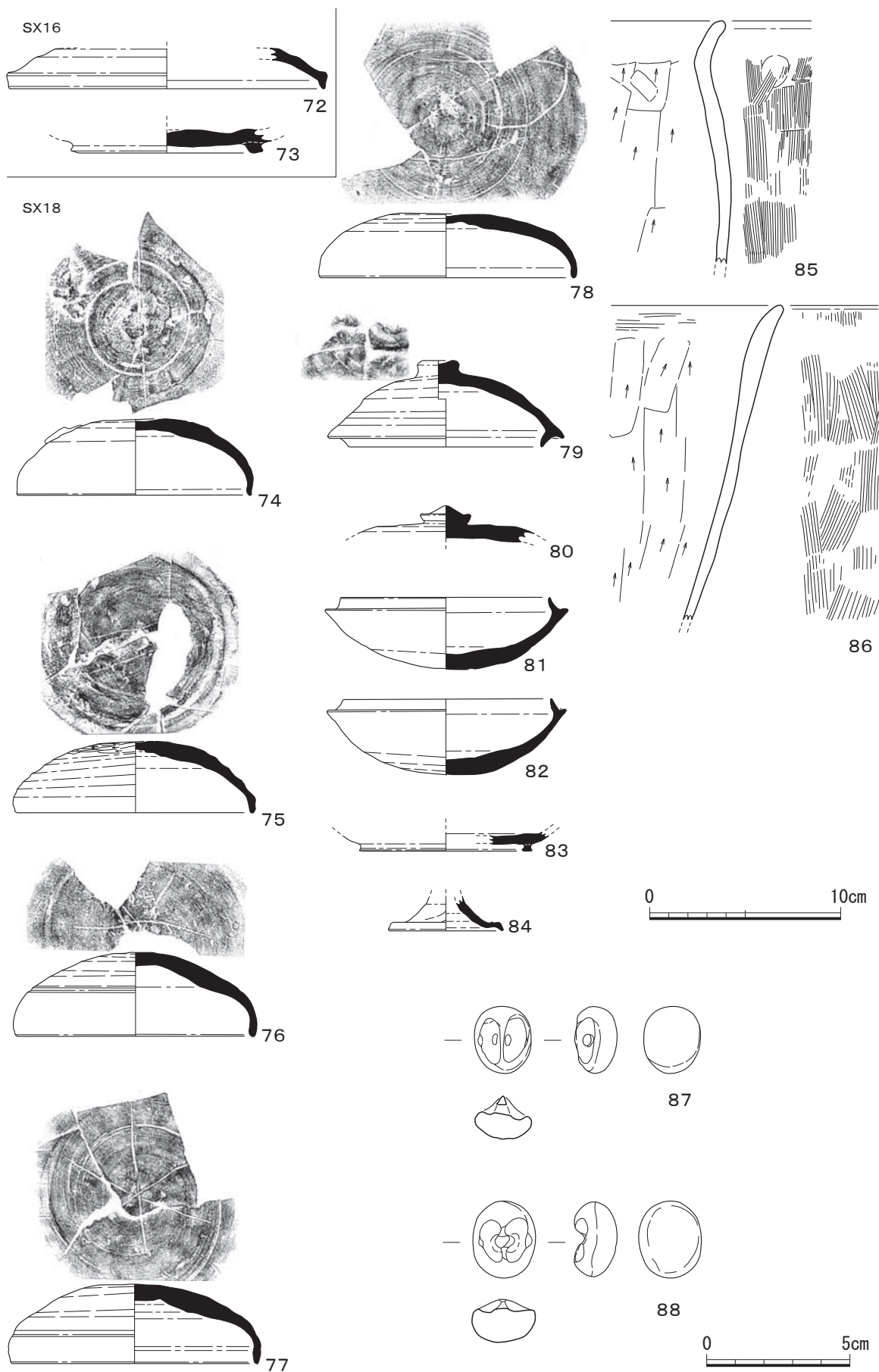
2区に位置する。標高48.4～49.4mの南側斜面に位置し、約12m南には2号窯跡がある。平面プランは三日月状を呈し、長さ6.1m、幅1.45m、最深部0.37mを測る。遺構内は2段掘り状になり、北側部分が1段高くなる。埋土は褐色土を主体とする。出土遺物はなかった。

S X 18 (第25図、図版25)

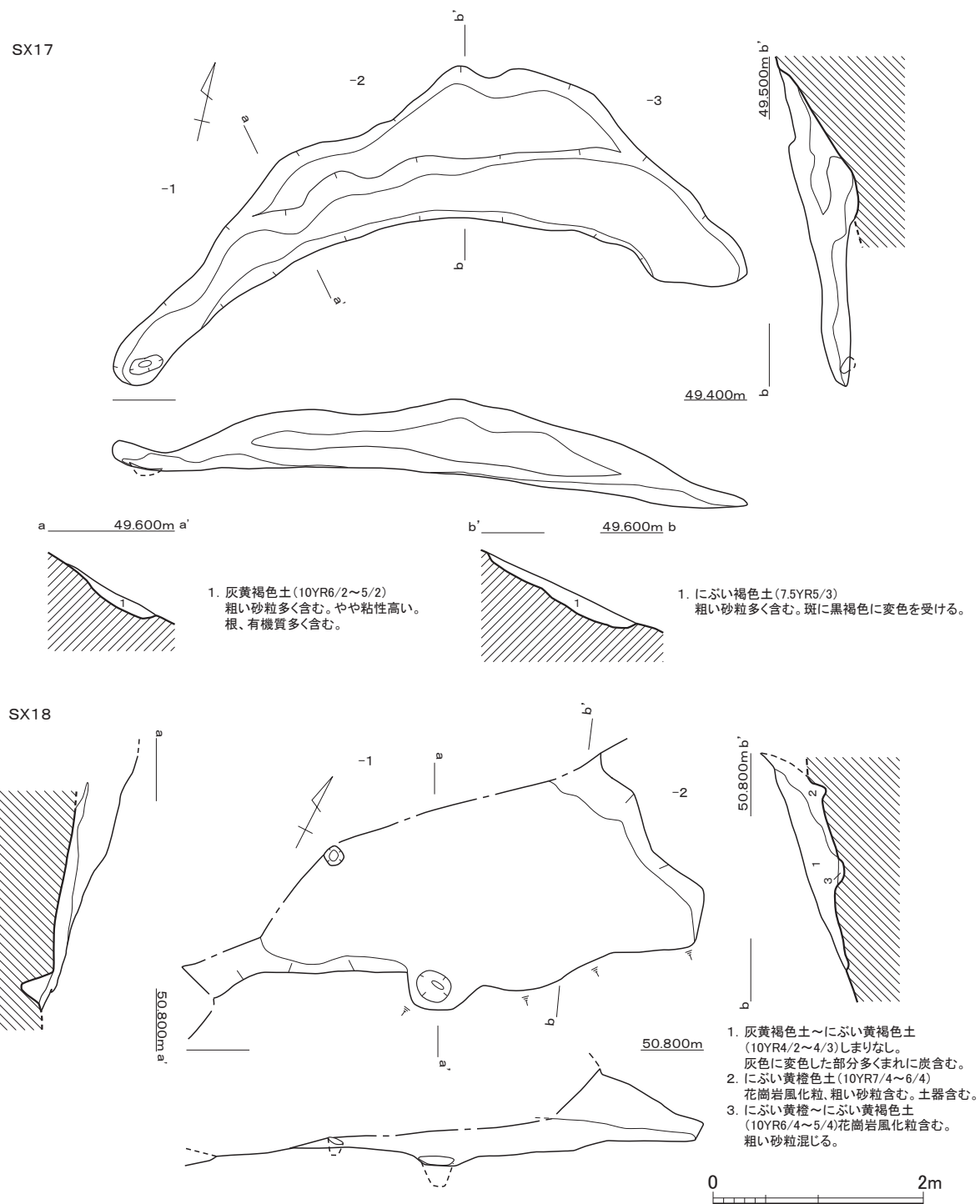
3区に位置する。標高49.8～50.6mの南側斜面に位置し、南側にはS X 19がある。遺構は調査区外に続いており、平面プランは不整形な長楕円形と思われる。長さ4.25m以上、幅2.45m以上、最深部0.46mを測る。床面は平らに近く、埋土は黄褐色土を主体とする。遺構は調査区外へのびていたが、平成17年に試掘する機会を得た。慎重に表土剥ぎをおこない、須恵器を主に多量の遺物が出土したが、遺構の続きを確認することができなかった。出土遺物には須恵器・土師器・土製の模造鏡がある。

出土遺物 (第24図、図版39)

須恵器 (74～84) 74～78は杯H蓋で、復元口径12.3～13.4cmを測る。いずれも口縁部は直



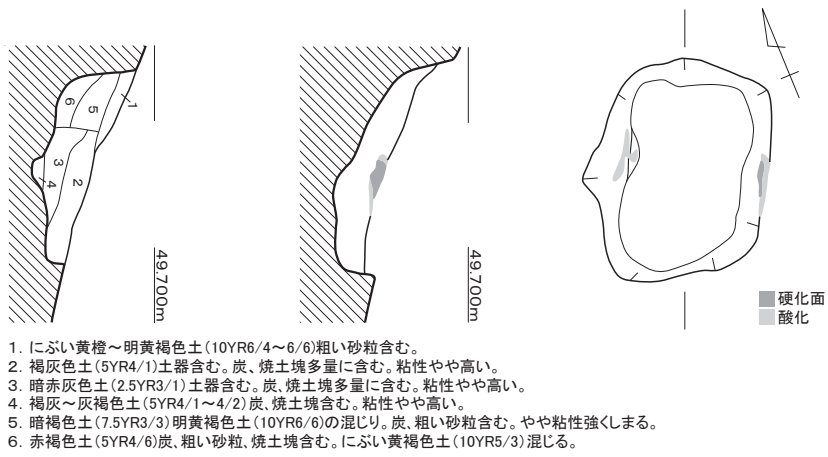
第24図 SX16・18出土遺物実測図（87・88は1/2、他は1/3）



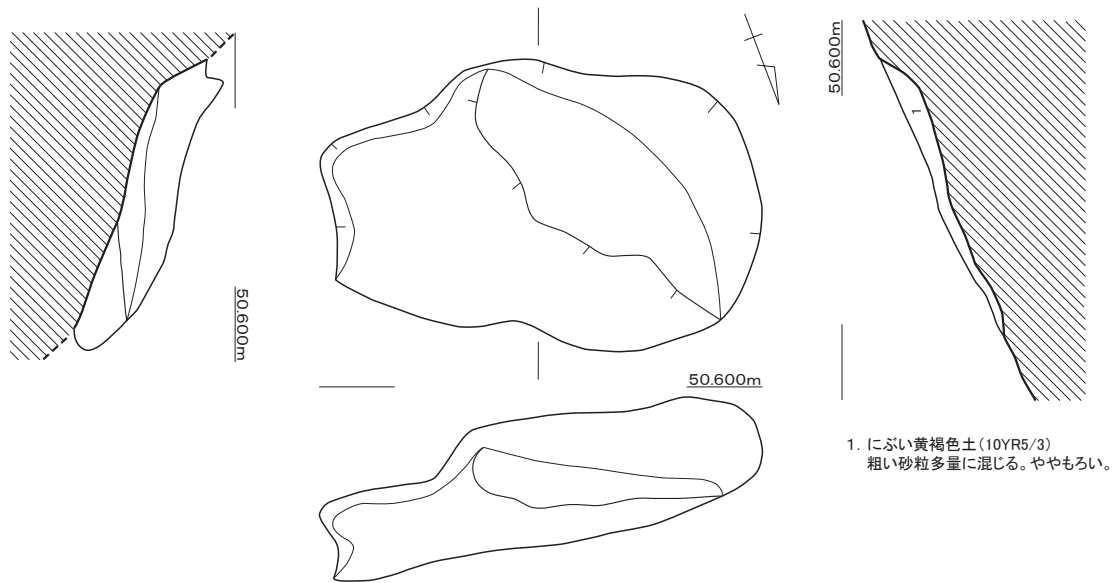
第25図 SX17・18実測図 (1/60)

立に近い傾きになり、天井部外面は回転ヘラケズリを施すが、75では手持ちヘラケズリを行う。76・77は外面に沈線が巡る。79は杯G蓋で、復元口径10.2cmを測る。かえりは口縁部下に突出し、天井部は外面1/3で回転ヘラケズリを行う。また、つまみは中央部がくぼむボタン状を呈す。80は杯B蓋である。天井部外面は回転ヘラケズリを施し、つまみは高い山形を呈す。81・82は杯H身で、口径はいずれも10.9cmを測る。81の立ち上がりは内傾しつつ端部が直立に近い傾きになる。82の立ち上がりは内傾し、天井部は外面約1/3に回転ヘラケズリを施す。83は杯B身である。底部に低い高台が付く。84は高杯の脚部である。短脚で裾部が大きく開き、端部は断面三角形を

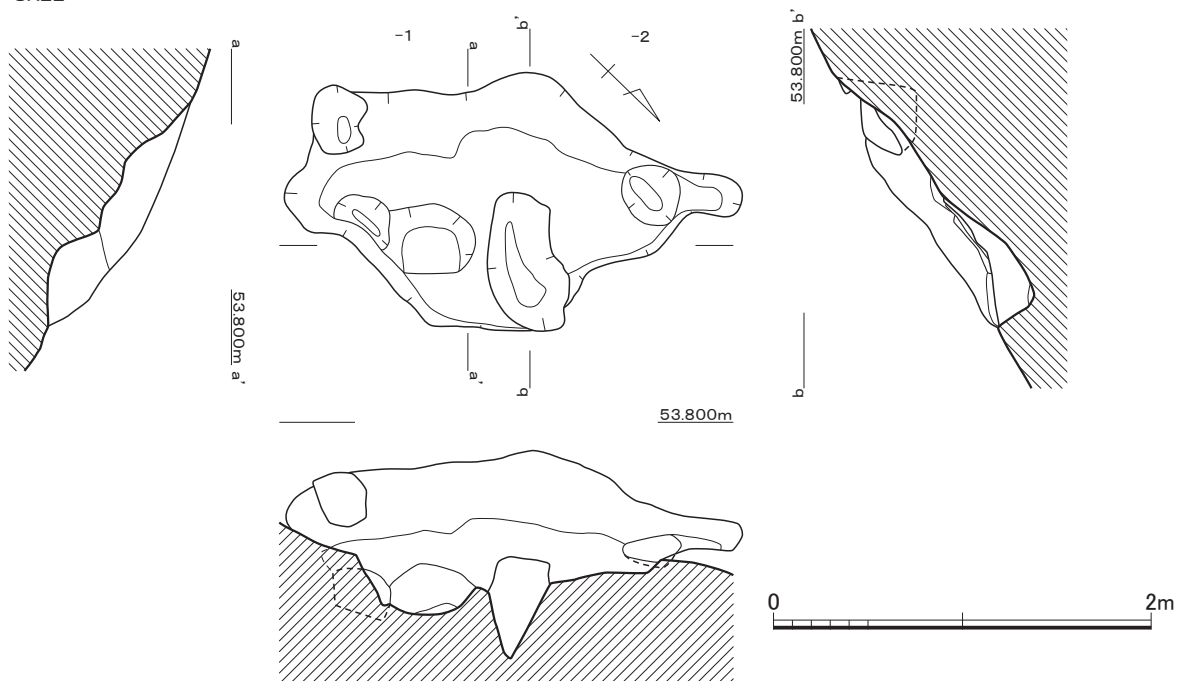
SX19



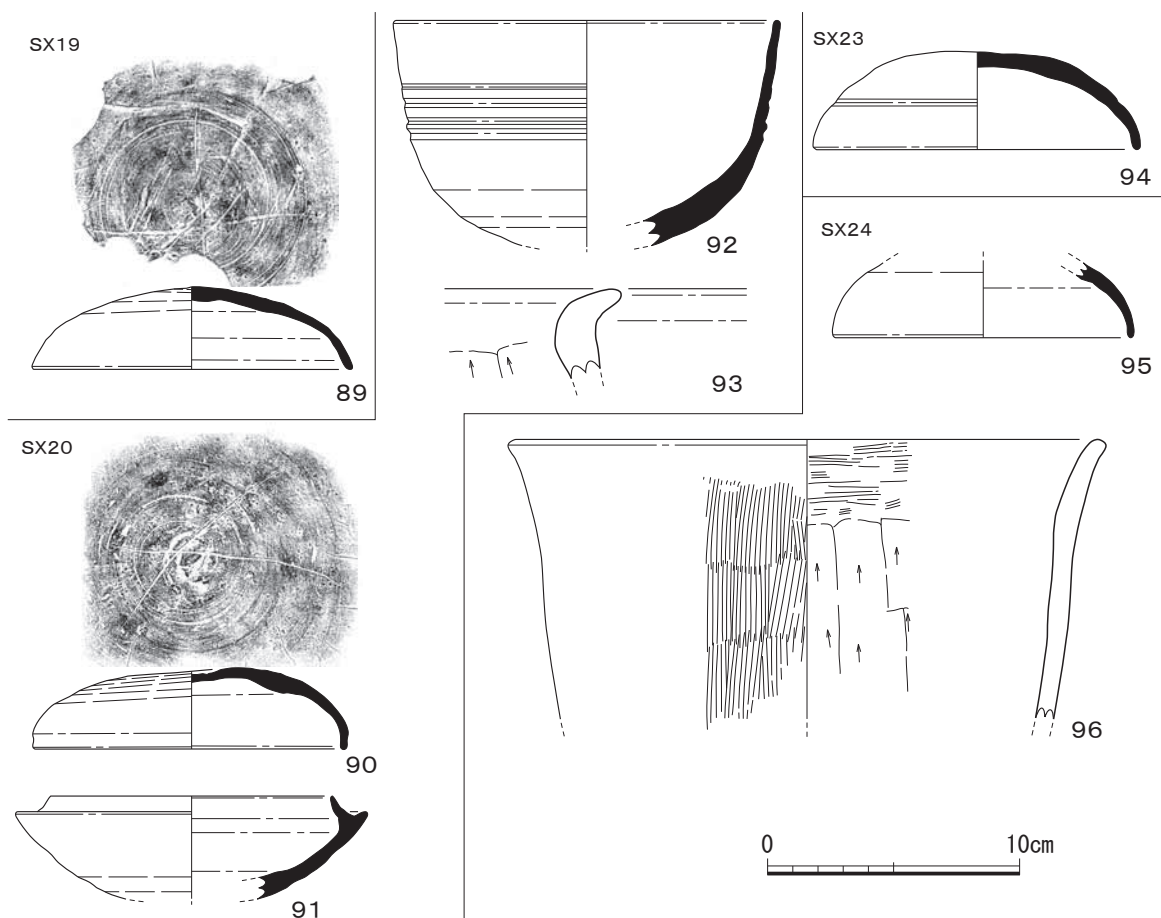
SX21



SX22



第26図 SX19・21・22実測図(1/40)



第27図 SX19・20・23・24出土遺物実測図（1／3）

呈す。

土師器（85・86） 85は甕である。口縁部は頸部からやや外傾し、体部はわずかに膨らむ。86は甕である。体部～口縁部はほぼ直線的にのび、口縁部の器壁は肉厚になる。

土製品（87・88） いずれも模造鏡である。扁平な球形につまみを作り出した形状を呈す。つまみには穿孔を施す。

S X 19（第26図、図版25）

3区に位置する。標高49.1～49.7mの南側斜面に位置し、北側にはS X 18がある。平面プランは方形を呈し、長さ1.17m、幅0.91m、最深部0.33mを測る。焼土坑である。床面は北側が傾斜しており、南側は水平になる。遺構東西壁では被熱痕跡があり、酸化部分と東壁では硬化部分が観察できる。埋土は床面傾斜部分に褐色土、水平部分に炭化物・焼土を多量に含んだ黒褐色土が堆積する。出土遺物には須恵器がある。

出土遺物（第27図）

須恵器（89） 杯H蓋で、復元口径12.7cmを測る。口縁部はなだらかに開き、天井部は外面の約1／2に回転ヘラケズリを施す。

S X 20

5区に位置する。標高51.0～52.0mの南側斜面に位置した。S X 20を1段掘削した後、2基の遺構に分かれたためS X 25・26とした。したがって、遺構検出時に出土した遺物はS X 20出土遺物として取り上げたため遺物のみを報告する。出土遺物には須恵器・土師器がある。

出土遺物（第27図、図版39）

須恵器（90～92） 90は杯H蓋で、口径12.5cmを測る。口縁部は直立に近い傾きになり、天井部は外面約2／3に回転ヘラケズリを施す。91は杯H身で、復元口径11.2cmを測る。立ち上がりは内傾しつつ端部が直立に近い傾きになり、底部は外面約1／2に回転ヘラケズリを施す。92は碗で、口径15.4cmを測る。体部～口縁部は直線的にのび、やや外傾する。体部外面には沈線が巡る。体部下位～底部外面は回転ヘラケズリを施し、丸く仕上げる。

土師器（93） 甕である。口縁部は短く、外側に大きく屈曲する。

S X 21（第26図、図版26）

4区に位置する。標高49.6～50.5mの北側斜面に位置し、約7m南にはS X 33がある。平面プランは不整形な長楕円形を呈し、長さ2.3m、幅1.42m、最深部0.43mを測る。床面は東側が平坦になり、西側は傾斜する。埋土は黄褐色土を主体とする。出土遺物はなかった。

S X 22（第26図、図版26）

6区に位置する。標高53.0～53.7mの北側斜面に位置し、周辺にはS X 23・31がある。平面プランは不整形な菱形を呈し、長さ2.42m、幅1.36m、最深部0.4mを測る。床面は傾斜し、ピットが見られる。埋土は黄褐色土を主体とする。出土遺物には須恵器があるが、図化できなかった。

S X 23（第28図、図版26）

6区に位置する。標高53.0～53.7mの北側斜面に位置し、周辺にはS X 22・31がある。平面プランは不整形で、長さ3.32m、幅1.19m、最深部0.32mを測る。床面は傾斜し、ピットが見られる。埋土は黄褐色土を主体とし、出土遺物には須恵器がある。

出土遺物（第27図）

須恵器（94） 杯H蓋で、復元口径13.0cmを測る。口縁部は直立に近い傾きになり、外面に沈線が巡る。

S X 24（第28図、図版26）

6区に位置する。標高56.4～57.0mの北側斜面に位置し、約9m東にはS X 23がある。重機の進入路により削平される。平面プランは細長い不整形を呈し、南西・北東方向にのびる。長さ2.5m、幅0.62m、最深部0.4mを測る。床面は凹凸が目立ち、南東側では焼土が見られる。出土遺物には須恵器・土師器がある。

出土遺物（第27図）

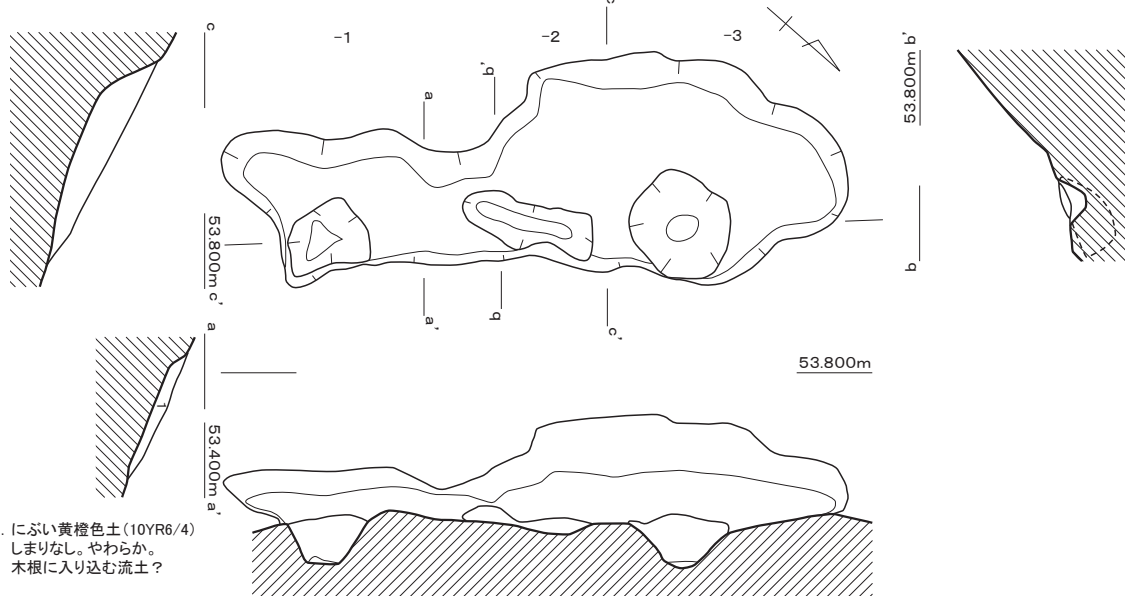
須恵器（95） 杯H蓋で、復元口径12.0cmを測る。口縁部は直立に近い傾きになる。

土師器（96） 甕で、復元口径23.8cmを測る。直線的な体部から口縁部はやや外反する。

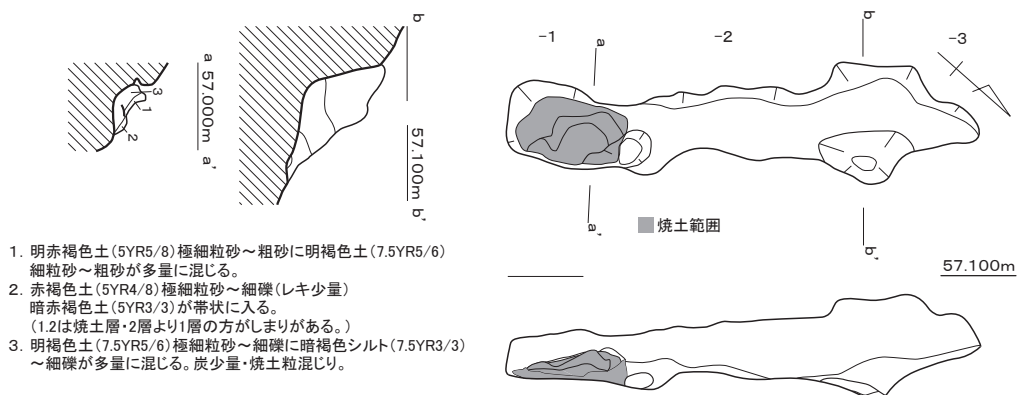
S X 25（第28図、図版26・27）

5区に位置する。標高51.3～51.8mの南側斜面に位置し、周辺にはS X 26・34がある。平面プランは不整形で、長さ0.98m、幅0.48m、最深部0.46mを測る。東側はピット状を呈し、西側は壁面が酸化する。酸化範囲は西端部に限られ、埋土中からは須恵器の杯蓋が出土した。土層を見ると酸化焰焼成分では黒褐色土を主体とし、ピット状の部分は褐灰色土が堆積する。土層堆積状況から両者は切合いがあるように見えるが、平面上では確認できなかった。出土遺物には須恵器・土

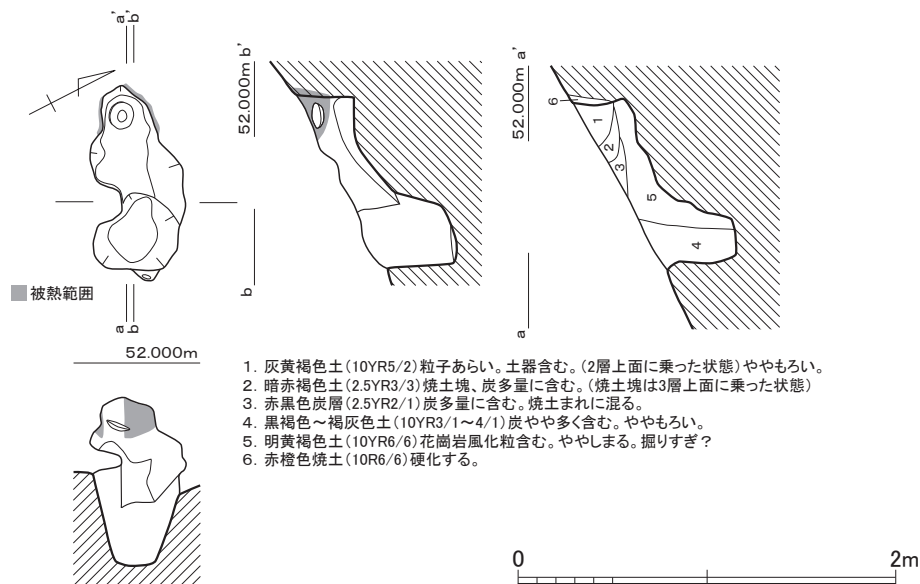
SX23



SX24



SX25



第28図 SX23～25実測図 (1/40)

師器がある。

S X 26 (第29図、図版27～28)

5区に位置する。標高51.1～51.8mの南側斜面に位置し、周辺にはS X 25・34がある。遺構は斜面をL字状に削り、平坦面を造りだしている。平面プランは不整形。長さ5.06m、幅1.69m、最深部0.66mを測る。床面には直径約65cmのピットが2基見られ、西側のピットでは明黄褐色の粘土が確認された。

また、このピットから約60cm南に位置するS X 34も粘土が充填する。東側ピット内または周辺で須恵器の甕片が集中して出土している。埋土は黄褐色土が主体となる。出土遺物には須恵器・土師器がある。

出土遺物 (第30・31図、図版39)

須恵器 (97～108) 97・98は杯H蓋で、97の復元口径は12.3cm、98の口径は13.5cmを測る。いずれも口縁部は直立に近い傾きになり、98の天井部は外面約1／3に回転ヘラケズリを施す。99・100は杯H身で、99の復元口径は10.4cm、100の口径は12.15cmを測る。いずれも立ち上がりは内傾し端部で直立に近い傾きになり、底部は外面約1／2～2／3に回転ヘラケズリを施す。101・102は高杯蓋で、復元口径はそれぞれ11.5cm・13.0cmを測る。いずれも口縁部は直立に近い傾きになり、天井部は外面約1／2に回転ヘラケズリを施す。また、101では中央部が窪むボタン状つまみが付く。103・104は高杯の脚部である。103は長脚で、外面にカキメ・沈線を施す。104は裾部が大きく開き、端部が緩やかに屈曲する。端部は断面台形状を呈す。脚部内面ではヘラ記号が見られる。105は碗で、復元口径11.0cmを測る。体部はほぼ直立し、口縁部で内湾する。体部下位～底部外面は回転ヘラケズリを施し、丸く仕上げる。106は短頸壺蓋で、復元口径10.2cmを測る。口縁部は直立に近い傾きになり、端部は丸く仕上げる。天井部は外面約1／3に回転ヘラケズリを施す。107・108は甕で、復元口径はそれぞれ18.6cm・24.8cmを測る。いずれも口縁端部は断面四角形を呈し、外面に沈線状の窪みを施す。108の頸部外面では2種類のヘラ記号が見られる。

土師器 (109・110) いずれも甑である。109は復元口径28.5cmを測り、口縁部は外傾し、大きく開く。頸部内面には稜が見られ、体部外面上位には把手が付く。110は体部が寸胴状を呈す。端部はケズリにより整形され、やや内湾する。

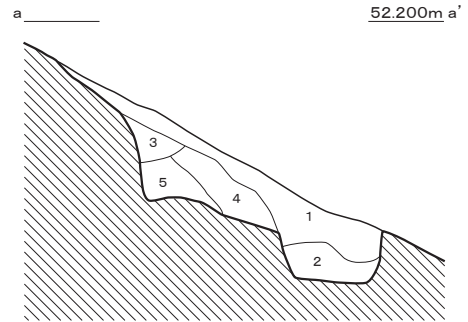
S X 27 (第29図、図版28)

5区に位置する。標高51.4～51.7mの南側斜面に位置し、周辺にはS X 26・29・30がある。平面プランは不整長楕円形を呈し、長さ1.33m、幅0.82m、最深部0.14mを測る。床面は2段掘り状になり、埋土は黄褐色土を主体とする。出土遺物には須恵器・土師器があるが図化できるものはなかった。

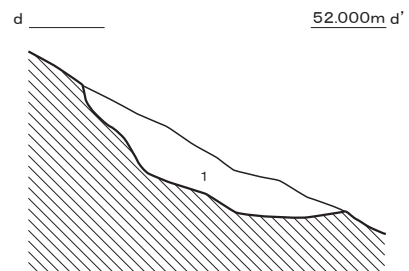
S X 28 (第32図、図版29)

5区に位置する。標高53.2～54.7mの南側斜面に位置し、S X 29を切る。遺構は斜面をL字状に削り、平坦部を作り出している。平面プランは細長く、不整形を呈し、北東・南西方向にのびる。長さ約13.0m、最大幅2.24m、最深部1.02mを測る。遺構の東と西は別個の竪穴状遺構となるよ

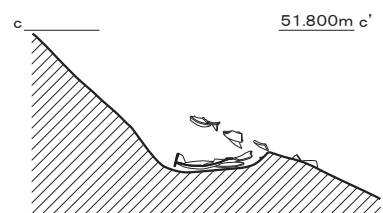
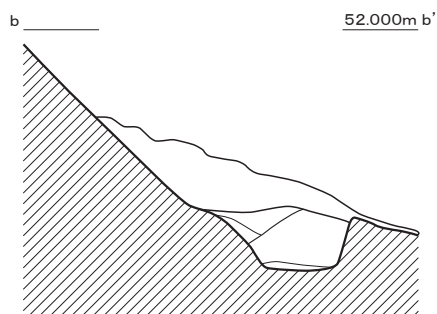
SX26



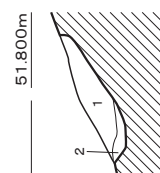
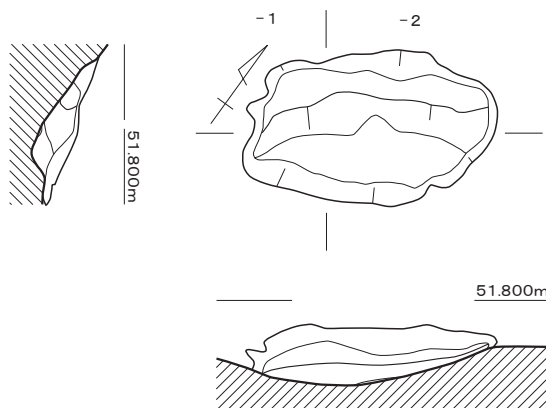
1. にぶい黄褐色～褐色土(10YR5/4)やや粘性高い。
土器、焼土、炭含む。ややもろい。
2. 明黄褐色～黄褐色土(2.5Y6/6～5/6)、明緑灰色粘土(5G7/1)
緻密。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2)粗い砂粒、土器、炭含む。ややしまる。
4. にぶい黄橙～明黄褐色土(10YR6/4～6/6)粗い砂粒含む。
ややしまる。
5. 橙～明褐色土(7.5YR6/6～5/6)粗い砂粒、花崗岩風化粒含む。
ややしまる。



1. にぶい黄橙色土(10YR6/4)一部暗褐色(10YR3/4)に変色、
炭、土器、5mm以下の砂粒多く含む。



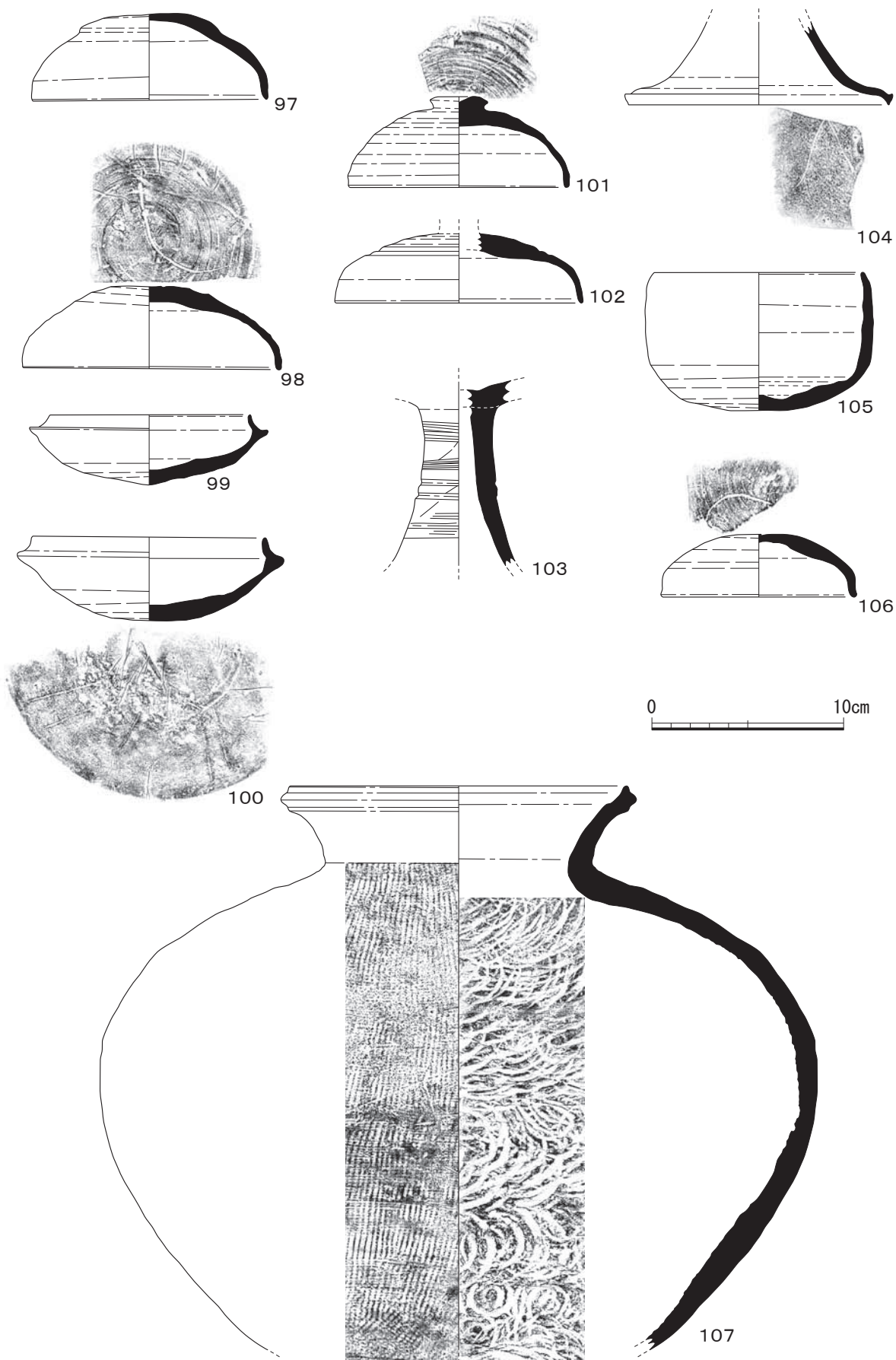
SX27



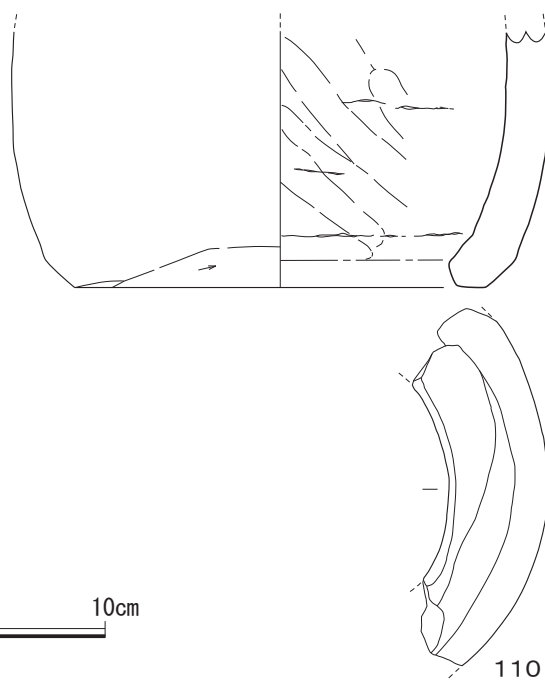
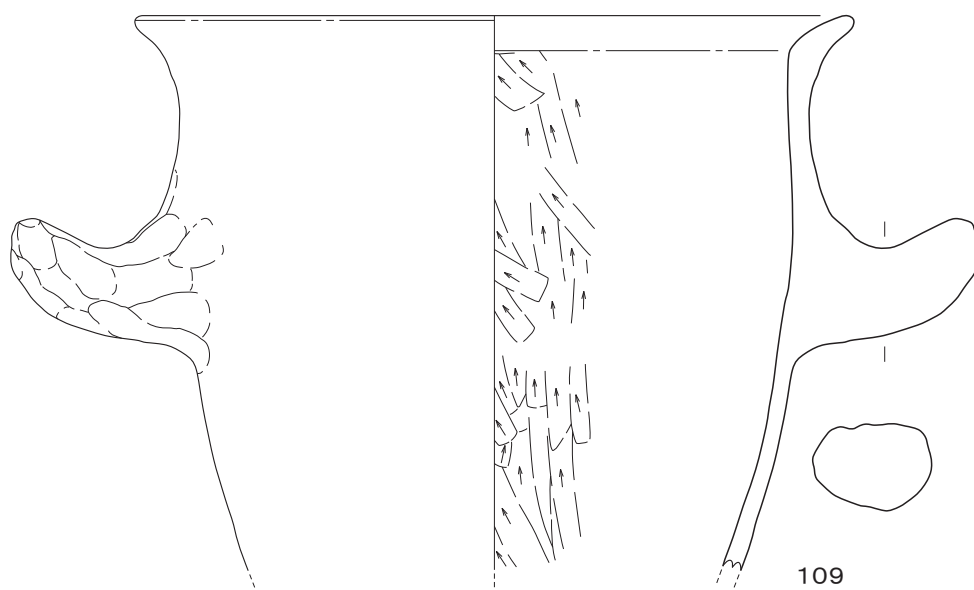
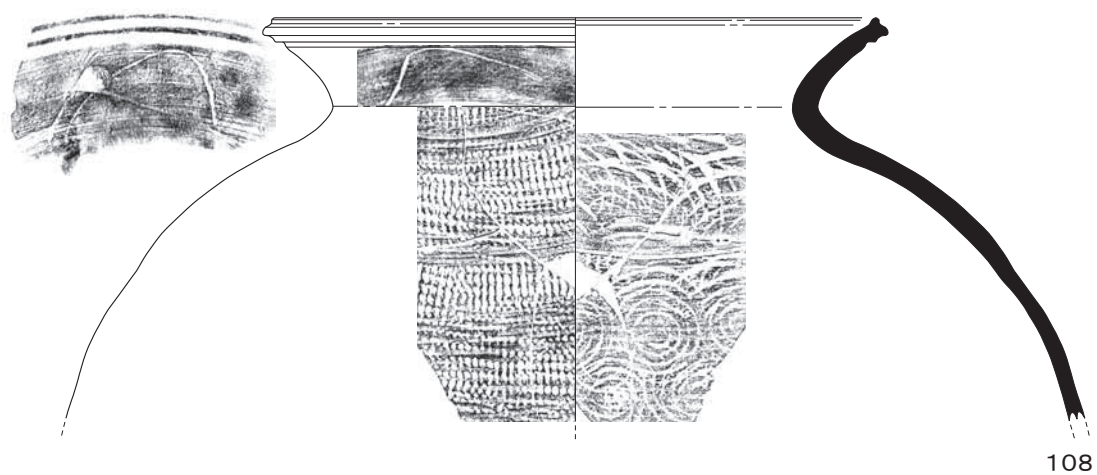
1. にぶい黄褐色土(10YR5/4)暗褐色土(7.5YR3/3)混る。
2. 灰黄褐色土(10YR6/2)粗い砂粒・花崗岩風化粒多く含む。
粘性高い。



第29図 SX26・27実測図 (1/40)



第30図 SX26出土遺物実測図① (1/3)



0 10cm

第31図 SX26出土遺物実測図② (1/3)

うであり、東側の遺構では床面にピットが見られる。また、西側の遺構埋土は上層に黄褐色土が流入し、床面直上の下層では黄橙色土の上に炭化物・焼土を多量に含む灰褐色土が堆積している。また、東側の遺構でも焼土層を多量に含む褐色土が2ヵ所確認できた。カマドの存在を示すと考えられるが、袖等は確認できなかった。出土遺物には須恵器・土師器があり、西側の遺構では残存状態が良い土師器の甕が出土している。

出土遺物（第33図）

須恵器（111～114） 111は杯H蓋で、復元口径12.55cmを測る。口縁部は直立に近い傾きを呈し、天井部は外面約1／3に回転ヘラケズリを施す。112は杯H身で、復元口径10.7cmを測る。立ち上がりは直立に近い傾きになり、天井部は外面約1／2に回転ヘラケズリを施す。113は碗で、復元口径14.0cmを測る。体部～口縁部は直線的にのび、外傾する。底部外面は回転ヘラケズリを施し、丸く仕上げる。114は短頸壺蓋で、復元口径13.0cmを測る。口縁部は直立に近い傾きになり、口縁端部が断面四角形を呈す。天井部は外面約1／2に回転ヘラケズリを施す。

土師器（115～117） いずれも甕で、復元口径13.0～14.5cmを測る。口縁部は外反する。

S X 29（第34図、図版30）

5区に位置する。標高52.7～53.4mの南側斜面に位置し、S X 28に切られる。平面プランは隅丸方形を呈し、長さ3.9m、幅1.5m以上、最深部4.5mを測る。遺構内北壁中央に近い床面では焼土が見られた。また、焼土範囲周辺では須恵器の杯が出土しており、長楕円形状の石も見られた。これらの状況から焼土範囲はカマドの痕跡である可能性があり、石も支脚であったと思われる。埋土は黄褐色土を主体とする。出土遺物は、須恵器・土師器がある。

出土遺物（第33図、図版39）

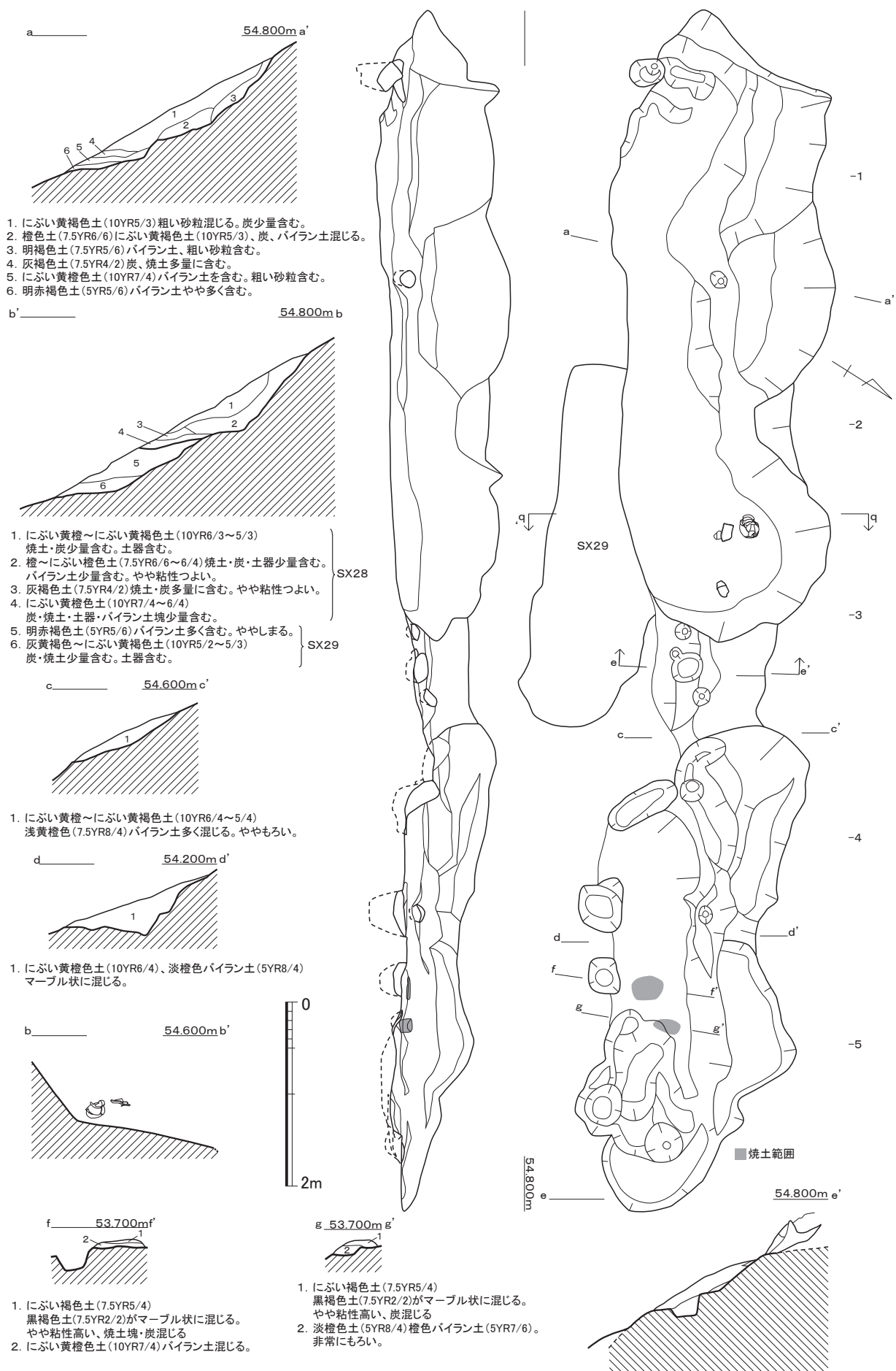
須恵器（118～121） 118～120は杯H蓋で、口径は13.0cm～14.05cmを測る。118・120は口縁部が直立に近い傾きになり、天井部は外面約1／2に回転ヘラケズリを施す。119は口縁部がなだらかに開き、天井部外面はナデを施す。121は杯H身で、口径11.1cmを測る。立ち上がりは内傾しつつ端部が直立に近い傾きになる。底部は外面約1／2に回転ヘラケズリを施す。

S X 30（第34図、図版31）

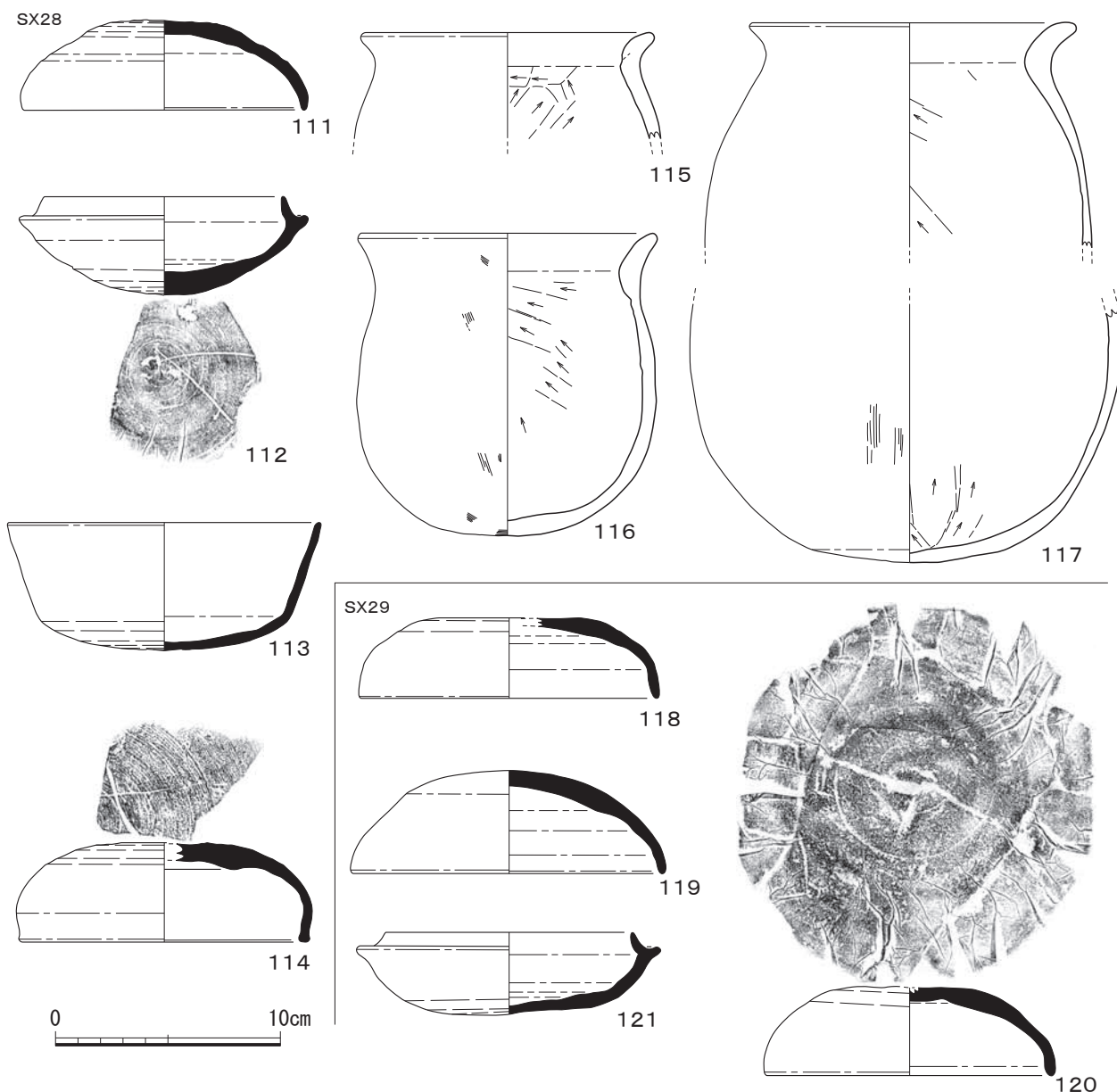
5区に位置する。標高50.4～52.8mの南側斜面に位置し、周辺にはS X 27～29・33がある。遺構は北東・南西方向にのび、長さ16.2m、最大幅4.6m、最深部1.16mを測る。遺構は斜面をL字状に掘り込んで平坦面をつくる。掘り込み範囲から見て、西側・中央・東側に分かれる可能性があり、いずれも遺構の長軸の向きに沿って並ぶ多数のピットが見られる。ピットは建物を構成する柱穴になる可能性がある。中央・西側では焼土が確認でき、カマドの可能性もある。出土遺物には須恵器・土師器があり、残存状況が良い遺物は西側・中央で確認された。埋土は黄褐色土を主体とする。

出土遺物（第36・37図、図版40・44）

須恵器（122～136） 122～125は杯H蓋で、復元口径10.9～12.0cmを測る。口縁部は直立に近い傾きになるもの（122・125）、なだらかに開くもの（123・124）がある。124以外は天井部の外面約1／3～1／2に回転ヘラケズリを施す。126～129は杯H身である。復元口径は9.2～

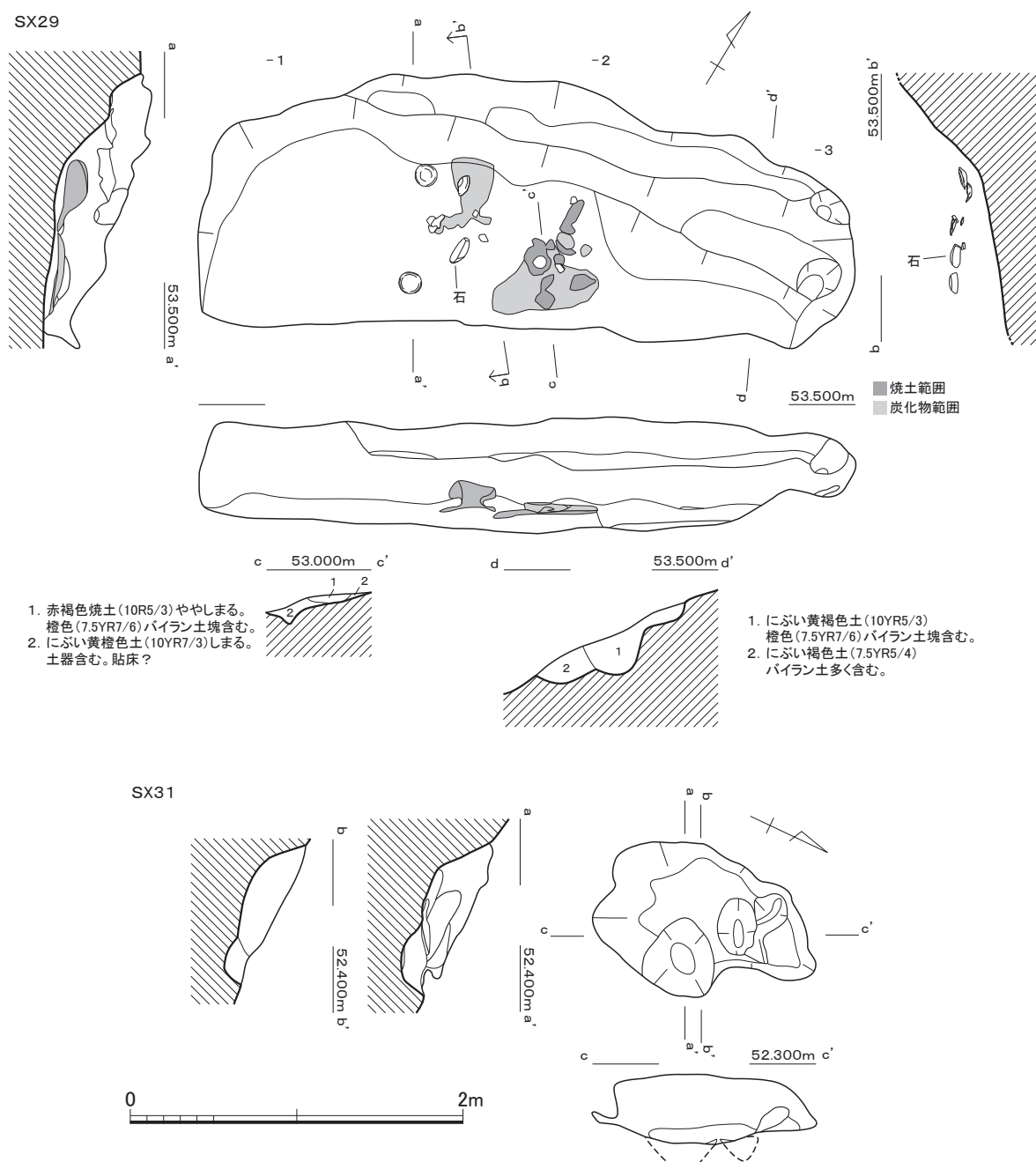


第32図 SX28実測図 (1/60)



第33図 SX28・29出土遺物実測図（1／3）

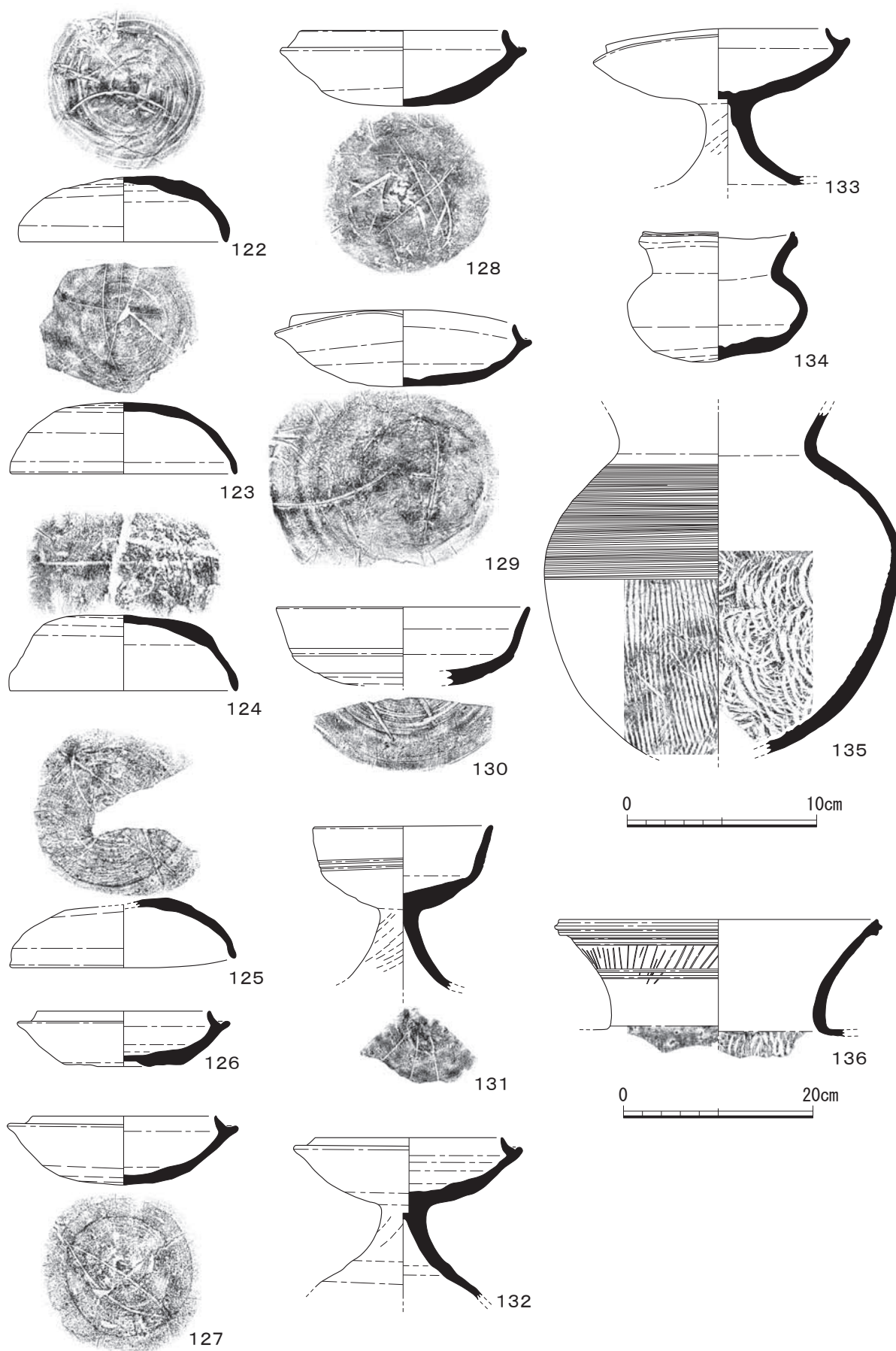
11.75cmを測る。129は器体が歪んでいるため法量は不確定である。立ち上がりは内傾しつつ端部は直立に近い傾きになるもの（126・128）、内傾するもの（127・129）がある。底部外面は127で回転ヘラケズリ、他のものはナデを施す。130～133は高杯で、130の復元口径は13.4cm、131～133の口径は9.5～11.85cmを測る。133は器体が歪んでいるため法量は不確定である。130・131は体部～口縁部はほぼ直線的にのび、体部外面に沈線が巡る。130は底部外面に回転ヘラケズリを施し、丸みを持たせる。131の底部外面は回転ナデにより、丸く仕上げる。131の脚部は短脚で、なだらかに開く。132・133の立ち上がりは内傾しつつ端部が直立に近い傾きになり、脚部は短脚である。132は脚部が大きく開き、裾部でなだらかに屈曲するようである。133はなだらかに外反し、裾部で大きく開く。134は壺で、口径8.0cmを測るが、器体が歪んでいるため法量は不確定である。口縁端部は玉縁状で、外面に段が付く。体部は扁平な球形を呈し、体部下位～底部外面に回転ヘラケズリを施す。135・136は甕である。135の体部は球形を呈し、上半部外面は平行タ



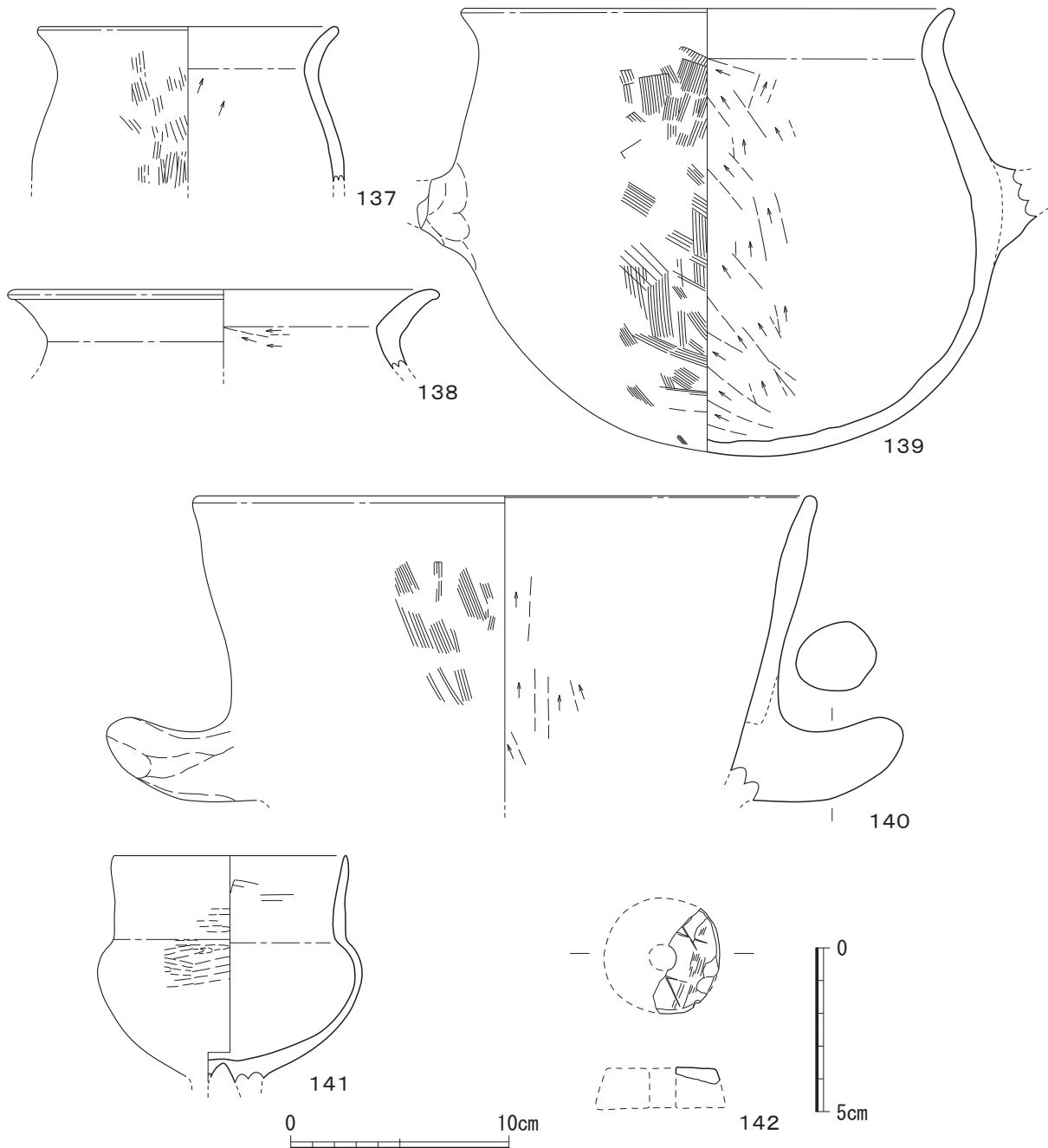
第34図 SX29・31実測図(1/40)

タキ後カキメを施す。136は復元口径33.8cmを測り、口縁端部は断面四角形で、外面上下部が窪む。頸部外面には連続斜線文、斜線文の上下部に沈線を施す。

土師器(137~141) 137・138は甕で、復元口径はそれぞれ13.8cm・19.8cmを測る。137の口縁部は緩やかに外反し、体部はわずかに膨らむ。138の口縁部は頸部で屈曲し、大きく開く。頸部内面には稜が付く。139は把手付甕で、復元口径22.6cmを測るが、器体が歪んでいるため法量は不確定である。口縁部は緩やかに外反し、体部~底部は球形を呈す。体部中位外面には把手が付く。140は甗で、復元口径28.6cmを測る。体部~口縁部は直線的にのび、体部に差込式の把手が付く。141は脚付壺で、復元口径10.6cmを測る。口縁部は長く、直立に近い。体部外面はヘラミガキを施し、底部では脚部貼付の痕跡が見られる。



第36図 SX30出土遺物実測図① (136は1/6、他は1/3)



第37図 SX30出土遺物実測図②（142は1/2、他は1/3）

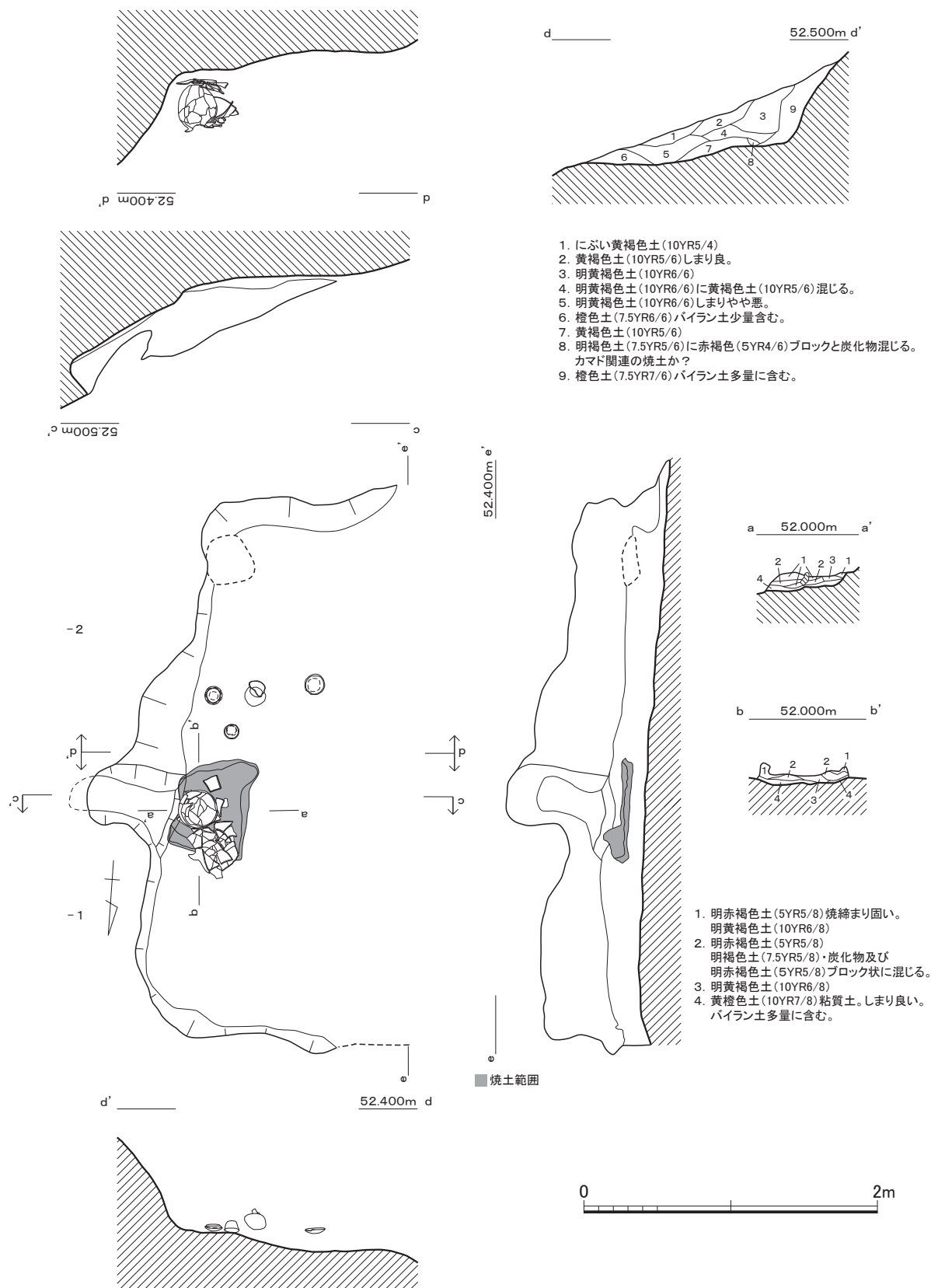
石製品（142） 滑石製紡錘車である。上面には×状の線刻が見られる。

S X 31（第34図、図版32）

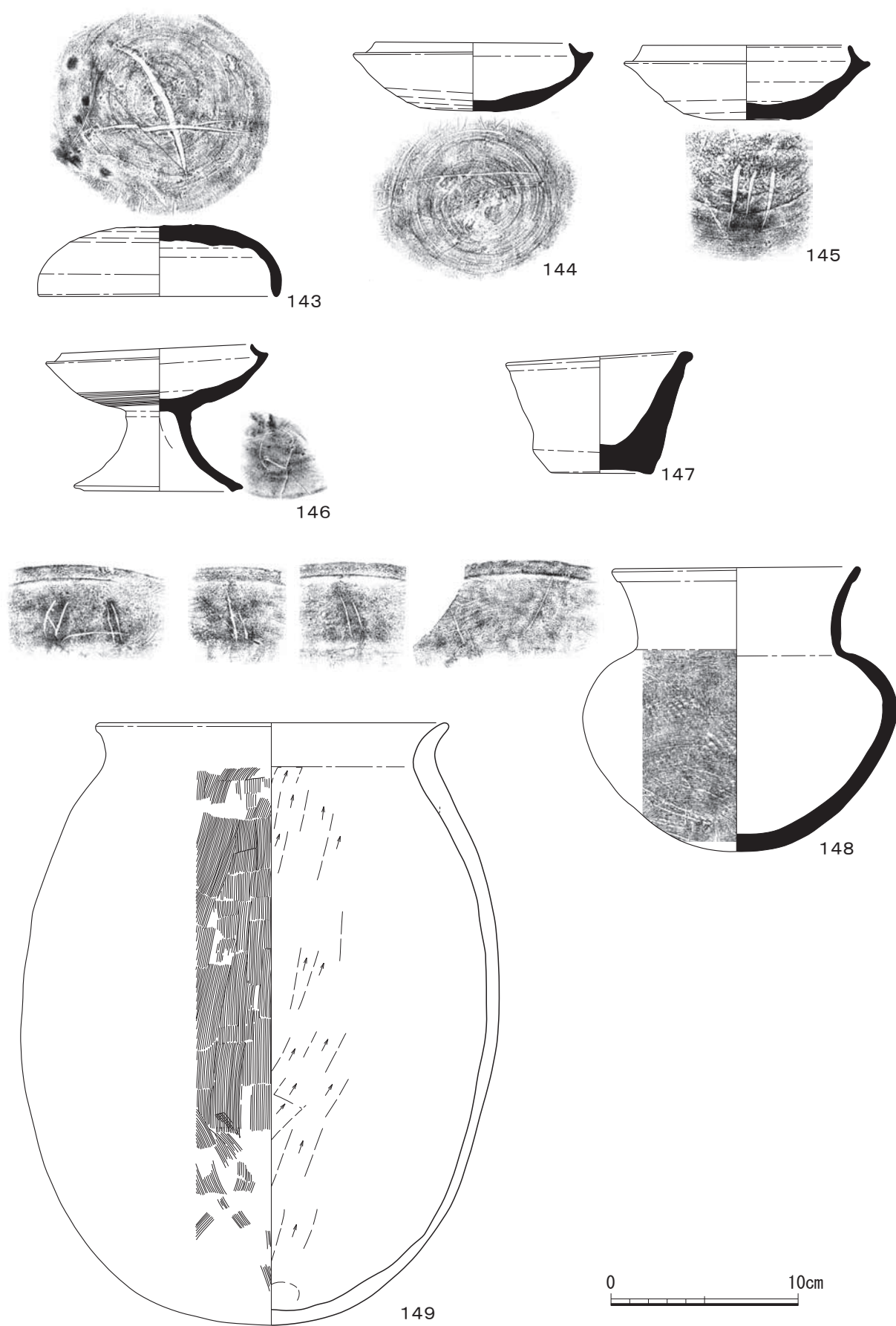
6区に位置する。標高51.8～52.2mの北側斜面に位置し、周辺にはS X 22・23がある。平面プランは不整楕円形を呈し、長さ1.37m、幅0.92m、最深部0.33mを測る。床面では直径約45cmのピットが見られる。出土遺物はなかった。

S X 32（第38図、図版32・33）

1区に位置する。標高51.5～52.3mの西側斜面に位置し、周辺にはS X 01・02・06がある。平面プランは隅丸方形を呈していたと思われる。長さ3.76m、幅1.3m以上、最深部0.54mを測る。床面では東壁中央部からやや北寄りの壁際に0.68×0.8m範囲の焼土が見られ、焼土上面では土師

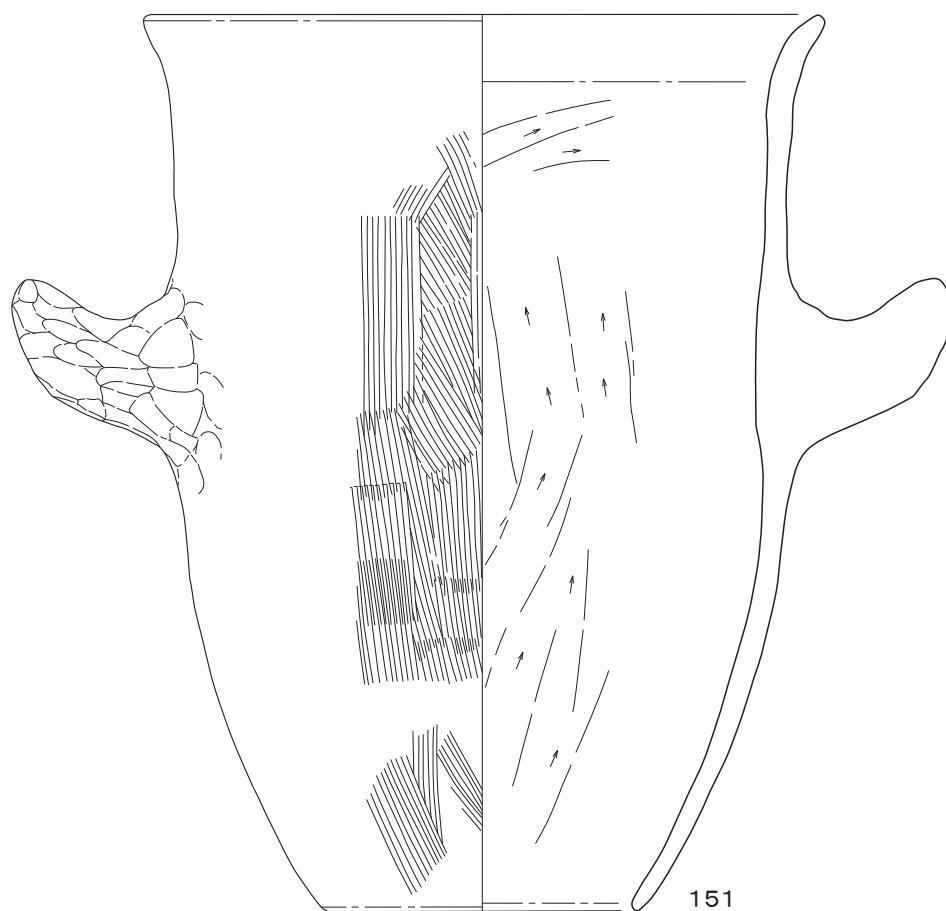
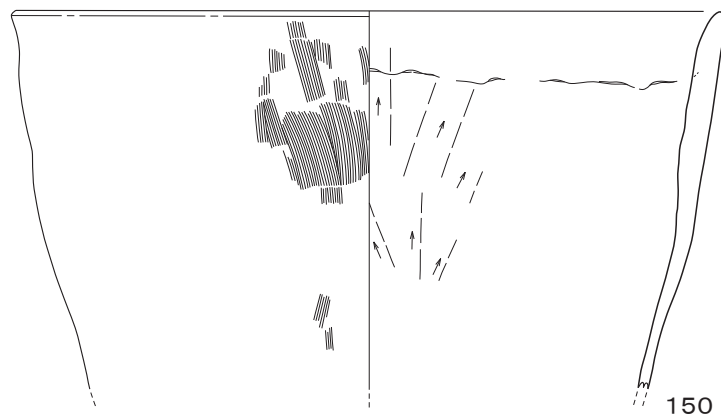


第38図 SX32実測図 (1/40)

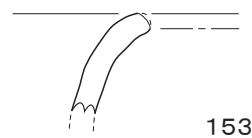
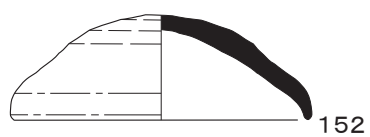


第39図 SX32出土遺物実測図① (1/3)

SX32

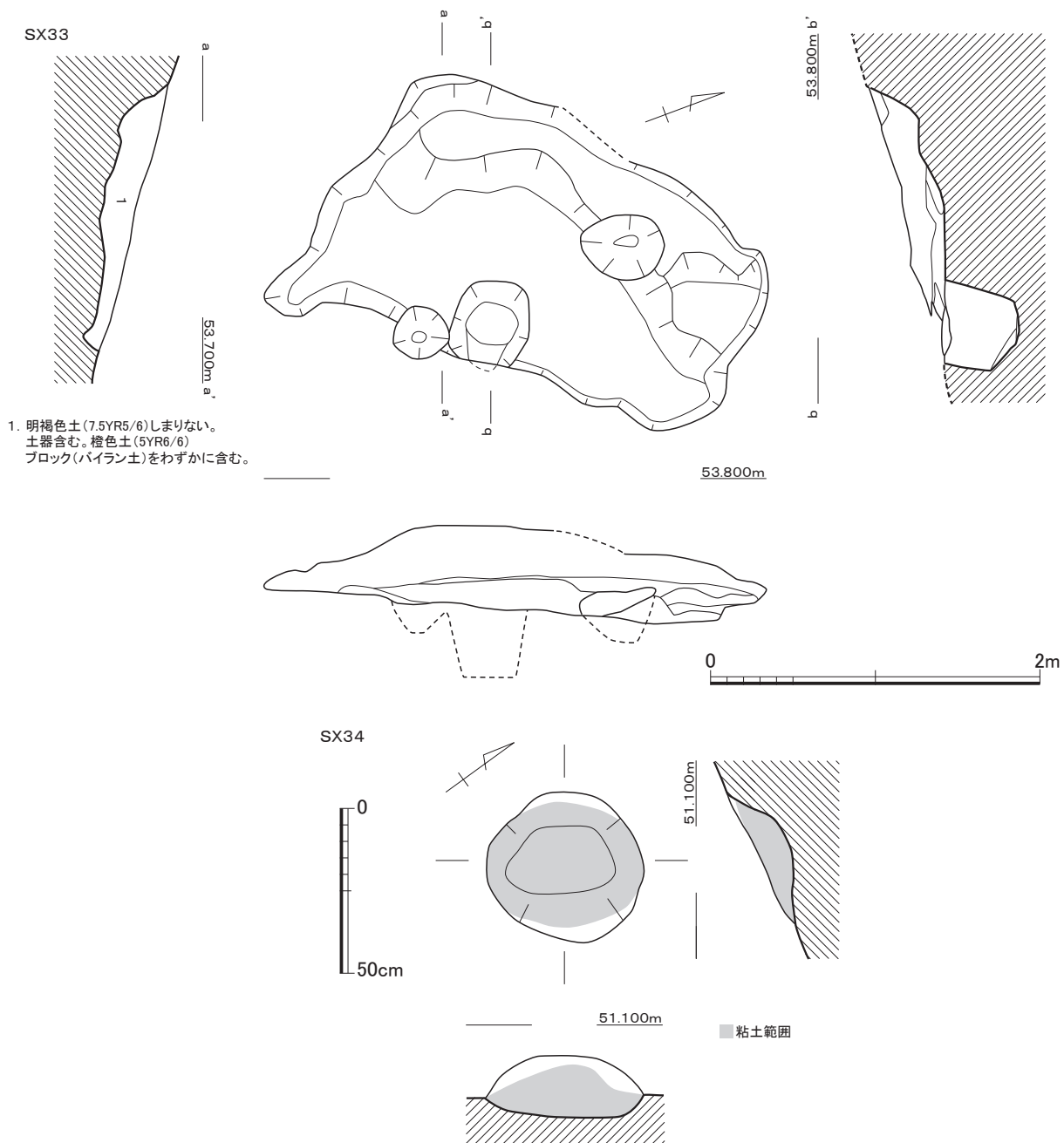


SX33



0 10cm

第40図 SX32出土遺物実測図②・SX33出土遺物実測図（1／3）

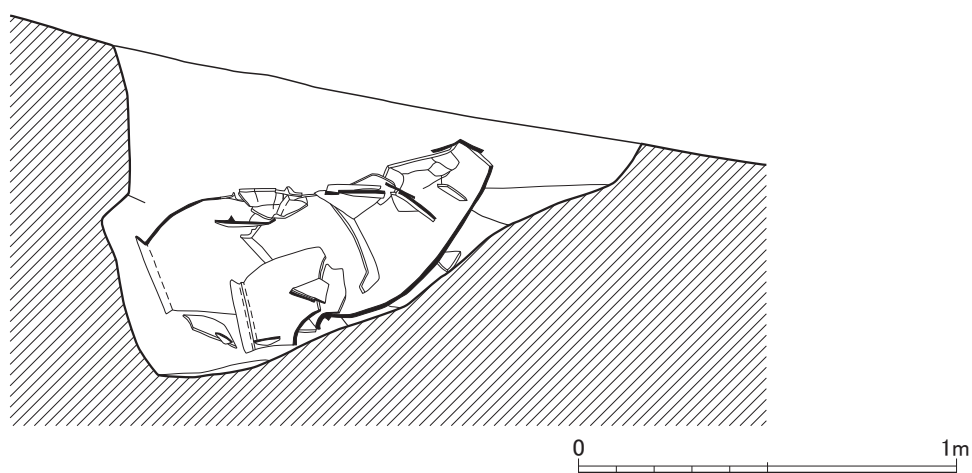
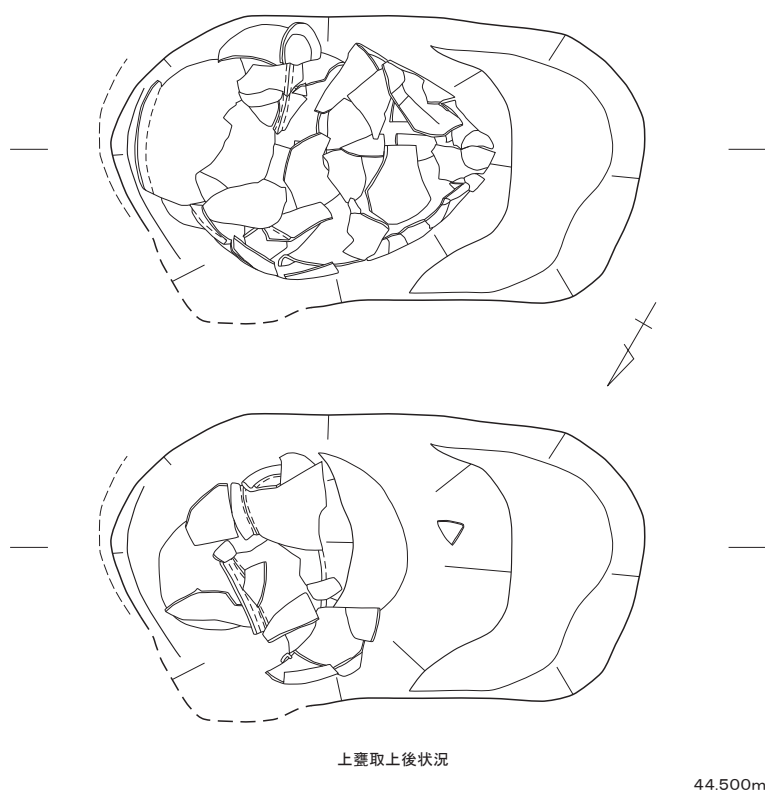


第41図 SX33・34実測図 (SX33は1/40、SX34は1/20)

器の甕・甔が置かれた状態で出土し、焼土南側では須恵器が散在していた。カマドの痕跡と考えられる。遺構の平面プランや焼土検出位置等から竪穴住居跡と思われ、東壁部分には壁から突出した溝状遺構があり、カマドの煙道部と思われる。支柱穴や壁溝等の付帯施設は確認できなかった。埋土の上層は黄褐色土が堆積し、下層は橙色土が主体となる。出土遺物は、須恵器・土師器がある。

出土遺物 (第39・40図、図版40・41・45)

須恵器 (143~148) 143は杯H蓋で、口径12.9cmを測る。口縁部は直立に近い傾きになり、天井部は外面約1/2に回転ヘラケズリを施す。144・145は杯H身で、口径はそれぞれ10.6cm・11.15cmを測る。いずれも立ち上がりは内傾し、底部は外面約1/2に回転ヘラケズリを施す。146は有蓋高杯で、口径10.1cmを測る。立ち上がりは内傾しつつ端部が直立に近い傾きになり、



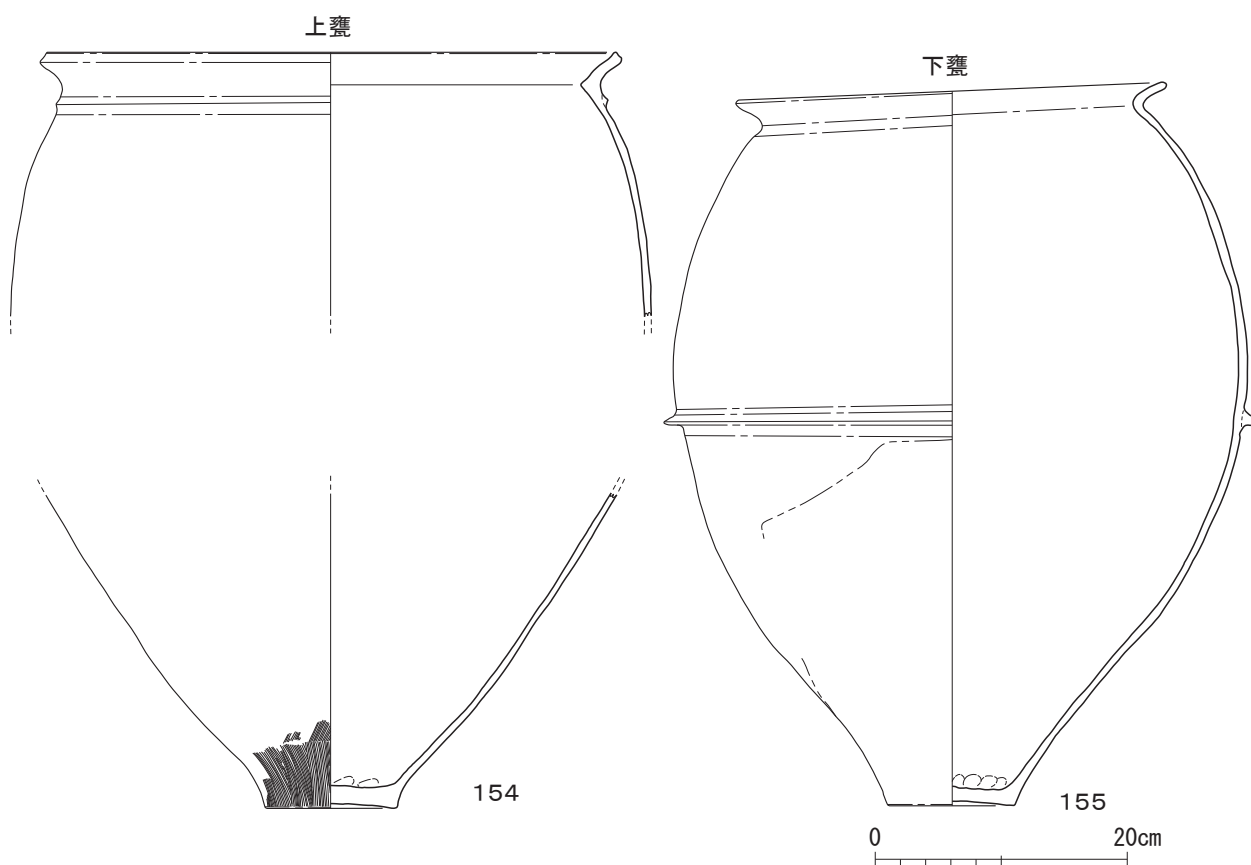
第42図 SJ01実測図 (1/20)

底部外面ではカキメを施す。脚部は短脚で、裾部が大きく開く。端部は断面三角形を呈す。147はすり鉢で、口径10.0cmを測る。体部～口縁部は直線的にのび、口縁端部は嘴状に仕上げる。底部は厚く、やや上げ底状を呈す。148は壺で、口径13.3cmを測る。頸部～口縁部は緩やかに外反し、体部は上位部が最大径を測る。体部外面は平行タタキ後カキメを施す。頸部外面にヘラ記号を施す。

土師器 (149～151) 149は甕で、口径18.85cmを測る。口縁部は緩やかに外反し、長胴を呈す。150・151は甕で、口径はそれぞれ28.3cm・27.0cmを測る。150は体部～口縁部が直線的にのび、体部上位～口縁部は器壁が厚くなる。151は口縁部が緩やかに外反し、体部は上位～中位が直線的になり、下位～底部はなだらかに内湾する。体部中位に把手が付く。

S X 33 (第41図、図版33)

5区に位置する。標高52.8～53.5mの南側斜面に位置し、周辺にはS X 28・30がある。平面ブ



第43図 SJ01甕棺実測図 (1/6)

ランは不整長方形を呈し、長さ2.71m、幅1.62m、最深部0.42mを測る。床面は2段掘り状になり、ピットが見られる。埋土は明褐色土を主体とする。出土遺物には須恵器・土師器がある。

出土遺物 (第40図)

須恵器 (152) 杯H蓋で、復元口径12.0cmを測る。口縁部は直立に近い傾きになり、天井部は外面約1/2に回転ヘラケズリを施す。

土師器 (153) 甕である。口縁部は緩やかに外反する。

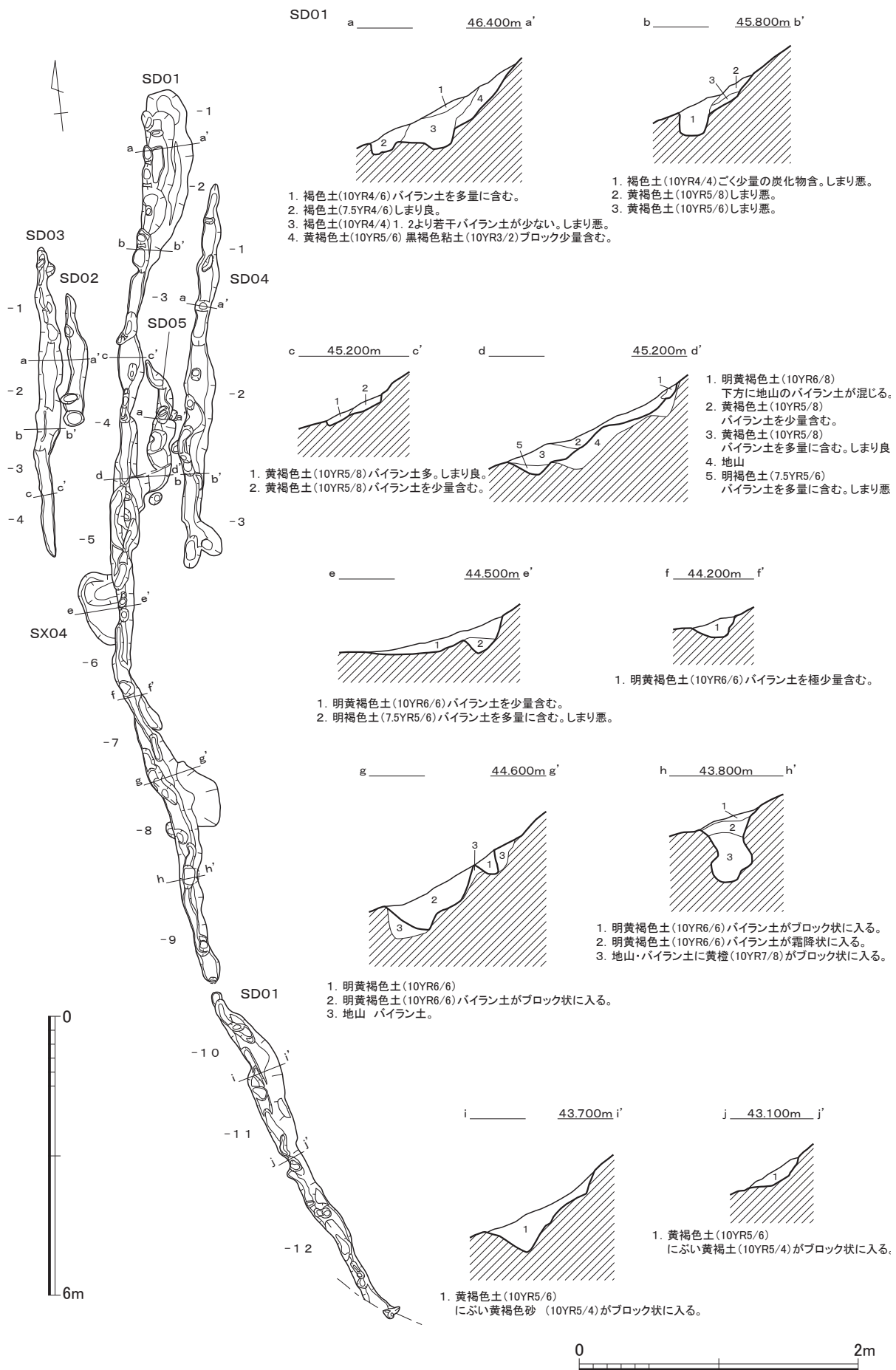
S X 34 (第41図、図版34)

5区に位置する。標高50.8～51.0mの南側斜面に位置し、周辺にはS X 25・26に近接する。遺構はピット状を呈し、平面プランは円形になる。直径約0.45m、最深部0.16mを測る。遺構内には明黄色の粘土が充填していた。遺構から約60cm北に位置するS X 26内でも同様に粘土が充填しており、本遺構はS X 26に属すると考えられる。粘土貯留遺構である。

(3) 甕棺墓

S J 01 (第42図、図版34)

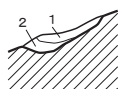
1区に位置する甕棺墓である。標高44.0～44.3mの西側緩斜面に位置し、周辺にはS D 03・04がある。平面プランは長楕円形を呈し、長さ1.4m、幅0.75m、最深部0.88mを測る。遺構は甕棺墓で、3段掘り状になる。調査時墓坑底面近くから、湧水が見られた。甕棺の出土状況は、通常の合せ口ではなく、上・下甕いずれも口縁部下向きの状態で斜面に据えられる。下甕はこの場で打ち欠かれた様で、底部は下甕棺外から出土している。さらに下甕の破片は上甕の口縁部を覆うように



第44図 SD01～05実測図（平面実測図は1／120、土層実測図は1／40）

SD02

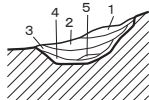
a 44.700m a'



1. 黄褐色土(10YR5/6) バイラン土多く含む。
2. 黄褐色土(10YR5/6) バイラン土をブロック状にわずかに含む。

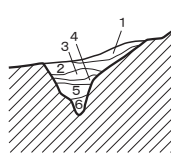
SD03

a 44.500m a'



1. 褐色土(10YR4/6)細粒砂。 バイラン土を多く含む。
2. 黄褐色土(10YR5/8) バイラン土の堆積。
3. 黄褐色土(10YR5/8)粘土バイラン土若干混。 4層を巻き上げ炭混。
4. 黒色土(2.5Y2/1)粘質土〜シルト(遺物包含)。
5. 黄褐色土(10YR5/8) バイラン土多く含む。

b 44.500m b'



1. 褐色土(10YR4/4) バイラン土を多く含む。炭混。
2. 明黄褐色土(10YR6/6) バイラン土を多く含む。
3. 明黄褐色土(10YR6/6) バイラン土。
4. 明黄褐色土(10YR6/6)
5. 黄褐色土(10YR5/8) バイラン土。
6. 黄褐色土(10YR5/8) バイラン土をわずかに含む。

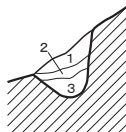
c 44.200m c'



1. 明黄褐色土(10YR6/6) バイラン土多く含む。

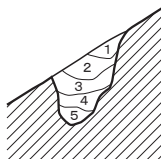
SD04

a 46.200m a'



1. 黄褐色土(10YR5/6) バイラン土を多量に含む。
2. 黄褐色土(10YR5/6) バイラン土を少量含む。
3. にぶい黄褐色土(10YR5/4)

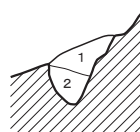
b 45.700m b'



1. 黄褐色土(10YR5/6) バイラン土を少量含む。
2. 黄褐色土(10YR5/6) バイラン土を多量に含む。
3. 黄褐色土(10YR5/6) バイラン土を少量含む。炭混。
4. 黄褐色土(10YR5/8) バイラン土をわずかに含む。炭混。明褐色土(7.5YR5/6)中砂粒ブロックをわずかに含む。
5. 明褐色土(7.5YR5/6)

SD05

a 45.400m a'



1. 明黄褐色土(10YR6/6) バイラン土を少量含む。
2. 橙色土(7.5YR6/6) バイラン土と橙色砂(7.5YR6/8)が互層になっている。



第45図 SD02～05土層実測図 (1/40)

置かれている。甕棺の法量は上甕の方が大きく、器高は約63cmを測る。

出土遺物 (第43図、図版42)

弥生土器 (154・155) いずれも甕で、口径はそれぞれ45.0cm・33.6cmを測る。154は口縁部がくの字に屈曲し、頸部外面直下に断面三角形の突帯が付く。155の口縁部は屈曲し、傾きは水平よりやや立ち上がる。体部中位に断面二等辺三角形の突帯が付く。

(4) 溝

SD01 (第44図、図版35)

1区に位置する。標高42.6～46.2mの西側斜面に位置し、SX04と切合うが前後関係は不明である。溝は南北方向にのび、調査区外へ続く。長さ約27.3m、最大幅1.04m、最深部0.27mを測る。埋土は黄褐色土を主体とし、出土遺物には須恵器・瓦器等がある。

出土遺物 (第46図)

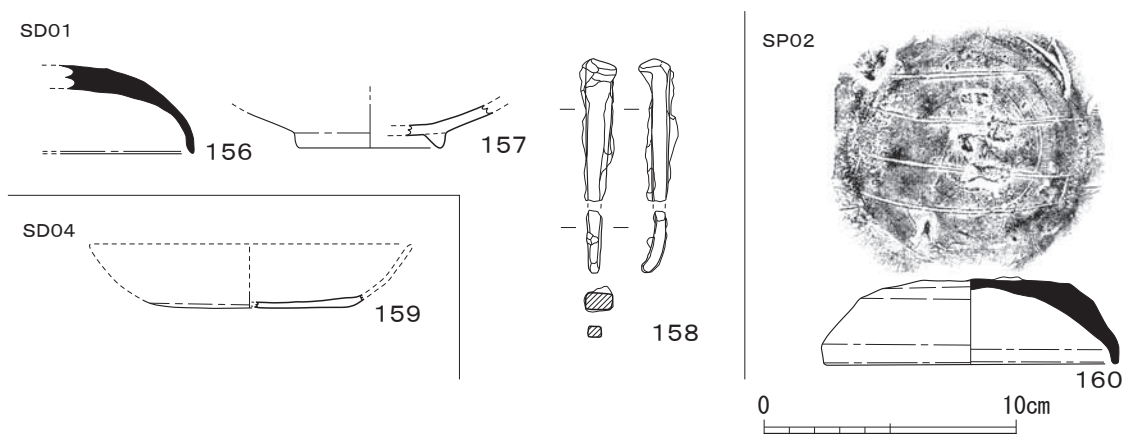
須恵器 (156) 杯H蓋である。口縁部は直立に近い傾きになり、天井部は回転ヘラケズリを施す。

瓦器 (157) 椀である。底部には低い断面三角形の高台が付く。

鉄製品 (158) 釘である。頭部は直角に屈曲し、先端部付近は緩やかに曲がる。断面四角形を呈す。

SD02 (第44・45図、図版35)

1区に位置する。標高44.2～44.5mの西側斜面に位置し、周辺にはSX03、SD03・05がある。溝は南北方向にのび、長さ2.88m、幅0.44m、最深部0.13mを測る。埋土は黄褐色土を主体とし、出土遺物には須恵器があるが、図化できるものはなかった。



第46図 SD・SP出土遺物実測図（1／3）

SD03（第44・45図、図版35）

1区に位置する。標高43.9～44.5mの西側斜面に位置し、周辺にはSX03、SD02・05がある。溝は南北方向にのび、長さ6.69m、幅0.52m、最深部0.31mを測る。埋土は黄褐色土が主体となり、表層には褐色土が堆積する。出土遺物には須恵器・土師器・黒曜石チップがあるが、図化できるものはなかった。

SD04（第44・45図、図版35）

1区に位置する。標高44.9～46.3mの西側斜面に位置し、周辺にはSX05、SD01・05がある。溝は南北方向にのび、長さ8.28m、幅0.65m、最深部0.37mを測る。埋土は黄褐色土が主体となり、出土遺物には土師器がある。

出土遺物（第46図）

土師器（159） 杯の底部である。外面には回転ヘラ切り後のナデが残る。

SD05（第44・45図、図版35）

1区に位置する。標高44.8～45.0mの西側斜面に位置し、周辺にはSD01・04がある。溝は南北方向にのび、長さ2.8m、幅0.5m、最深部0.30mを測る。埋土は上層に黄褐色土、下層に橙色土、出土遺物には須恵器・土師器・安山岩剥片があるが、図化できるものはなかった。

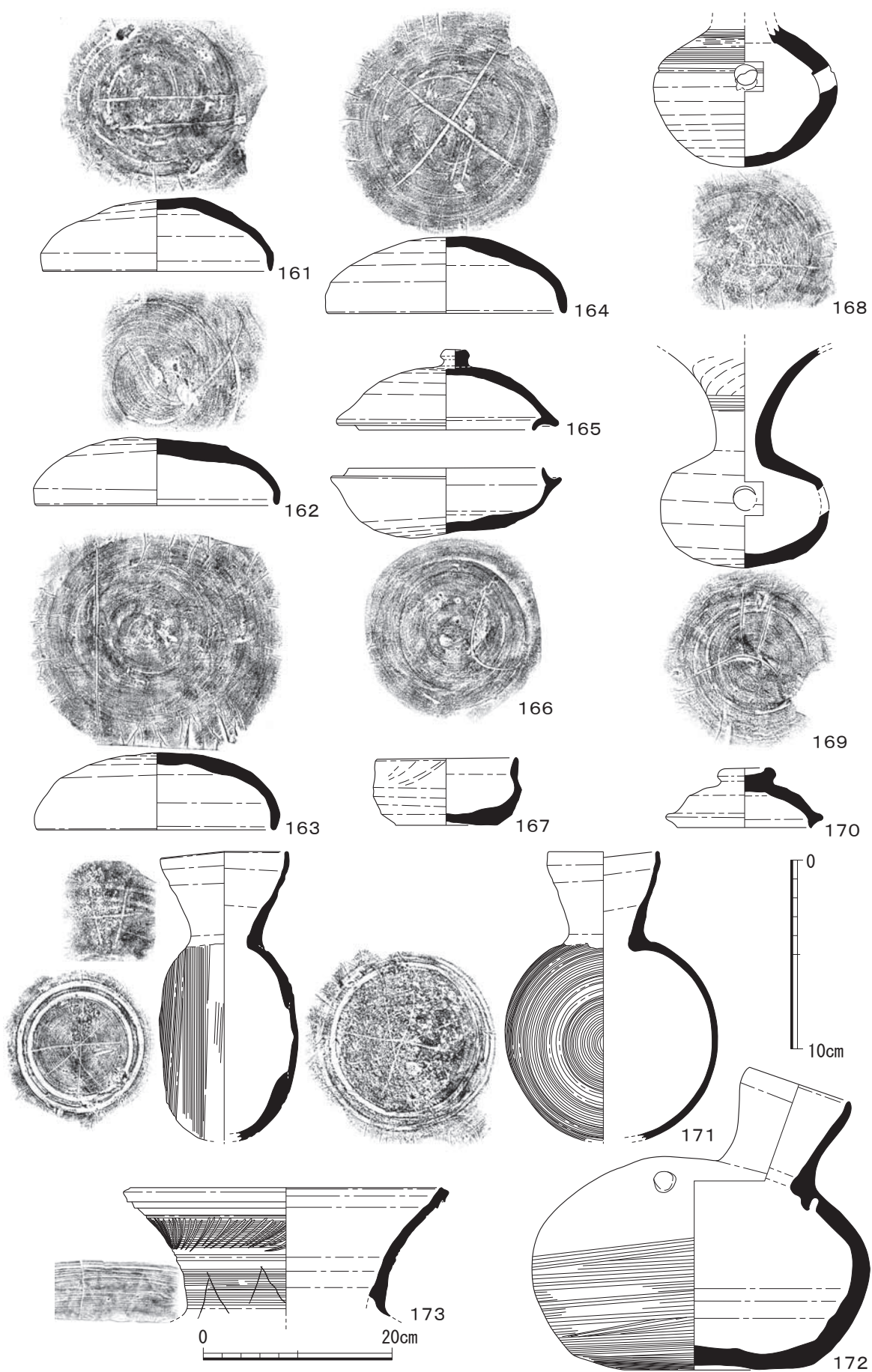
（5）その他の遺構・調査区内表採遺物

SP02出土遺物（第46図）

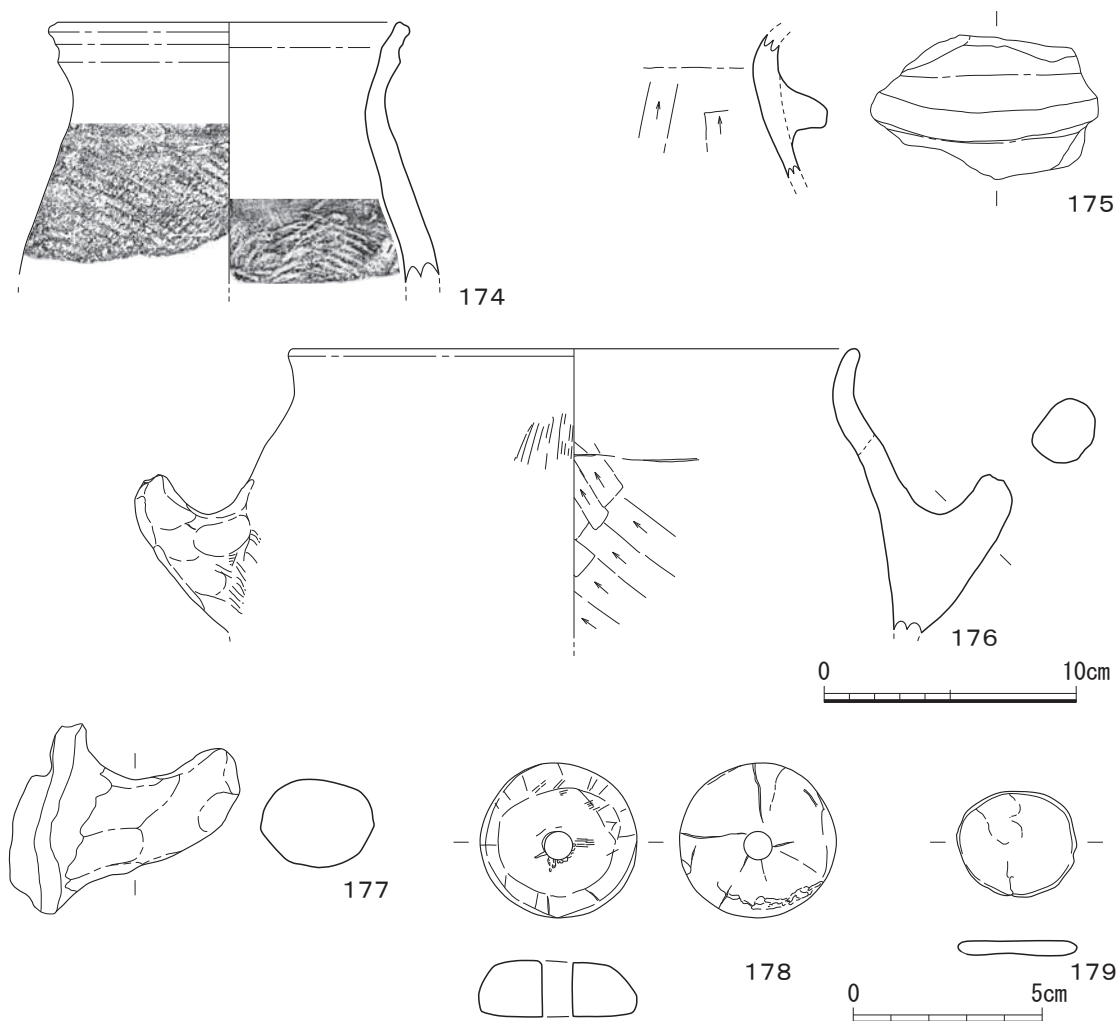
須恵器（160） 杯H蓋で、口径11.7cmを測る。口縁部は直立に近い傾きになり、天井部は外面約1／2に回転ヘラケズリを施す。

調査区内表採遺物（第47・48図、図版42・43・45）

須恵器（161～173） 161～164は杯H蓋で、口径12.1～12.9cmを測る。いずれも口縁部は直立に近い傾きになり、天井部外面は回転ヘラケズリを施す。165は杯G蓋で、口径9.3cmを測る。かえりは口縁部下へわずかに突出し、天井部は外面約2／3に回転ヘラケズリを施す。つまみは小径のボタン状を呈す。166は杯H身で、口径10.35cmを測る。立ち上がりは内傾しつつ端部が直立に近い傾きになる。底部は外面約1／2に回転ヘラケズリを施す。167は鉢か？口径7.6cmを測る。口



第47図 調査区内表採遺物実測図① (173は1/6、他は1/3)



第48図 調査区内表採遺物実測図②（178、179は1/2、他は1/3）

縁部はほぼ直立する。口縁部～頸部外面ではシボリ痕が見られ、頸部内面では稜が付く。体部は角張った形状を呈す。168・169は甕である。168は体部中位が張り出し、中位以下は丸みを持つ。体部上位外面はカキメを施し、中位では沈線・穿孔が見られる。下位～底部は回転ヘラケズリを施す。169は頸部～口縁部が外反し、大きく開く。体部は扁平な球形を呈し、中位で穿孔が見られる。体部中位～底部外面は回転ヘラケズリを施す。170は蓋で、復元口径7.0cmを測る。かえりは口縁部下に突出し、口縁部～かえり間はほとんど窪まない。天井部外面には中央部が深く窪むボタン状のつまみが付く。171は提瓶で、口径5.9～6.8cmを測る。体部は円盤状を呈し、一方の面にはカキメ・沈線を施す。また、体部内面には円盤閉塞の痕跡が確認でき、両外面には同一記号のヘラ記号が見られる。172は平瓶で、口径5.6cmを測る。頸部は外反し、口縁部はやや内湾する。体部は扁平な球形を呈し、底部は平底である。体部上位外面にはボタン状の突起付き、内面では基部付近に貫通しない小穴が見られる。体部中位～下位外面ではカキメを施す。173は大甕で、復元口径34.4cmを測る。口縁端部は断面四角形を呈し、外面に段が付く。頸部外面は2段に分け沈線を巡らせ、沈線下にカキメ後連続斜線文・ヘラ記号を施す。

土師器（174～177） 174・175は甕である。174は復元口径14.2cmを測る。口縁部は外傾し、端部は断面四角形を呈す。また、口縁部外面には断面三角形の突帯を作り出す。体部は膨らみがな

く、外面では擬格子タタキ、内面で同心円文当て具が見られる。175は頸部に断面四角形の突帯が付く。176・177は甌である。176は復元口径22.6cmを測り、口縁部がやや外傾する。体部は膨らみ、外面に把手が付く。177は把手で、ナデにより整形する。

石製品（178） 紡錘車である。直径4.1cmを測り、裏面では放射状の沈線が見られる。

土製品（179） 円盤状土製品である。直径約3cm、厚さ0.4cmを測る。ナデにより整形する。本堂遺跡第9次調査出土のものに類似する。

表1 梅頭遺跡第3次調査出土遺物観察表①

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径④高台径 ⑤最大径 ()は復元	形態・技法の特徴	A：胎土 B：焼成 C：色調	備考
1	須恵器	杯蓋	1号窯跡 灰原表採	①14.0②2.0 つまみ径2.8	回転ナデ整形後、天上部内面を不定方向ナデ。外面2/3を回転ヘラケズリ。つまみ貼付。	A:0.5～1.5mmの白色砂粒を多量含む。 B:良好。C:外暗灰N3/～黒2GY2/1～灰黄2Y6/2、内灰N4/～N5/。	口縁部大きい歪みあり。
2	須恵器	杯身	1号窯跡 灰原表採	①13.7②4.6 ④9.8	回転ナデ整形。底部外面はヘラ切り後ナデ、内面をナデ。高台貼付。底部外面に板状圧痕あり。	A:0.5～1mmの白色砂粒を多量含む。 B:良好。C:内外共灰N5/。	
3	須恵器	杯身	2号窯跡 D区西最下層床面(?) 粘土内	①(10.6) ②3.3+α 受部径(13.0)	回転ナデ整形後、底部内面をナデ。外面1/3を回転ヘラケズリ。	A:1mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。 C:外灰N4/、内灰N5/。	
4	須恵器	杯蓋	2号窯跡 3区 左	①(14.4)②4.4	回転ナデ整形後、外面1/2を手持ちヘラケズリ。内面に同心円文当て具、シッタ痕。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。 C:外灰N4/～暗灰N3/、内灰白N7/。	天井部外面ヘラ記号。
5	須恵器	杯蓋	2号窯跡 灰原中央中区褐色土	①13.2～12.0 ②4.5	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面1/4を回転ヘラケズリするが、中央はナデ。	A:0.5～4mmの白色砂粒を少量含む。 B:良好。C:内外共暗オリーブ灰2.5GY4/1。	外面ヘラ記号。全体に歪みあり。
6	須恵器	杯蓋	2号窯跡 灰原中央中区黄褐色土	①(14.4)②4.5	摩減の為、調整不明。	A:1mmの白色砂粒を少量含む。B:不良。 C:外灰白2.5Y8/2～オリーブ褐2.5Y4/3、内灰白2.5Y8/2。	
7	須恵器	杯蓋	2号窯跡 灰原右下区	①(13.8)②3.9	摩減の為、調整不明。	A:1～2mmの白色砂粒を少量含む。B:不良。 C:内外共浅黄2.5Y7/3～灰白2.5Y8/2	口縁部付近ヘラ記号。
8	須恵器	杯蓋	2号窯跡 灰原左下区黄褐色土	①(14.0) ②3.6+α	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面2/5を回転ヘラケズリ。	A:1mm以下の砂粒を少量含む。 B:不良。C:外灰白10Y7/1～灰N5/～灰N6/、内灰白10Y7/1。	天井部外面ヘラ記号。全体に大きい歪みあり。
9	須恵器	杯蓋	2号窯跡 灰原左下区黄褐色土	①13.7②3.25	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面2/5を回転ヘラケズリ。	A:1mm以下の砂粒を少量含む。 B:良好。C:内外共灰N5/。	天井部外面ヘラ記号。全体に歪みあり。
10	須恵器	椀	2号窯跡 灰原中央中区褐色土	①9.6②7.3	回転ナデ整形後、底部内面をナデ。外面2/5を回転ヘラケズリ。	A:0.5～1mmの白色砂粒を少量含む。 B:良好。C:内外共灰N4/。	全体に大きい歪みあり。
11	須恵器	横瓶	2号窯跡 灰原中央下区	①13.15～ (12.95) ②5.0+α	回転ナデ整形。内面同心円文当て具。口縁接合部では粘土接合痕が見られる。	A:1mmの白色砂粒を少量含む。 B:不良。C:内外共灰黄2.5Y7/2。	頸部外面ヘラ記号。
12	土師器	椀	2号窯跡 灰原左下区黄褐色土	②2.3+α④(8.2)	回転ナデ整形。底部外面はヘラ切り後ナデ。高台貼付。	A:1mm以下の砂粒、赤褐色粒を少量、 3mmの礫を微量含む。B:良好。C:外にぶい黄橙10YR7/4、内橙7.5YR7/6～にぶい黄橙10YR7/3。	
13	土師器	甌	2号窯跡 灰原左下区黄褐色土	②5.45+α	指頭痕を残すナデ整形。	A:2mm以下の砂粒を多量、3～4mmの礫をやや多量含む。B:良好。C:外にぶい黄橙10YR7/4、内橙5YR6/6～7.5YR7/6。	把手。
14	土師器	甌	2号窯跡 灰原左中区黄褐色土 2号窯跡 灰原左下区黄褐色土	①(27.6) ②10.7+α	口縁はヨコナデ、体部外面タテハク、内面上位はヨコハク後ナデ、屈曲部以下は縦方向のヘラケズリ。	A:0.5～1mmの白色砂粒をやや多量、赤褐色粒を微量含む。B:良好。C:内外共橙5YR7/6。	
15	土製品	紡錘車	2号窯跡 灰原右中央区黄褐色土	縦3.9横3.9厚1.0 重20.4	細かい面取り加工を行っている。	A:0.5mmの砂粒少量と黒色粒を微量含む。B:良好。C:内外共N4/。	須恵質に焼成。
16	土製品	窯壁	2号窯跡 灰原右下区	縦9.2+α 横7.7+α 厚8.7+α	上面やや還元。	C:灰白5Y7/1～黄褐2.5Y7/6～にぶい褐7.5YR5/3～赤褐2.5YR4/6。	
17	須恵器	杯蓋	2号窯跡 灰原左下区 黒色土	①(13.4)②4.35	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面2/5を回転ヘラケズリ。	A:1mm以下の砂粒を少量含む。 B:良好。C:外暗灰N3/～暗赤灰7.5R3/1～灰N6/、内暗灰N3/。	天井部外面ヘラ記号。
18	須恵器	杯身	2号窯跡灰原下層確認トレンチ	①(9.9)②4.0 受部径(12.2)	回転ナデ整形後、外面3/5を回転ヘラケズリ。	A:2mm以下の砂粒を多量含む。 B:良好。C:内外共暗灰N3/～灰N6/。	底部外面にヘラ記号。全体に歪みあり。
19	須恵器	杯身	2号窯跡 灰原中央中区黒色土	①10.4②4.05 受部径12.85	回転ナデ整形後、底部内面をナデ。外面3/5を回転ヘラケズリ。	A:1mmの白色砂粒を少量含む。 B:良好。C:外灰白N7/～暗灰N3/、内灰N6/～暗灰N3/。	底部外面ヘラ記号。全体に歪みあり。
20	須恵器	杯身	2号窯跡灰原下層確認トレンチ	①(11.4)②4.4 受部径(13.8)	回転ナデ整形後、内面中央のみナデ。外面3/5を回転ヘラケズリ。	A:1mm以下の砂粒を少量含む。 B:不良。C:内外共灰白5Y7/1～灰5Y5/1。	
21	須恵器	杯身	2号窯跡 灰原機械掘削廃土中	①(13.0) ②5.4+α	回転ナデ整形後、外面2/5を回転ヘラケズリ、中位にカキメ後沈線2条を施す。底部内面は降灰の為、調整不明。	A:1mm以下の砂粒を微量含む。 B:良好。C:内外共灰N6/。	外面底部ヘラ記号。体部外面、底部内面降灰。口縁部歪みあり。
22	須恵器	高杯	2号窯跡 灰原中央中区黒色土	①(13.0) ②4.0+α	回転ナデ整形後、底部内面をナデ、外面カキメ後沈線2条。	A:1mmの白色砂粒を多量含む。 B:良好。C:内外共緑黒5G2/1。	杯部全面降灰。大きい歪みあり。
23	須恵器	平瓶 (ミニチュア)	2号窯跡 灰原中央中区黒色土	②5.6+α③5.4	全体をナデ整形。体部下位～底部外面を手持ちヘラケズリ。	A:0.5～1mmの白色砂粒を少量含む。 B:不良。C:内外共暗灰黄2.5Y5/2～灰褐7.5YR4/2。	
24	須恵器	提瓶	2号窯跡灰原下層確認トレンチ	①(5.6)②7.4+α	手づくね整形。口縁部は回転ナデ。円盤閉塞痕が見られる。	A:1mm以下の砂粒を少量含む。 B:不良。C:外明黄褐10YR7/6～灰黄2.5Y7/2、内浅黄2.5Y7/4。	

表2 梅頭遺跡第3次調査出土遺物観察表②

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径④高台径 ⑤最大径 ()は復元	形態・技法の特徴	A：胎土 B：焼成 C：色調	備考
25	須恵器	甕	2号窯跡灰原下層確認トレンチ	①(21.6) ②7.15+ α	体部外面は平行タタキ、内面は同心円文当て具、口縁は回転ナデ整形。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。 B:不良。C:外灰白N7/、内灰白2.5Y8/1～灰白N7/。	頸部外面へラ記号。
26	須恵器	大甕	2号窯跡灰原下層確認トレンチ 2区 表土ハギ表採	①(44.8) ②32.4+ α	体部外面は擬格子のタタキ、内面は同心円文当て具。口縁は回転ナデ整形後、頸部外面にカキメ、沈線、連続斜線文の順に施文。	A:3mm以下の白色砂粒、微細な黒色粒をやや多量含む。B:良好。C:外オリーブ灰2.5GY5/1～暗オリーブ灰2.5GY4/1、内暗緑灰10GY4/1～暗青灰5BG4/1。	
27	須恵器	大甕	2号窯跡灰原中央中区 黄褐色土 2号窯跡1区左 黄褐色土(天井崩落後の流入土) 2号窯跡1区左 褐色土(天井崩落後の流入土) 2号窯跡灰原中央～右・中・下区 ベルト 黄褐色土 2号窯跡灰原中央～右・中・下区 ベルト 黒褐色土 2号窯跡1区左 黄褐色土	②17.45+ α	体部外面は平行タタキ、内面は同心円文当て具、口縁は回転ナデ整形。頸部外面連続斜線文か？	A:2mm以下の砂粒を多量含む。B:良好。C:内外共暗灰N3/。	頸部大きい歪みあり。 外面降灰。
28	須恵器	杯蓋	SX01-2 黄色土中	①13.25②3.8	回転ナデ整形後、外面2/3を回転ヘラケズリ。	A:1mmの白色砂粒、4mmの礫を少量含む。B:良好。C:外灰N5/～灰N4/、内灰N5/。	天井部外面へラ記号。全体に歪みあり。
29	須恵器	杯蓋	SX01-1 黄色土中	①12.9②4.2	回転ナデ整形後、外面2/3を回転ヘラケズリ。	A:1mmの白色砂粒を少量、黒色粒を微量含む。B:不良。C:内外共灰白色5Y7/1。	天井部へラ記号。
30	須恵器	杯身	SX01-1 黄色土中	①11.7②3.8 受部径13.1	回転ナデ整形後、外面2/3を回転ヘラケズリ。	A:1mm以下の白色砂粒を少量含む。B:不良。C:外灰白5Y7/2、内浅黄2.5Y7/3。	底部外面へラ記号か？
31	須恵器	高杯	SX01-2 黄色土中	①(12.1)②10.15 裾部径10.55	回転ナデ整形。杯部下位にカキメあり。	A:2mm以下の白色砂粒を少量含む。B:不良。C:外橙2.5YR6/6、内にぶい赤褐5YR5/3。	脚部外面へラ記号。
32	須恵器	短頸壺	SX01-1 黄色土中	①(5.6)②6.0	回転ナデ整形。外面3/5を手持ちヘラケズリ、中位の一部を回転ヘラケズリ。	A:1～2mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:内外共暗灰N3/。	体部外面降灰。 大きい歪みあり。
33	須恵器	杯身	SX02-1	①11.5②4.1 受部径13.4	回転ナデ整形後、外面4/5を回転ヘラケズリ。	A:1mmの白色砂粒、4mmの礫を少量含む。B:やや不良。C:外オリーブ灰2.5GY6/1～5/1、内オリーブ灰2.5GY6/1。	底部外面へラ記号。
34	須恵器	鉢	SX02-1	①(7.2)②4.0 ③5.0	摩減の為、調整不明。	A:0.5～1.5mmの白色砂粒を少量含む。B:不良。C:外灰白5Y7/2～灰黄2.5Y7/2、内灰白5Y7/2。	底部外面へラ記号か？
35	須恵器	杯蓋	SX05	①(12.6) ②3.9+ α	回転ナデ整形後、内面をナデ。外面3/4を回転ヘラケズリ。	A:1mm以下の白色砂粒を少量含む。B:良好。C:内外共灰N4/。	
36	土師器	甕	SX05	②4.9+ α	口縁ヨコナデ、体部外面をタテハケ、内面をケズリ。	A:2mm以下の白色砂粒を多量、赤褐色粒を少量含む。B:良好。C:内外共にぶい黄橙10YR7/4。	
37	須恵器	杯身	SX06 ⑬ SX06 ⑳ SX07	①10.4②4.05 受部径12.8	回転ナデ整形後、底部内面をナデ。外面2/3を回転ヘラケズリ。	A:1mm以下の砂粒をやや多量含む。B:良好。C:外灰5Y5/1、内灰N5/。	外面降灰。
38	須恵器	鉢	SX06 ⑮ SX06 埋土	①(9.0)②5.2	回転ナデ整形。底部外面はヘラ切り。	A:2mm以下の白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰白5Y7/1～灰5Y6/1、内灰5Y6/1。	
39	須恵器	甕	SX06 ⑧ SX06 (21)	①(22.4) ②6.85+ α	体部外面は平行タタキ後カキメ、内面は同心円文当て具。口縁は回転ナデ整形。頸部外面はタタキ痕か？	A:0.5～1mmの白色砂粒、3～4mmの礫を少量含む。B:良好。C:内外共灰赤7.5R6/2～5/2～灰N4/。	頸部外面へラ記号。
40	須恵器	碗	SX10	①(10.7) ②8.6+ α	回転ナデ整形後、内面をナデ。外面2/5を手持ちヘラケズリ、以上をカキメ、体部中央やや上に2条沈線。	A:2mm以下の砂粒を多量含む。B:良好。C:外灰N6/、内灰N5/。	口縁部～体部に大きい歪みあり。
41	須恵器	杯蓋	SX11検出面 SX11-2	①(12.8)②3.8	回転ナデ整形後、内面をナデ。外面2/3を回転ヘラケズリ。	A:2mm以下の砂粒を微量含む。B:良好。C:外暗灰N3/～灰白N7/、内暗灰N3/。	外面降灰。
42	須恵器	杯蓋	SX11-1	①12.5②3.65	回転ナデ整形後、内面をナデ。外面1/2を回転ヘラケズリ。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰N5/、内灰N6/。	天井部外面へラ記号。口縁部～体部歪みあり。
43	須恵器	杯蓋	SX11 ④	①(13.8)②4.5	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面1/3を回転ヘラケズリ。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:不良。C:外にぶい赤褐5YR5/4、内橙7.5YR6/6。	天井部外面へラ記号。
44	須恵器	杯身	SX11-2	①(11.6)②4.2 受部径(13.8)	回転ナデ整形後、底部内面をナデ。外面1/3を回転ヘラケズリ。	A:1mm以下の砂粒を微量含む。B:不良。C:外灰N5/、内灰N6/。	底部外面へラ記号。
45	須恵器	甕	SX11 ③	②53.0+ α ⑤(58.2)	体部外面は擬格子のタタキ、内面は同心円文当て具。	A:2mm以下の白色砂粒をやや多量含む。B:やや不良。C:外浅黄2.5Y7/3～黄灰2.5Y5/1、内にぶい黄2.5Y6/3～灰黄2.5Y5/2。	

表3 梅頭遺跡第3次調査出土遺物観察表③

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径④高台径 ⑤最大径 ()は復元	形態・技法の特徴	A：胎土 B：焼成 C：色調	備考
46	土師器	甕	SX11-2	①(29.2) ②6.25+α	口縁はヨコナデ。体部外面は タテハケ。内面屈曲部にヨ コハケ、以下を横方向ヘラケ ズリ。	A:2mm以下の砂粒を多量、雲母、赤褐色 粒を少量含む。B:良好。C:外にぶい褐 7.5YR5/4、内橙5YR6/6。	
47	須恵器	杯蓋	SX12-3	①(10.8)②3.1	回転ナデ整形後、天井部内面 をナデ。外面はヘラ切り後ナ デ。	A:1mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。 C:内外共灰白N7/。	天井部外面 ヘラ記号。
48	須恵器	杯蓋	SX12-3	①11.45②3.45	回転ナデ整形後、天井部内面 をナデ。外面1/2を回転ヘラケ ズリ。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。 C:外灰白N7/～暗灰N3/、内灰N5/～暗灰 N3/。	天井部外面 ヘラ記号。 内面降灰。
49	須恵器	鉢	SX12-3	②4.8+α	回転ナデ整形後、外面にカキ メ。	A:1mm以下の砂粒を少量含む。B:不良。 C:外浅黄2.3Y7/4～黄灰2.5Y6/1、内黄 灰2.5Y5/1。	
50	土師器	甕	SX12-2	①(19.2) ②5.2+α	口縁はヨコナデ。体部外面は タテハケ、内面はナデ。	A:2mm以下の砂粒、雲母、赤褐色粒を 少量含む。B:良好。C:外にぶい黄褐 10YR5/4、内暗灰黄2.5Y4/2。	
51	瓦	平瓦	SX12-3	長さ19.5+α 幅6.5+α 断面厚1.3	凹面に布目痕、凸面に平行タ タキあり。全体摩滅。	A:1mmの白色砂粒を少量、赤褐色粒を 多量含む。B:不良。C:凸凹共橙5YR6/6 ～浅黄10YR8/4。	
52	鉄製品	鉄滓	SX12-3	縦2.45横2.5 厚1.4重7.0		C:明黄褐10YR7/6～黒褐10YR3/1。	メタル残る。
53	須恵器	杯身	SX13-2	②3.0+α 受部径(11.6)	回転ナデ整形。底部はヘラ切 り後ナデ。	A:0.5mmの白色砂粒を少量、褐色粒を 微量含む。B:不良。C:外にぶい橙 7.5YR6/4、内灰褐7.5YR6/2。	底部外面 ヘラ記号。
54	瓦	丸瓦	SX13-2	長さ18.5+α 幅16.1+α 高さ8.1+α 断面厚1.0～1.8	凹面は摩滅の為、調整不明。 凸面は平行タタキ。	A:1mmの白色砂粒を少量、赤褐色粒を 微量含む。B:不良。C:内外共橙 5YR6/8。	
55	須恵器	杯蓋	SX15-1	①(13.1)②3.25	回転ナデ整形後、天井部内面 ナデ。外面1/3を回転ヘラケズ リ。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。 C:外暗灰N3/～灰N4/、内灰N4/。	天井部外面ヘラ 記号。口縁部 外面降灰。
56	須恵器	杯蓋	SX15-2	①13.05～11.2 ②4.8	回転ナデ成後、天井部内面を ナデ。外面1/3を回転ヘラケズ リ。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:不良。 C:外灰N5/、内灰5Y5/1。	天井部外面ヘラ 記号。口縁部～ 体部大きい歪み あり。
57	須恵器	杯身	SX15-1	①12.55②4.8 受部径14.5	回転ナデ整形後、底部内面を ナデ。外面1/2を回転ヘラケズ リ。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。 C:外灰N4/～暗灰N3/、内暗灰N3/。	底部外面ヘラ 記号。 外面降灰。
58	須恵器	高杯	SX15-1	①(12.0) ②14.75+α	回転ナデ整形。杯底部内面を ナデ。杯部外面屈曲部と下位 に1条沈線、脚部中位に3条沈 線あり。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。 C:外暗灰N3/、内灰N4/(杯)、暗灰 N3/(脚)。	脚部内面ヘラ 記号。外面、 杯部底部降灰。
59	須恵器	甕	SX15-1	①26.35 ②11.7+α	体部外面は擬格子のタタキ、 内面は同心円文当て具。口縁 は回転ナデ。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。 C:外灰N6/～黒N2/、内暗灰N3/～灰 N5/。	口縁部～頸部 内面3ヶ所 ヘラ記号。
60	土師器	甕	SX15 ④	①(8.2)②8.35	体部外面をタテハケ。内面を ヘラケズリ後ナデ。口縁内面 はヨコハケ。口縁はヨコナ デ。	A:2mm以下の砂粒を多量、3mmの礫を 少量含む。B:良好。C:内外共にぶい黄 橙10YR7/4。	体部外面に黒斑 あり。口縁部に 歪みあり。
61	土師器	甕	SX15 ①	①(12.3) ②11.6+α	体部外面をタテハケ。内面を 斜方向のヘラケズリ。口縁内 面はヨコハケ。口縁はヨコナ デ。	A:2mm以下の砂粒を多量、3～5mmの礫を 少量含む。B:良好。C:外にぶい黄橙 10YR7/4～明赤褐2.5YR5/6、内にぶい黄 橙10YR7/4～赤褐5YR4/6。	内外面部分的に 煤付着。
62	土師器	甕	SX15 ③ SX15 ④	①13.0②11.4+α	体部外面をタテハケ。内面を 斜方向のヘラケズリ。口縁内 面はヨコハケ。口縁はヨコナ デ。	A:2mm以下の砂粒を多量、3～5mmの礫を 少量含む。B:良好。C:内外共にぶい黄 橙10YR7/4～明赤褐2.5YR5/8。	体部外面黒斑、 煤付着。
63	土師器	甕	SX15-2	①(17.9) ②10.55+α	体部外面をタテハケ。内面を 斜方向のヘラケズリ。口縁内 面はヨコハケ。口縁はヨコナ デ。	A:2mm以下の砂粒、赤褐色粒、3～5mmの 礫を少量含む。B:良好。C:外にぶい黄 橙10YR7/4～明赤褐2.5YR5/6、内にぶい 黄橙10YR7/4。	
64	土師器	甕	SX15-2	①(17.9) ②7.3+α	体部外面をタテハケ。内面を 縦方向のヘラケズリ。口縁は ヨコナデ。	A:2mm以下の砂粒、赤褐色粒を少量含 む。B:良好。C:内外共にぶい黄橙 10YR7/4。	
65	土師器	甕	SX15-2	①(19.4) ②11.85+α	体部外面をタテハケ。内面を 縦方向後斜方向のヘラケズ リ。口縁はヨコナデする。	A:1mm以下の砂粒、雲母を微量含む。 B:良好。C:外橙5YR6/6、内橙5YR6/6～ 浅黄橙10YR8/4。	外面黒斑 あり。
66	土師器	甕	SX15-2	①(19.0) ②11.3+α	体部外面をタテハケ。内面を 縦方向のヘラケズリ。口縁は ヨコナデ。	A:2mm以下の砂粒、雲母を多量、3～5mm の礫を含む。B:良好。C:内外共にぶい 黄橙10YR7/4。	
67	土師器	甕	SX15 ② SX15-2	①(20.2) ②34.35+α	体部外面をタテハケ。内面を 縦方向のヘラケズリ。口縁内 面はヨコハケ。口縁はヨコナ デ。	A:2mm以下の砂粒を多量、3～7mmの 礫を少量含む。B:良好。C:外にぶい黄 橙10YR6/4～褐7.5YR4/4、内にぶい黄橙 10YR6/4。	体部外面 煤付着。
68	土師器	甕	SX15-2	②8.7+α③(9.9)	外面はタテハケ、内面は縦方 向のヘラケズリ。端部はヨコ ナデ。	A:2mm以下の砂粒、赤褐色粒を少量含 む。B:良好。C:内外共にぶい黄橙 10YR7/4～明赤褐5YR5/6。	

表4 梅頭遺跡第3次調査出土遺物観察表④

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径④高台径 ⑤最大径 ()は復元	形態・技法の特徴	A：胎土 B：焼成 C：色調	備考
69	土製品	模造鏡？	SX15-3	長さ2.8幅2.3 高さ3.0 孔径0.4～0.5	ナデ整形。上面をつまみ、そこに穿孔している。	A:1mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。C:内外共橙5YR7/8～7.5YR6/6。	
70	土製品	模造鏡？	SX15-3	長さ2.5幅2.05 高さ1.5 孔径0.3～0.35	ナデ整形。上面をつまみ、そこに穿孔している。	A:1mm以下の砂粒を微量含む。B:良好。C:内外共橙5YR6/6。	
71	土製品	土玉	SX15-2	長さ1.75径1.95 孔径0.3	ナデ整形。斜めに穿孔。	A:1mm以下の砂粒、雲母を微量含む。B:良好。C:明赤褐2.5YR5/8～にぶい黄橙10YR7/4。	
72	須恵器	杯蓋	SX16埋土	①(16.6) ②2.1+α	外面は摩滅の為、調整不明。内面は回転ナデ。	A:1mmの砂粒、茶褐色粒、雲母を微量含む。B:不良。C:外にぶい黄橙10YR6/4～橙5YR7/6、内黒褐7.5YR3/2。	
73	須恵器	杯身	SX16埋土	②1.45+α ④(10.0)	回転ナデ整形。底部外面を回転ヘラケズリ。	A:1mmの白色砂粒、茶褐色粒と微細な雲母を少量含む。B:良好。C:外橙5YR6/6～灰褐5YR4/2、内橙5YR6/6～にぶい赤褐5YR5/4。	
74	須恵器	杯蓋	SX18-2	①12.3②4.0	回転ナデ整形。外面1/3を回転ヘラケズリ。	A:0.5～2mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外暗灰N3/～黄灰2.5Y5/1、内暗灰N3/。	天井部外面ヘラ記号。内面～体部外面降灰。
75	須恵器	杯蓋	SX18-2	①12.5②3.7	回転ナデ整形。外面1/2を手持ちヘラケズリ。	A:1mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外暗灰N3/～灰白7.5Y7/1、内灰N6/。	天井部外面ヘラ記号。外面降灰。
76	須恵器	杯蓋	SX18-1	①(12.6)②4.4	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面2/3を回転ヘラケズリ。	A:0.5～3mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外暗青灰10BG3/1～オリーブ灰2.5GY5/1～灰白2.5GY8/1、内暗青灰10BG4/1。	天井部外面ヘラ記号。
77	須恵器	杯蓋	SX18上の壁を拡張した際の埋土中	①(12.95)②4.15	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面2/3を回転ヘラケズリ。	A:1mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外明オリーブ灰2.5GY7/1～暗オリーブ灰2.5GY3/1、内暗青灰5B4/1。	天井部外面ヘラ記号。
78	須恵器	杯蓋	SX18-1	①(13.4)②3.4	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面2/3を回転ヘラケズリ。	A:1～2mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰N3/、内灰N5/。	外面ヘラ記号。口縁部外面降灰。
79	須恵器	杯蓋	SX18-1	①(10.2)②4.5 つまみ径2.2 受部径(12.4)	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面1/3を回転ヘラケズリ。つまみは平坦なボタン状。	A:0.5～2mmの白色砂粒を多量、赤褐色粒を微量含む。B:不良。C:外にぶい橙5YR6/4～にぶい赤褐5YR5/4、内にぶい赤褐2.5YR5/4。	天井部外面ヘラ記号か？
80	須恵器	杯蓋	SX18-1	②1.9+α つまみ径2.65	天井部内面を回転ナデ後ナデ。外面を回転ヘラケズリ。つまみ貼付。	A:0.5～2mmの白色砂粒を少量含む。B:不良。C:外灰5Y4/1～にぶい赤褐2.5YR4/3、内灰黄2.5Y6/2。	
81	須恵器	杯身	SX18-2	①10.9②3.8 受部径12.7	回転ナデ整形後、底部内面をナデ。底部外面は降灰の為、調整不明。	A:0.5～3mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外暗灰N3/～にぶい黄2.5Y6/3、内灰N5/。	外面～受部上面降灰。
82	須恵器	杯身	SX18-1	①10.9②4.0 受部径12.5	回転ナデ整形。外面1/3を回転ヘラケズリ。	A:0.5～2mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰N5/～灰オリーブ5Y6/2、内灰N5/。	外面降灰。
83	須恵器	杯身	SX18上の壁を拡張した際の埋土中	②1.0+α④(9.0)	回転ナデ整形後、底部内面をナデ。高台貼付。底部外面は摩滅。	A:微細な白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外暗灰N3/、内灰N5/。	外面降灰。
84	須恵器	高杯	SX18-2	②1.75+α 裾部径(6.0)	回転ナデ整形。外面にシボリ痕あり。	A:0.5mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:内外共灰赤2.5YR4/2～黒褐7.5YR3/1。	
85	土師器	甕	SX18-1	②12.7+α	体部外面をタテハケ。内面を縦方向のヘラケズリ。口縁はヨコナデする。	A:0.5mmの白色砂粒を少量、3mmの礫を微量含む。B:良好。C:外橙5YR6/6～明赤褐5YR5/6、内橙5YR6/6。	
86	土師器	甕	SX18-2	②16.5+α	体部外面をタテハケ。内面を縦方向のヘラケズリ。口縁内面はヨコハケ。口縁はヨコナデ。	A:1mmの白色砂粒、4mmの礫を少量含む。B:良好。C:内外共橙5YR6/8。	
87	土製品	模造鏡？	SX18-2	長さ2.35幅1.95 高さ1.5孔径0.35	ナデ整形。上面をつまみ、そこに穿孔している。	A:粗砂を少量含む。B:良好。C:内外共橙7.5YR7/6。	微細な砂粒。
88	土製品	模造鏡？	SX18-1	長さ2.7幅2.2 高さ1.5	ナデ整形。上面をつまみ、そこに穿孔している。	A:微細な白色砂粒を少量含む。B:良好。C:内外共橙7.5YR7/6。	
89	須恵器	杯蓋	SX19	①(12.7)②3.3	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面1/2を回転ヘラケズリ。	A:2mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰N4/～灰N5/、内灰N4/。	天井部外面ヘラ記号。
90	須恵器	杯蓋	SX20検出面	①12.5②3.2	回転ナデ整形後、外面2/3を回転ヘラケズリ。	A:1mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外暗赤褐10R3/2～にぶい赤褐2.5YR4/4、内暗赤褐10R3/2。	赤焼。天井部外面ヘラ記号。口縁部外面降灰。
91	須恵器	杯身	SX20検出面	①(11.2) ②4.1+α 受部径(14.0)	回転ナデ整形。外面1/2を回転ヘラケズリ。	A:0.5～1mmの白色砂粒を多量、黒色粒を少量含む。B:良好。C:外黒N2/～暗灰N3/、内暗青灰5PB3/1。	外面降灰。
92	須恵器	椀	SX20検出面	①(15.4) ②9.0+α	回転ナデ整形後、底部内面をナデ。外面1/3を回転ヘラケズリ。体部中位に4条沈線。	A:1～1.5mmの白色砂粒を多量含む。B:良好。C:外灰N6/、内灰N4/。	

表5 梅頭遺跡第3次調査出土遺物観察表⑤

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径④高台径 ⑤最大径 ()は復元	形態・技法の特徴	A：胎土 B：焼成 C：色調	備考
93	土師器	甕	SX20検出面	②3.6+α	口縁をヨコナデ。体部内面を縦方向ヘラケズリ。	A:1mmの白色砂粒を多量、4mmの礫を少量含む。B:良好。C:外灰褐7.5YR4/2～黒褐7.5YR3/1、内灰褐7.5YR4/2。	
94	須恵器	杯蓋	SX23-3	①(13.0)②3.9	摩滅の為、調整不明。	A:0.5～1mmの白色砂粒、黒色粒を微量含む。B:不良。C:内外共灰黄2.5Y7/2。	
95	須恵器	杯蓋	SX24-2	①(12.0) ②3.0+α	回転ナデ整形。外面1/2を回転ヘラケズリしていると思われる。	A:0.5mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:内外共灰N4/～暗灰N3/。	
96	土師器	甕	SX24焼土内	①(23.8) ②11.1+α	体部外面をタテハケ。内面を縦方向のヘラケズリ。口縁内面はヨコハケ。口縁はヨコナデする。	A:1mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外にぶい黄橙10YR6/3～黒褐10YR3/1、内にぶい黄橙10YR6/3。	外面黒斑あり。
97	須恵器	杯蓋	SX26 ⑦	①(12.3)②4.55	摩滅の為、調整不明。	A:1mmの白色砂粒と赤褐色粒を少量含む。B:不良。C:内外共橙5YR6/6。	
98	須恵器	杯蓋	SX26-3	①13.5②4.3	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面1/3を回転ヘラケズリ。	A:1～2mmの砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰N6/～暗灰N3/、内灰N6/。	天井部外面ヘラ記号。
99	須恵器	杯身	SX26 ③	①(10.4)②3.7 受部径12.45	回転ナデ整形後、底部内面をナデ。外面1/2を回転ヘラケズリ(摩滅)。	A:1～1.5mmの白色砂粒を多量含む。B:良好。C:外暗灰N3/～暗オリーブ灰2.5GY4/1、内灰N4/。	外面降灰。
100	須恵器	杯身	SX26-3	①12.15②4.55 受部径13.9	回転ナデ整形。外面2/3を回転ヘラケズリ。	A:0.5～1mmの白色砂粒を少量含む。B:不良。C:内外共灰白7.5Y8/1。	体部外面ヘラ記号。
101	須恵器	高杯蓋	SX26-1	①(11.5)②4.65 つまみ径3.0	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面1/2を回転ヘラケズリ。つまみ貼付。	A:1mmの白色砂粒を多量含む。B:良好。C:内外共灰N5/～灰N4/。	天井部外面ヘラ記号。
102	須恵器	高杯蓋	SX26-1	①(13.0) ②3.6+α	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面1/2を回転ヘラケズリ。	A:0.5～1mmの砂粒を少量含む。B:良好。C:外暗灰N3/、内灰N4/。	つまみ欠損。
103	須恵器	高杯	SX26-3	②9.6+α	回転ナデ整形。脚部内外面にシボリ痕あり。外面はカキメ後、中位に2条沈線。	A:0.5～1mmの白色砂粒を多量含む。B:良好。C:内外共灰7.5Y4/1。	
104	須恵器	高杯	SX26 ④	②4.3+α 裾部径(14.0)	回転ナデ整形。	A:微細な白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外暗灰N3/～灰白N7/、内灰黄2.5Y7/2。	脚部内面ヘラ記号。脚部内面～裾部外面降灰。
105	須恵器	椀	SX26-3	①(11.0)②9.2	回転ナデ整形後、底部内面をナデ。外面1/2を回転ヘラケズリ。	A:1mmの白色砂粒を多量、3mmの礫を少量含む。B:不良。C:内外共灰黄2.5Y7/2～暗灰N3/～にぶい橙7.5YR7/4。	口縁部大きい歪みあり。
106	須恵器	短頸壺蓋	SX26-3	①(10.2)②3.25	回転ナデ整形。外面はヘラ切り後、中ほど1/3を回転ヘラケズリ。	A:1mmの砂粒を少量含む。B:不良。C:内外共灰白7.5Y8/1。	天井部外面ヘラ記号。
107	須恵器	甕	SX26 ⑫20030228 SX26 ⑬20030228 SX26 ⑮20030228 SX26-2 20030217 5区 表土ハギ表探 20030114 ラベルなし	①(18.6) ②29.4+α	体部外面は擬格子のタタキ、内面は同心円文当て具。口縁は回転ナデ。	A:1mmの砂粒を少量含む。B:良好。C:外黒N2/～黄灰2.5Y6/1、内黒N2/～灰5Y6/1。	体部上位外面～口縁面、体部下位内面降灰。
108	須恵器	甕	SX26 ⑨ SX26 ⑩ SX26 ⑪ SX26 ⑭ SX26 ⑮ SX26 ⑯ SX26-2	①(24.8) ②16.0+α	体部外面は擬格子のタタキ、内面は同心円文当て具。口縁は回転ナデ。	A:0.5～1mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰赤10R4/2～暗灰N3/、内灰赤10R4/2～赤褐10R4/4。	頸部外面ヘラ記号。
109	土師器	甕	SX26-2	①(28.5) ②22.1+α	外面はナデ。体部内面は縦方向のヘラケズリ。口縁はヨコナデ。把手は指頭痕を残すナデ整形。	A:0.5～1.5mmの白色砂粒、赤褐色粒を少量含む。B:良好。C:外にぶい橙7.5YR7/4～灰褐7.5YR5/2、内にぶい橙7.5YR7/4。	外面黒斑あり。
110	土師器	甕	SX26-3	②10.2+α ③(16.3)	外面下位を縦に面取り(摩滅)。下端部をケズリ。内面は斜方向のナデ。	A:1～5mmの砂粒を多量、雲母を少量含む。B:良好。C:外にぶい黄橙10YR7/4、内にぶい黄橙10YR7/4～にぶい黄橙10YR4/3。	
111	須恵器	杯蓋	SX28-2、2～3区間ベルト	①(12.55)②4.0	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面1/3を回転ヘラケズリ。	A:微細な白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外にぶい赤褐2.5Y5/4～暗赤褐2.5YR3/1、内にぶい橙2.5YR6/4。	
112	須恵器	杯身	SX28-2	①(10.7)②4.4 受部径(12.85)	回転ナデ整形後、底部内面をナデ。外面1/2を回転ヘラケズリ。	A:0.5～1mmの砂粒を少量含む。B:やや不良。C:内外共灰オリーブ7.5Y5/2。	底部外面ヘラ記号。
113	須恵器	椀	SX28-3	①(14.0)②5.7	回転ナデ整形後、底部内面をナデ。外面1/2を回転ヘラケズリ。	A:0.5～1mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:内外共灰N4/～灰N7/。	
114	須恵器	短頸壺蓋	SX28-1・2区間ベルト	①(13.0) ②4.8+α	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面1/2を回転ヘラケズリ。	A:1mmの白色砂粒、3mmの礫を少量含む。B:良好。C:外灰N5/、内灰N6/。	天井部外面ヘラ記号。
115	土師器	甕	SX28-3	①(13.0) ②4.7+α	体部外面はナデ、内面は斜方向のヘラケズリ。口縁はヨコナデ。	A:1mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外明黄橙10YR7/6～橙5YR7/6、内にぶい黄橙10YR7/4。	
116	土師器	甕	SX28-3	①(13.3)②13.5	外面タテハケか(摩滅)。内面は斜方向のヘラケズリ。口縁はヨコナデ。	A:1～2mmの砂粒を含む。B:良好。C:内外共明赤褐5YR5/6。	

表6 梅頭遺跡第3次調査出土遺物観察表⑥

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径④高台径 ⑤最大径 ()は復元	形態・技法の特徴	A：胎土 B：焼成 C：色調	備考
117	土師器	甕	SX28-1	①14.5 ②10.0+12.5+ α	外面タテハケか(摩滅)。内面は縦方向、斜方向のヘラケズリ。	A:1～2mmの白色砂粒を含む。B:良好。C:外内外共にぶい橙7.5YR7/4。	上位と下位、接合不可。
118	須恵器	杯蓋	SX29-4	①(13.4) ②3.65+ α	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面1/2を回転ヘラケズリ。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰白N7/～暗灰N3/、内灰N5/。	
119	須恵器	杯蓋	SX29-3	①14.05②4.6	回転ナデ整形。天井部はヘラ切り後ナデ。内面は摩滅。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:不良。C:外灰黄2.5Y7/2～明黄褐10YR6/6、内灰白2.5Y8/2～浅黄2.5Y7/3。	
120	須恵器	杯蓋	SX29-2	①13.0②3.95	回転ナデ整形。外面1/2を回転ヘラケズリ。内面は摩滅。	A:1mm以下の砂粒を微量含む。B:不良。C:外浅黄2.5Y7/3、内灰黄2.5Y7/2。	体部外面ヘラ記号。
121	須恵器	杯身	SX29-1	①11.1②3.7 受部径13.55	回転ナデ整形後、底部内面をナデ。外面1/2を回転ヘラケズリ。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。C:外暗赤褐7.5R3/2～灰N4/、内暗赤褐7.5R3/2。	
122	須恵器	杯蓋	SX30 出土状況4-2 SX30-3 下	①10.9②3.5	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面1/2を回転ヘラケズリ。	A:1mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰N5/～暗灰N3/、内灰N5/。	天井部外面ヘラ記号。
123	須恵器	杯蓋	SX30-5	①(12.0)②3.8	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面1/3を回転ヘラケズリ。	A:1mm以下の砂粒を微量含む。B:良好。C:内外共灰N4/。	天井部外面ヘラ記号。
124	須恵器	杯蓋	SX30-2	①11.9②4.0	回転ナデ整形。天井部内外面共摩滅。	A:2mm以下の砂粒を微量含む。B:不良。C:内外共灰白2.5Y8/2～にぶい黄橙10YR7/4。	天井部外面ヘラ記号。
125	須恵器	杯蓋	SX30-5	①11.95②3.7	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面1/3を回転ヘラケズリ。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰N6/～暗灰N3/、内灰N6/。	天井部外面ヘラ記号。口縁付近歪みあり。
126	須恵器	杯身	SX30-2	①(9.2)②2.9 受部径(11.2)	回転ナデ整形後、底部内面をナデ。底部外面は降灰の為、調整不明。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:不良。C:外灰N6/～灰白2.5Y8/2、内灰5Y6/1。	
127	須恵器	杯身	SX30-1	①9.8②3.65 受部径12.2	回転ナデ整形後、底部内面をナデ。外面1/2を回転でヘラケズリ。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰白N7/～灰N4/、内灰白N7/。	底部外面ヘラ記号。
128	須恵器	杯身	SX30-2	①(11.0)②4.0 受部径(13.0)	回転ナデ整形。底部外面はヘラ切り後ナデ。内面は摩滅。	A:2mm以下の砂粒、雲母を少量含む。B:不良。C:外灰白5Y7/1、内灰白2.5Y8/2～浅黄2.5Y7/3。	底部外面ヘラ記号。
129	須恵器	杯身	SX30-4 下	①11.75②4.05 受部径13.6	回転ナデ整形後、底部内外面をナデ。	A:2mm以下の砂粒を微量含む。B:良好。C:内外共灰N4/。	外面ヘラ記号。全体に歪みあり。外面降灰。
130	須恵器	高杯	SX30 出土状況3-4	①(13.4) ②4.1+ α	回転ナデ整形後、底部内面をナデ。外面2/5を回転ヘラケズリしていると思われる(欠損)。	A:1mmの白色砂粒、4mmの礫を少量含む。B:良好。C:内外共暗灰N3/。	底部外面ラ記号。
131	須恵器	高杯	SX30 出土状況2-1	①9.5②8.65+ α	回転ナデ整形後、杯底部をナデ。脚部外面にシボリ痕あり。杯部中位に2条沈線。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。C:内外共灰10Y5/1。	脚部内面ヘラ記号。
132	須恵器	有蓋高杯	SX30 出土状況2-2	①9.9②8.5+ α 受部径12.1	回転ナデ整形後、杯底部をナデ。脚部外面にシボリ痕あり。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:不良。C:外灰白2.5Y7/1、内灰白2.5Y8/2。	脚部歪みあり。
133	須恵器	有蓋高杯	SX30 出土状況2-1	①11.85 ②8.25+ α 受部径13.6	回転ナデ整形後、杯底部をナデ。脚部外面にシボリ痕あり。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。C:内外共灰N4/。	外面降灰。全体に大きい歪みあり。
134	須恵器	壺	SX30-3 上	①8.0②6.85	回転ナデ整形後、底部内面をナデ。外面1/3を回転ヘラケズリ。	A:1mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。C:外オリーブ黒5Y3/1～灰N6/、内オリーブ黒5Y3/1。	全体に歪みあり。内外面降灰。
135	須恵器	甕	SX30 出土状況4-1 SX30 焼土層2 周辺 清掃中 SX30-2	②18.1+ α	回転ナデ整形。体部外面平行タタキ後、上半をカキメ。内面下2/3に同心円文当て具を残す。	A:1～2mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外暗灰N3/～灰N5/、内暗灰N3/。	体部外面下位ヘラ記号。
136	須恵器	甕	SX30 出土状況3-3 SX30 4下	①(33.8) ②12.3+ α	体部外面は擬格子タタキ、内面は同心円の当て具。口縁は回転ナデ整形。頸部外面に斜線文、2条沈線の順に施文。	A:1mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:内外共暗灰N3/～灰5Y6/1。	口縁～頸部に降灰。
137	土師器	甕	SX30 出土状況3-2	①(13.8) ②8.1+ α	口縁は摩滅。体部外面タテハケ、内面は縦方向のヘラケズリ。	A:1mm以下の白色砂粒、赤褐色粒を少量含む。B:良好。C:外明赤褐5YR5/6、内明赤褐5YR5/6～明赤褐5YR3/2。	
138	土師器	甕	SX30-2 下ベルト	①(19.8) ②3.65+ α	体部内面を横方向ヘラケズリ。あとは摩滅。	A:2mm以下の砂粒、雲母、赤褐色粒を少量含む。B:良好。C:内外共橙5YR6/8～橙7.5YR7/6。	
139	土師器	把手付甕	SX30 出土状況3-1	①(22.6)②20.5	口縁はヨコナデ、体部外面タテハケ、内面は縦方向のヘラケズリ。把手貼付のナデあり。	A:2mm以下の砂粒を多量、3～5mmの礫を少量含む。B:良好。C:外橙7.5YR6/6、内にぶい黄橙10YR7/4。	内面、外面底部黒斑あり。
140	土師器	甕	SX30-2	①(28.6) ②14.1+ α	口縁はヨコナデ、体部外面タテハケ、内面は縦方向のヘラケズリ。把手は指頭痕を残すナデ整形。	A:1mm以下の砂粒、赤褐色粒を少量含む。B:良好。C:外明赤褐5YR5/8～明黄褐10YR7/6、内黄橙7.5YR8/8。	

表7 梅頭遺跡第3次調査出土遺物観察表⑦

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径④台径 ⑤最大径 ()は復元	形態・技法の特徴	A：胎土 B：焼成 C：色調	備考
141	土師器	脚付壺	SX30-1 下	①(10.6) ②10.4+ α	体部外面を横方向に手持ちヘ ラミガキ。口縁内面にヨコハ ケ。あとは摩滅。	A:2mm以下の砂粒、赤褐色粒を少量 含む。B:良好。C:内外共橙5YR6/6。	底部～体部外面 黒斑あり。
142	滑石 製品	紡錘車	SX30 出土状況4-2	縦3.3+ α 横2.05+ α 厚0.5+ α 穿孔径(0.8)	全体を削る。上面に×文様あ り。		
143	須恵器	杯蓋	SX32 ④	①12.9②3.85	回転ナデ整形。外面1/2を回転 ヘラケズリ。	A:0.5mmの白色砂粒を微量含む。 B:良好。C:外灰N6/～暗灰N3/、内灰 N6/。	天井部外面ヘラ 記号。口縁部 外面降灰。
144	須恵器	杯身	SX32 ⑩	①10.6②3.75 受部径12.7	回転ナデ整形後、底部内面を ナデ。外面1/2を回転ヘラケズ リ。	A:1mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。 C:内外共暗灰N3/。	底部外面ヘラ 記号。
145	須恵器	杯身	SX32-2 下層	①11.15②4.0 受部径13.15	回転ナデ整形後、底部内面ナ デ。外面1/2を回転ヘラケズ リ。	A:2mm以下の砂粒、3～5mmの礫を少量 含む。B:良好。C:外灰N6/～オリーブ黒 5Y3/1、内灰N6/。	底部外面ヘラ 記号。 外面降灰。
146	須恵器	有蓋 高杯	SX32 ②	①10.1②7.8 裾部径9.0 受部径11.9	回転ナデ整形。杯部下位カキ メ。	A:微細な砂粒を少量、黒色粒を微量 含む。B:良好。C:内外共灰N5/～灰 N4/。	脚部内面 ヘラ記号。
147	須恵器	ナリ鉢	SX32 ①	①10.0②6.5 ③5.5	回転ナデ整形後、底部内外面 をナデ。	A:1mmの白色砂粒を多量含む。B:良好。 C:外灰N5/～灰白N7/～暗灰N3/、内灰 N6/～灰N5/。	
148	須恵器	壺	SX32 ③	①13.3②15.25	体部外面は平行タキ後カキ メ、内面回転ナデ後下半をナ デ。口縁は回転ナデ。	A:1mm以下の白色砂粒をやや多量含む。 B:良好。C:内外共灰N4/。	頸部外面5ヶ所 ヘラ記号。
149	土師器	甕	SX32 SX32-1 SX32 ⑤-1 SX32 ⑤-2	①18.85②32.2	体部外面タテハケ、内面は縦 方向ヘラケズリ。口縁はヨコ ナデ。底部内面に指頭痕あ り。	A:2mm以下の砂粒を少量、3～7mmの礫を 含む。B:良好。C:外橙5YR6/8～にぶ い黄橙10YR6/4、内赤褐5YR4/6～橙 5YR6/8。	外面黒斑あり。
150	土師器	甕	SX32 ⑦ 20030227 SX32 ⑤ 20030215 SX32 ⑧ 20030227 SX32 ⑤-1 20030215 SX32 ⑩ 20030227 SX32 ⑥ 20032025 SX32 ⑫ 20030227 SX32 ⑨ 20030227 SX32 20030221	①28.3 ②15.0+ α	体部外面タテハケ、内面は縦 方向ヘラケズリ。口縁はヨコ ナデ。	A:2mm以下の砂粒、3～5mmの礫を多量 含む。B:良好。C:外赤褐10R4/4～にぶ い黄橙10YR7/4、内橙7.5YR7/6。	体部外面 黒斑あり。
151	土師器	甕	SX32 ⑥ SX32-1	①27.0②35.6 ③12.2	口縁、底部はヨコナデ、体部 外面タテハケ、内面は斜方向 のヘラケズリ、上位は横方 向。把手は指頭痕を残すナデ 整形。	A:0.5～5mmの白色砂粒を多量含む。 B:やや良好。C:外橙7.5YR6/6～橙 2.5YR6/8、内橙2.5YR6/8。	外面黒斑あり。
152	須恵器	杯蓋	SX33	①(12.0)②4.2	回転ナデ整形後、天井部内面 をナデ。外面1/2を回ヘラ削 り。	A:0.5mmの砂粒を少量含む。B:良好。 C:外灰N5/～暗赤灰5R3/1、内灰N4/。	
153	土師器	甕	SX33	②3.95+ α	摩滅の為、調整不明。	A:1mmの砂粒を多量含む。B:良好。 C:外明赤褐5YR5/8、内明赤褐5YR5/8。	端部剥離。傾き 不確実。 外面黒斑あり。
154	弥生 土器	甕	ラベル無 SJ01	①45.0 ②21.0+25.0+ α ③10.3	口縁下に突帯1条を貼付。底部 外面でタテハケが確認出来る が全体的に摩滅。底部内面に 指頭痕あり。	A:0.5～3mmの白色砂粒を多量含む。 B:やや不良。C:外橙8.7.5YR6/6～明赤 褐5YR5/6～にぶい黄橙10YR7/4、内明黄 褐10YR7/6～橙7.5YR6/8。	
155	弥生 土器	甕	SJ01下カメ SJ01下カメ B ② SJ01棺外 SJ01下カメ C SJ01下カメ E SJ01下カメ G SJ01下カメ A SJ01下カメ B ① SJ01下カメ D SJ01下カメ F	①33.6②57.4 ③10.1	体部中位に突帯1条を貼付。全 体的に摩滅しており調整不 明。底部内面に指頭痕あり。	A:0.5～3mmの白色砂粒を多量含む。 B:やや不良。C:外灰白2.5Y8/2～淡黄 2.5Y8/3～褐灰10YR5/1～黒褐2.5Y3/1、 内浅黄2.5Y8/4～浅黄橙10YR8/3～にぶ い黄橙10YR7/2。	外面黒斑あり。
156	須恵器	杯蓋	SD01-5	②3.5+ α	回転ナデ整形。外面4/5を回転 ヘラケズリ。	A:微細な白色砂粒を少量含む。 B:良好。C:外灰N4/～暗灰N3/、内灰 N4/。	
157	瓦器?	椀	SD01-5	②1.7+ α ④(5.8)	摩滅の為、調整不明。	A:1mm以下の白色砂粒を少量含む。 B:良好。C:外浅黄2.5Y7/4～灰黄 2.5Y4/1、内灰黄2.5Y7/2～黒褐 2.5Y3/1。	
158	鉄製品	鉄釘	SD01-9	長さ5.7+2.5+ α 幅1.2厚0.6			
159	土師器	杯	SD04-1	②0.55+ α ③8.0	回転ナデ整形。底部外面はヘ ラ切り後ナデ。摩滅著しい。	A:0.5mmの白色砂粒、雲母を少量含む。 B:良好。C:外浅黄2.5Y7/4～橙 7.5YR6/6、内明黄褐10YR7/6。	
160	須恵器	杯蓋	SP02	①11.7②3.4	回転ナデ整形後、内面ナデ。 外面1/2を回転ヘラケズリ。	A:2mm以下の白色砂粒を少量含む。 B:良好。C:外黄灰2.5Y5/1～灰黄 2.5Y7/2、内黄灰2.5Y6/1。	天井部外面ヘラ 記号。 全面降灰。
161	須恵器	杯蓋	1区 表土ハギ後清掃中	①12.1②3.9	回転ナデ整形後、内面中心部 のみ不定方向ナデ。外面1/2を 回転ヘラケズリ。	A:2mm以下の砂粒、3mmの礫を少量 含む。B:良好。C:外暗赤灰10R4/1～暗 赤褐10R3/3～赤黒10R2/1、内暗赤灰 10R4/1。	天井部外面ヘラ 記号。口縁外面 降灰。

表8 梅頭遺跡第3次調査出土遺物観察表⑧

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g) ①口径②器高 ③底径④高台径 ⑤最大径 ()は復元	形態・技法の特徴	A：胎土 B：焼成 C：色調	備考
162	須恵器	杯蓋	試掘 北68次 表土ハギ中	①12.9②3.6	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面1/2を回転ヘラケズリ。	A:1mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。C:外暗灰N3/、内灰N5/。	天井部外面ヘラ記号。体部～口縁外面降灰、天井部方向へ垂れる。
163	須恵器	杯蓋	3区 表土ハギ表採	①12.7②4.1	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面1/2を回転ヘラケズリ。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。C:外暗灰N3/～暗赤褐10R3/2、内暗灰N3/～暗赤灰10R3/1。	天井部外面ヘラ記号。
164	須恵器	杯蓋	3区 表土ハギ表採	①12.8②4.05	回転ナデ整形後、天井部内面をナデ。外面3/5を回転ヘラケズリ。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。C:外暗青灰10BG4/1～灰10Y6/1、内暗青灰10BG4/1。	天井部外面ヘラ記号。
165	須恵器	杯蓋	5・6区間谷部 表土ハギ表採	①9.3②4.25 受部径11.8 つまみ径1.5	回転ナデ整形後、天井部内面を不定方向ナデ。外面2/3を回転ヘラケズリ。つまみ貼付。	A:0.5～1.5mmの白色砂粒を微量含む。B:不良。C:外灰褐5YR4/2、内にぶい黄橙10YR7/3。	
166	須恵器	杯身	5区 表土ハギ表採	①10.35②3.75 受部径12.2	回転ナデ整形後、底部内面を一定方向ナデ。外面1/2を回転ヘラケズリ。	A:1～2mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰N4/～灰白N7/、内灰N4/。	底部外面ヘラ記号。
167	須恵器	鉢	1区 表土ハギ後清掃中	①7.6②3.6③5.4	回転ナデ整形。底部外面はヘラ切り後ナデ。頭部～口縁にかけシボリ痕あり。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰N6/、内灰N6/。	
168	須恵器	甌	5・6区間谷部 清掃中	②7.5+α	回転ナデ整形。外面1/2を回転ヘラケズリ、上位にカキメ、中央やや上に沈線を一条施す。穿孔は中央やや上にある。	A:0.5mmの白色砂粒を少量含む。B:良好。C:内外共黒褐2.5Y3/1～暗赤灰10R3/1。	底部外面ヘラ記号。
169	須恵器	甌	試掘 北68次 表土ハギ中	②11.7+α	回転ナデ整形。体部外面2/3を回転ヘラケズリ。頭部外面にカキメ?あり。体部中位に穿孔。	A:1mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。C:内外共暗灰N3/。	底部外面ヘラ記号。外面降灰。体部内に穿孔時の粘土片が残る。
170	須恵器	蓋	5区 表土ハギ表採	①(7.0)②3.15 受部径(8.3) つまみ径3.0	摩滅の為、調整不明。	A:1mmの白色砂粒を少量含む。B:不良。C:内外共にぶい黄橙10YR7/3。	
171	須恵器	提瓶	試掘 北68次 表土ハギ中	①5.9～6.8 ②15.3+α	回転ナデ整形。体部にカキメ、沈線を施す。体部は円盤閉塞。	A:2mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。C:外暗灰N3/、内灰N4/。	胴部表裏、同一文ヘラ記号。外面降灰。体部内に穿孔時の粘土片が残る。
172	須恵器	平瓶	5区表土ハギ表採 ラベルなし	①5.6②16.0 ③12.75	回転ナデ整形。外面体部下から底部にカキメ。内面口縁接合部付近に貫通しない穿孔あり。体部上面にボタン状の装飾あり。	A:1mm以下の砂粒を少量含む。B:良好。C:外灰N6/～暗灰N3/、内暗灰N3/。	外面降灰。
173	須恵器	大甕	試掘 北68次 表土ハギ中	①(34.4) ②13.65+α	回転ナデ整形。外面カキメ、沈線、斜線文の順に施文。	A:微細な砂粒を少量含む。B:良好。C:外暗灰N3/、内灰N5/～暗灰N3/。	頭部外面3ヶ所ヘラ記号。口縁部降灰、大きい歪みあり。
174	土師器?	甕?	5区 表土ハギ表採	①(14.2) ②10.4+α	体部外面は擬格子のタタキ、内面は同心円文当て具。体部上位～口縁はヨコナデか?	A:1mm～2mmの白色砂粒、赤褐色粒を少量含む。B:良好。C:内外共橙2.5YR6/6。	
175	土師器	甕(突帯)	試掘 北68次 表土ハギ中	②5.7+α	ヨコナデで突帯貼付。内面縦方向のヘラケズリ。	A:2mm以下の砂粒を多量、赤褐色粒、3mmの礫を少量含む。B:良好。C:外橙5YR6/8、内浅黄橙7.5YR8/6。	傾き不確実。
176	土師器	甌	5区 表土ハギ表採	①(22.6) ②11.2+α	口縁はヨコナデ、体部外面タテハケ、内面は斜方向のヘラケズリ。把手は指頭痕を残すナデ整形。	A:0.5～1.5mmの白色砂粒、3mmの礫をやや多量含む。B:良好。C:内外共橙7.5YR6/6。	
177	土師器	甌	試掘 北68次 表土ハギ中	②7.4+α	指頭痕あり。ナデ整形。	A:2mm以下の砂粒を多量、赤褐色粒を少量含む。B:良好。C:外橙7.5YR6/6～浅黄橙10YR8/4、内浅黄橙7.5YR8/6。	把手。
178	滑石製品	紡錘車	5・6区間谷部 表採	縦4.1横4.15 厚1.5重41.8	裏面に放射状の沈線が入る。		
179	土製品	円盤状土製品	1区 水道埋土中	縦2.85横3.2 厚0.4	ナデ整形。	A:1mm以下の砂粒、雲母を少量含む。B:良好。C:外橙2.5YR6/8、内浅黄橙10YR7/3。	

Ⅲ．自然科学分析の結果

大野城市、梅頭遺跡第3次調査におけるリン・カルシウム含量分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

土壌に含まれるリンやカルシウムの起源としては、土壌の母材、動物遺体、植物遺体などがある。また、遺跡の生活面や遺構内には遺体、排泄物、代謝物、食物残渣、燃料灰などに由来するリンやカルシウムが蓄積している。カルシウムは一般に水に溶解しやすいが、リンは土壌中の鉄やアルミニウムと強く結合して難溶性の化合物となるため、土壌中における保存性が高い。このようなリンやカルシウムの性質を利用して、墓状遺構などにおける生物遺体（人骨など）の確認、および生活面や遺構面の確認などが試みられている。

梅頭遺跡第3次調査では、2号窯跡焚口部において柱穴に囲まれた炭化物層が認められ、遺体等が焼かれた可能性が指摘されていた。ここでは、同遺構内とその周囲の土壌について分析を行い、人骨などの生物遺体の存在について検討を試みた。

2. 試料

分析試料は、柱穴に囲まれた炭化物層の遺構内から採取された試料6、7、8、9、10、11、12、13、14、15、16、および遺構外から比較試料として採取された試料1、2、3、4、5、17、18、19、20、21、22の計22点である。

3. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム（日本電子㈱製，J S X 3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。試料の処理法は次のとおりである。

- 1) 試料を絶乾（105℃・24時間）
- 2) メノウ製乳鉢を用いて試料を粉砕
- 3) 試料を塩化ビニール製リング枠に入れ、圧力15t/cm²でプレスして錠剤試料を作成
- 4) 測定時間300秒、照射径20mm、電圧30keV、試料室内真空の条件で測定

4. 分析結果

リン酸（P₂O₅）とカルシウム（CaO）の含量（wt%）を表9・10に示す。

5. 考察

一般に、未耕地の土壌中におけるリン酸含量は0.1～0.5%程度、耕地土壌でリン酸肥料が投入された場合は1.0%程度である。農耕地では施肥による影響が大きく、目的とする試料の分析結果のみから遺構・遺物内における生物遺体の存在を確認するのは困難である。このため、比較試料（遺物・遺構外の試料）との対比を行う必要がある。

分析の結果、遺構内の各試料におけるリン酸含量は0.47～0.84%であり、このうち遺構中央部（試料9、12、15）では0.75～0.84%（平均0.79%）と比較的高い値である。遺構外の比較試料では0.26～0.61%（平均0.46%）であり、これよりも遺構中央部の方が約1.7倍と明らかに高い

値である。一方、カルシウム含量については、遺構内の試料では1.95～3.40%（平均2.80%）、遺構外の試料では1.95～3.36%（平均2.78%）であり、とくに明瞭な差異は認められなかった。

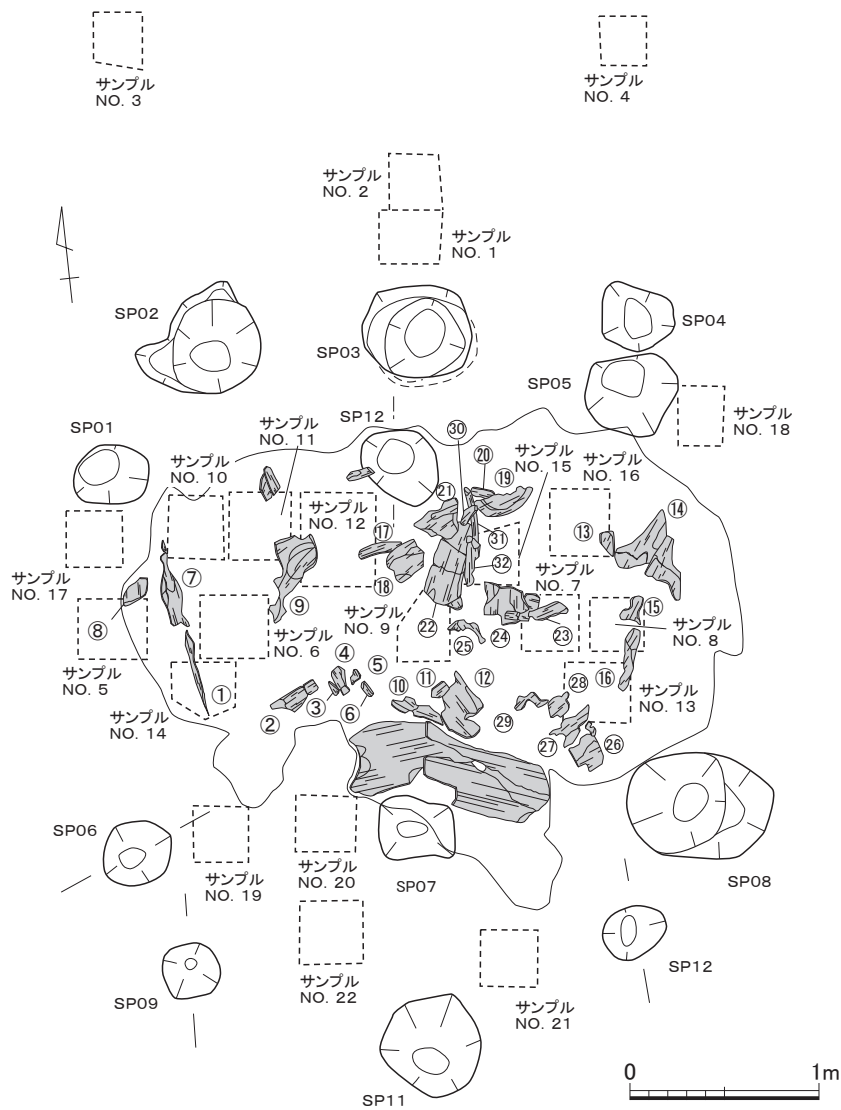
以上の結果から、遺構内の中央部付近には、リン酸を多く含む何らかの生物遺体が存在していた可能性が考えられる。なお、カルシウムについては一般に溶解性が大きいことから（竹迫、1993）、土壌中で拡散・移動した可能性が考えられる。

6. まとめ

柱穴に囲まれた炭化物層の遺構内の中央部付近では、リン酸が比較的多く検出され、リン酸を多く含む何らかの生物遺体が存在していた可能性が認められた。

文献

竹迫 紘（1993）リン分析法．日本第四紀学会編．四紀試料分析法2，研究対象別分析法．東京大学出版会，
p. 38- 45.



第49図 2号窯跡焚口・燃烧部サンプル採取位置（1／40）

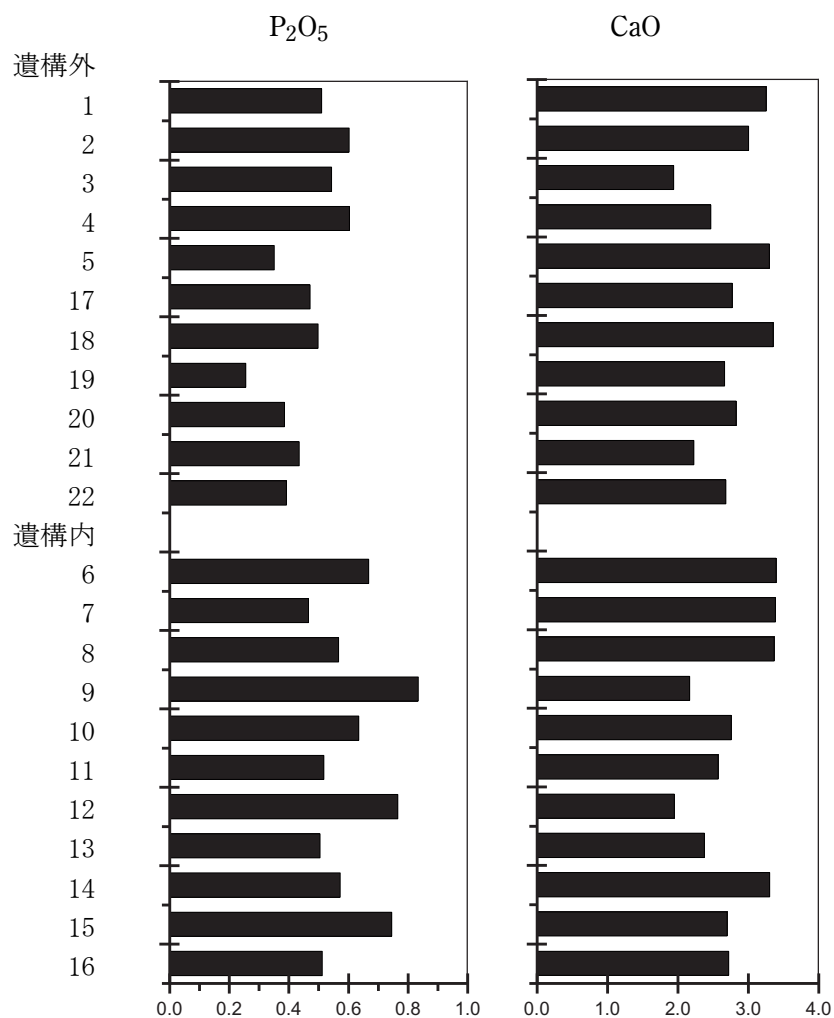


表9 大野城市、梅頭遺跡第3次調査における蛍光X線分析結果

単位 wt(%)		2号窯跡焚口部																					
原子No.	化学式	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
15	P2O5	0.51	0.60	0.54	0.61	0.35	0.67	0.47	0.57	0.84	0.64	0.52	0.77	0.51	0.57	0.75	0.51	0.47	0.50	0.26	0.39	0.44	0.39
20	CaO	3.26	3.01	1.95	2.47	3.30	3.40	3.39	3.37	2.17	2.77	2.58	1.95	2.38	3.31	2.70	2.73	2.78	3.36	2.67	2.83	2.23	2.69

表10 梅頭遺跡第3次調査における各試料のリン・カルシウム含量

IV. まとめ

1. 遺構の時期

梅頭遺跡 3 次調査では、丘陵斜面に窯跡・竪穴住居跡・土坑・溝など様々な遺構が確認された。以下では、各遺構の時期について、時代ごとに変遷をみてゆきたい。

旧石器～弥生時代

この時期の遺構・遺物は非常に少ない。旧石器～縄文時代の遺構・遺物に関しては全く確認されていない。弥生時代の遺構は、ただ 1 基丘陵緩斜面に甕棺墓が確認される。時期は弥生時代中期後葉にあたる。調査区内では同時期の遺構はまったく見当たらず、集落は谷を 300m ほど下った本堂遺跡 2 次調査地で確認されている（註 1）が、墳墓は確認されていない。甕は中型のものが使われているが、甕棺墓としては特殊な甕の使い方をおこなう。丘陵部に甕棺墓を単独で営む事例は、春日市天神ノ木遺跡 4 次調査などで見られ（註 2）、調査地周辺もこの時期は森林に覆われた状況が想定される。甕棺墓が立地するのは丘陵の奥側であり、まったく眺望はきかず、集落を望むこともできない。こうした立地と甕の使い方から、被葬者は何らかの特殊な状況にあったと思われるが明らかにできない。

古墳～飛鳥時代

調査地内の遺構は、6 世紀末～7 世紀中頃の遺構が大半を占める。1 号窯跡は、窯体の窯壁を酸化層まで削りこみ、焚口部に柱穴を掘り、内部で炭が検出される。この遺構を「カマド塚状遺構」（註 3）としたが、詳細については後述する。1 号窯跡はカマド塚状遺構構築に際し、最終操業にともなう灰層を片付けるため出土遺物が少ないが、灰原の出土遺物から 6 世紀末～7 世紀初頭に操業がおこなわれている。カマド塚状遺構の時期は操業終了直後と考えられる。同時期の遺構としては、S X 01・02・05・06・11・15・19・23・26・28・29・32・33、S P 02 がある。S X 02・11・15・26・28・29・32・33 は方形の掘方をもち、竪穴住居跡と考えられ、S X 19 は方形の土坑である。これに対し、S X 01・05・06・23 は掘り込み・床面ともに不整形であり、性格を判断できない。

7 世紀前半～中頃になると、S X 12・13・18・24・26・30 が確認される。S X 30 は竪穴住居跡の可能性が高いが、他は掘方が不整であり性格はよく分からない。これらの遺構は前代のものに近接して営まれており、特に 4 区とした斜面上では大きく 2 つの群に分かれる。

7 世紀中頃以降はほとんど遺構を確認できない。S X 18 には 7 世紀後半以降の遺物が含まれるが、これは谷の埋土中から出土した可能性が高い。

この時期の遺物としては、圧倒的に須恵器が多い。土師器は S X 15 から多量の甕・甗が出土する。また、梅頭 2 次調査でも出土した初期瓦が S X 12・13 から出土しているが、量は少ない。その他、鉄滓が S X 12、土製品では土製模造鏡・丸玉・円盤状土製品が S X 15・18 などから出土している。石製品は S X 30 から滑石製紡錘車出土している。遺物以外では、粘土が入った土坑（粘土貯留遺構）がある（S X 10・26・34）。

奈良時代

S X16は小片ながら8世紀前半～中頃の遺物を含む。また、1号窯跡は窯体を調査せずに緑地内へ保存しているが、灰原で表採した遺物から8世紀前半～中頃の操業が考えられる。

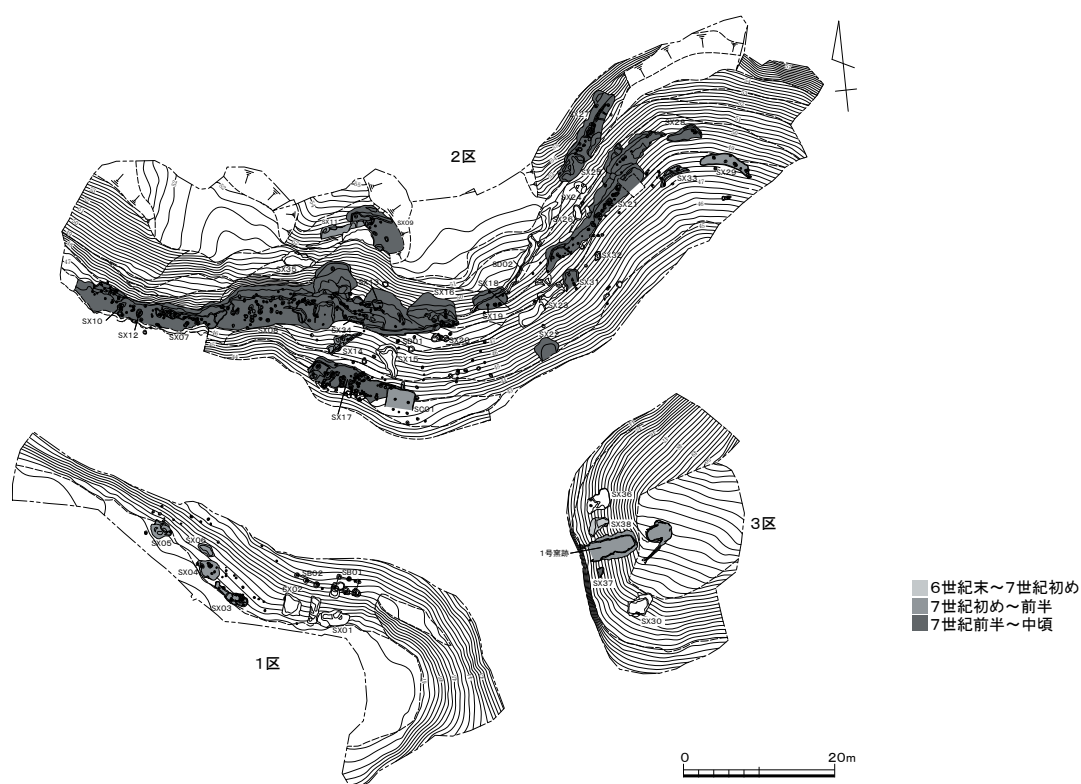
平安時代

時期の確定が難しいが、S D01・04からは12世紀前後に考えられる遺物が出土している。S D01からは鉄釘も出土しているが、時期を特定できない。

2. 斜面上に立地する集落の時期と性格

梅頭遺跡2・3次調査では、斜面上に多くの遺構が確認された。遺構の中にはカマドを伴うものや竪穴住居状のものもあり、3次調査では粘土を貯留した土坑が確認された。こうした特徴をもった遺跡群については、春日地区遺跡群で調査がおこなわれ、須恵器生産に深く関与していたことが指摘されている（註4）。以下では、梅頭2・3次調査で検出された斜面上の遺構について検討し、須恵器生産との関わりについて確認をおこない、集落の特徴についてまとめておく。

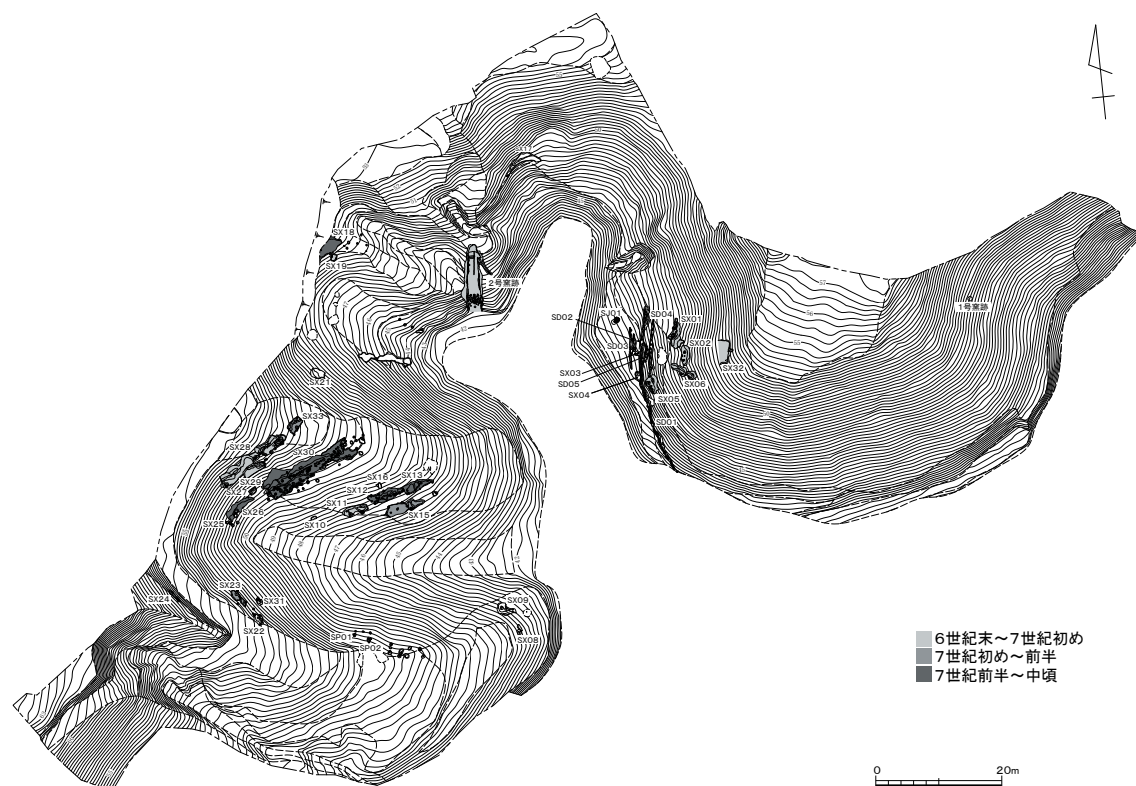
まず2次調査の成果から見ると、6世紀末～7世紀初め頃に本格的な遺構の形成が認められる。S C01はカマドを有するが、粘土貯留土坑やロクロピットは確認されていない。1号窯跡とは小谷を挟んで立地しており、同時期に出現することから関係は極めて深いものとする。同時期の遺構としてはS X03・06・29・38があるが、いずれも不整形な土坑状をしており、居住施設ではない。また、S B01は遺物が少ないが7世紀代に入ると考えられ、建物から焚口の様子がちょうど見える位置に配置されることは興味深い。



第50図 牛頭梅頭遺跡第2次調査地遺構変遷図（1／1,000）

次に7世紀前半～中頃は、調査地内のほとんどの遺構が該当する。この時期になると、遺構は斜面に平行して長くL字状に掘り込まれるもの（S X 07・08・09・17・21）が増えており、S X 07からS X 16までは50mを越える。その他には、半月形に掘り込まれるもの（S X 28）、土坑状に掘り込まれるもの（S X 22・31）があるが、掘方は不整である。これらの内、S X 07・08・21では焼土を検出しており、袖部の確認はできなかったが、カマドが存在したものと考えられる。また、S X 07・21には埋土中に粘土が含まれていたが、検出の上、範囲と量を明らかにすることはできなかった。この時期を最後に、2次調査地では遺構の形成がほとんど終了してしまう。また、1号窯跡は斜面上の遺構が増える7世紀前半にはすでに操業を終わっており、集落の存続期間と窯の操業期間が必ずしも一致しないようである。しかし、S X 21をはじめ斜面上の遺構からは焼け歪んだ須恵器が大量に出土することは近隣に同時期の窯が操業していたことを示している。それらは床面から浮いていることがほとんどで、特にS X 21の出土状況は上方から投棄の可能性を考える必要があり、あるいは選別場のような性格をもつものかもしれない。

3次調査の成果について、まず確認できる遺構は1号窯跡である。灰原の出土遺物から6世紀末～7世紀初頭に操業がおこなわれている。窯跡と同時期の遺構としては、S X 01・02・05・06・11・15・19・23・26・28・29・32・33、S P 02という多くの遺構が確認される。このうち、S X 02・11・15・26・28・29・32・33は方形の掘方をもち竪穴住居跡と考えることができる。一方、S X 01・05・06・23のように掘り込み・床面ともに不整形なものがある。このように、この時期には竪穴住居状の遺構と不整形土坑が並存する。



第51図 牛頸梅頭遺跡第3次調査地遺構変遷図（1／1,200）

窯跡の操業が終了した後の7世紀前半～中頃の遺構としては、SX12・13・18・24・26・30が確認される。遺構は斜面に長くL字状に掘り込まれており、2次調査と合わせてこの時期の特徴とできる。これらの遺構は、前代のものに近接して営まれることが特徴として挙げられ、大きく2つの群に分かれる。このことは、異なる集団の存在を示すようでもあり興味深い。この時期を最後に3次調査地でも遺構の形成が認められなくなる。検出された遺構の中には粘土を貯留した土坑も確認されており、窯の操業期間とも平行している。

以上、梅頭2・3次調査の斜面上で検出された遺構群は堅穴住居跡・掘立柱建物などを含み、カマドを伴うことから集落遺構と考えられ、粘土の出土と須恵器窯との併存から、須恵器工人集落として認識できる。両調査地は近接しており、窯は時期的には3次→2次への移動が考えられ、その他の遺構もおおむね同じ方向性が考えられる。地理的に見ると、時期を下るにつれて山奥へ入り込みながら操業をおこない、集落を移動している状況が伺える。

各遺構については、7世紀に入って確認される斜面に長くL字状に掘り込まれる遺構は、建物の構造は復元が難しいが、土師器甕・甑を伴い、カマドを有することから居住用として利用されていたものと考えられる。その場合、工房の有無が問題となる。現在牛頸窯跡群においてロクロピットの検出はされておらず、具体的な工房を認定することは難しい。しかし、3次調査SX10のような粘土貯留土坑の存在は工房の近接性を示しており、斜面上の集落の場合は居住域と工房域が一体となっていた可能性が高い。また、床面を平らにする居住・工房に適した遺構以外に、床面に凹凸があり掘方が不整形な遺構については、土器の乾燥場であるなど、工房関連遺構である可能性もある。

こうした斜面上に位置する須恵器工人集落は、牛頸窯跡群内では春日市惣利・惣利西・惣利東遺跡、春日平田・平田北・平田西遺跡、大野城市梅頭遺跡2・3次調査、本堂遺跡5次調査、野添遺跡2次調査で確認されている。時期的には6世紀末頃に遺構の形成がはじまり、全体としては7世紀前半～中頃までは継続するが、7世紀中頃以降にはこの種の工人集落はほとんど確認できない。これらの集落のうち、谷部内に同時期の窯が存在する場合としない場合があり、梅頭2・3次例でも確認できたように、窯の操業期間＝集落の存続期間ではない場合もある。一方、上園遺跡や日ノ浦・塚原遺跡群のように平地に位置する集落もあり、こちらの方は長期間の存続期間が確認されている。

斜面上に立地する集落が営まれる期間は、多孔式煙道窯を用い、窯が最も大型化し、須恵器生産拡大期にあたる。そして、窯が小型化し、杯G・Bを生産する時期には斜面上の集落が全く認められなくなることは、窯構造の変化・生産器種の変化に応じた生産体制の変化と考えられるが、現在は有効な回答を持ち合わせていない。今後の課題としたい。

3. カマド塚状遺構について

梅頭3次2号窯跡は焚口部に柱穴が認められ、柱穴で囲まれた範囲のみに炭化材が分布していた。この遺構について、すでに「カマド塚状遺構」として発表しているが（註3）、当時は紙数の都合もあり、細かな構造について詳述することができなかった。以下では、確認された遺構の特徴について確認し、自然科学分析の結果と近畿・東海地方で確認されている横穴式木室との比較を踏まえ

て改めて評価をおこないたい。

まず遺構の特徴について箇条書きにしてまとめてみたい。

- ① 6世紀末～7世紀初頭に操業された須恵器窯を利用する。
- ② 須恵器窯は、焚口から窯尻にいたるまでほぼ完全に還元面を削り取られ、酸化面もほとんど残らない。
- ③ 窯の入口部分の両側壁をさらに削り、径2cm程度の構築材を芯に粘土を貼り付け壁を作る（厚さ7～15cm、残存高32～92cm）。
- ④ 窯の入口から入り込んだ部分から、手前にかけて長方形に径15～33cm、深さ6～42cmの柱穴を巡らせる。
- ⑤ 柱穴の角度から見て、柱はほぼ直立に近いようである。
- ⑥ 柱穴の土層観察からは、炭化材・柱痕は確認できなかった。
- ⑦ 柱列内のみに、窯主軸に直交して炭化材が広がる（長さ1.63m×幅1.31m）。
- ⑧ 粘土壁は弱く焼ける。
- ⑨ 粘土壁の奥壁側と柱穴列の奥壁側はほぼ揃っている。
- ⑩ 粘土壁・柱穴列・炭化材は一連のものと考えられ、窯主軸に直交して長さ約1.9m×幅約1.8mの室的空間が作られる。
- ⑪ 土層観察の結果、奥壁側・手前側の柱穴列とその前後に板材・粘土壁の痕跡は認められなかった。
- ⑫ 炭化材は長方形に材を組んだ状況が認められ、板材が確認できたが、木棺の痕跡は確認できなかった。
- ⑬ 炭化材直下と周辺の土を採取してリン・カルシウム分析をおこなった結果、炭化材下からリンの数値が高い結果が得られた。

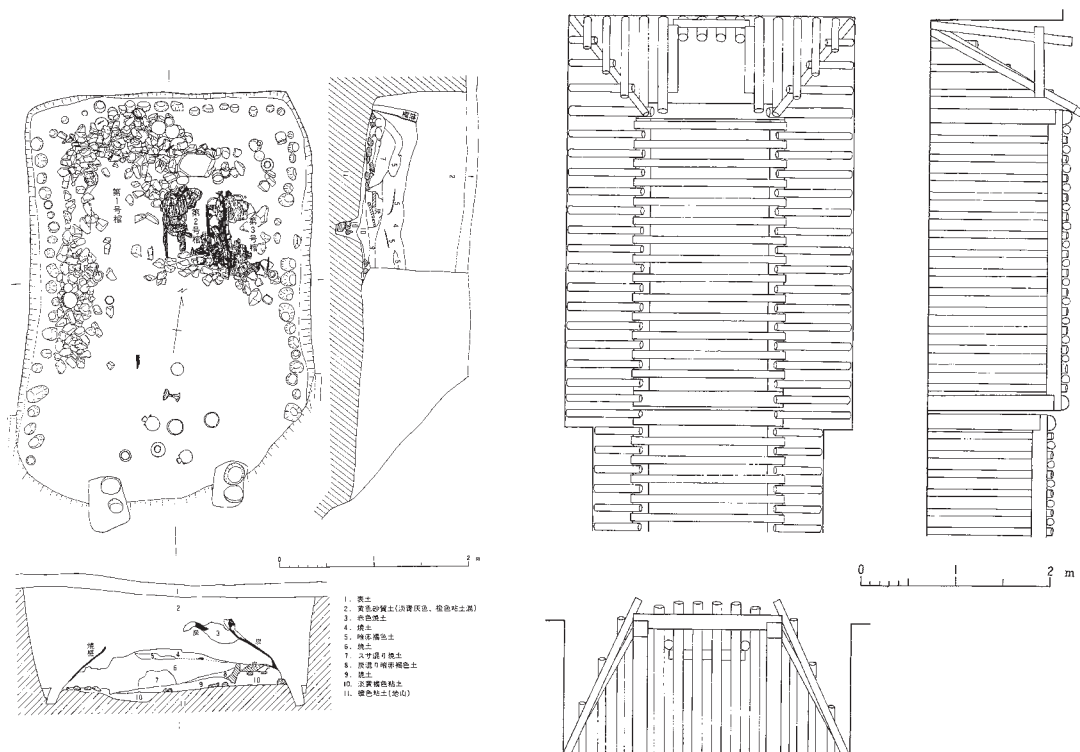
こうしたことから、須恵器窯を利用して焚口部に室的な空間を作り、ここで遺体を火化したものと考えた。しかし、以下の問題点が残った。

- a) 炭化材周辺から人骨・副葬品は認められていない。
- b) 上部構造が不明。
- c) 祭祀・窯の補修の可能性が残る。

上記3つの問題点の内、c)に関しては⑬の結果と柱穴の配置から埋葬に関わるものと考えたほうが妥当であり、結果a)の問題点が残る。b)の問題点については、奥壁側の柱穴列が窯の入口より内側に入るものと考えたが、手前側は不明である。また、柱穴から柱が直立する状況が考えられるのみで、垂木などの痕跡は全く認められず、構造復元は困難である。

カマド塚状遺構は、陶邑窯跡群内で調査された陶器千塚21号墳をはじめとする横穴式木室の存在を念頭に置いたものである。調査時に炭化材と柱穴が検出された段階では何の遺構かまったく分からなかったが、大阪大谷大学中村浩教授に現地を実見いただき、ご教示を頂いた結果、「カマド塚」（横穴式木室）ではないかとのこと指摘をいただいた（註3）。以下では、横穴式木室の概要とカマド塚状遺構の一致点・相違点について取り上げ、両者の関係について検討をおこないたい。

まず、横穴式木室は1956年に森浩一氏により報告された陶器千塚21号墳が研究の嚆矢である（註



第52図 上寺山古墳墓室木組構造復元図(1/80)

5)。遺構は丸太を立てて合掌式に組み合わせ、焚口・煙出しを作り、丸太の上や外側にスサ入り粘土を塗り付け、内部からは人骨・副葬品がもろともに焼かれた状態で見つっている。この種の遺構が「7世紀初頭を降らない」とされ、須恵器窯に類似しており、葬送において遺体を火にかけ

る点が注目された。また、1972年に刊行された上寺山古墳の概要報告書では具体的な墓室の構造復元図が示されている。その後、柴田稔氏（註6）・鈴木敏則氏（註7）により構造分類がおこなわれており、風間栄一氏による集成により、1993年段階全国で60例ほどが知られている（註8）。これらの事例から、カマド塚状遺構との構造的な一致点・相違点について箇条書きにして挙げる。

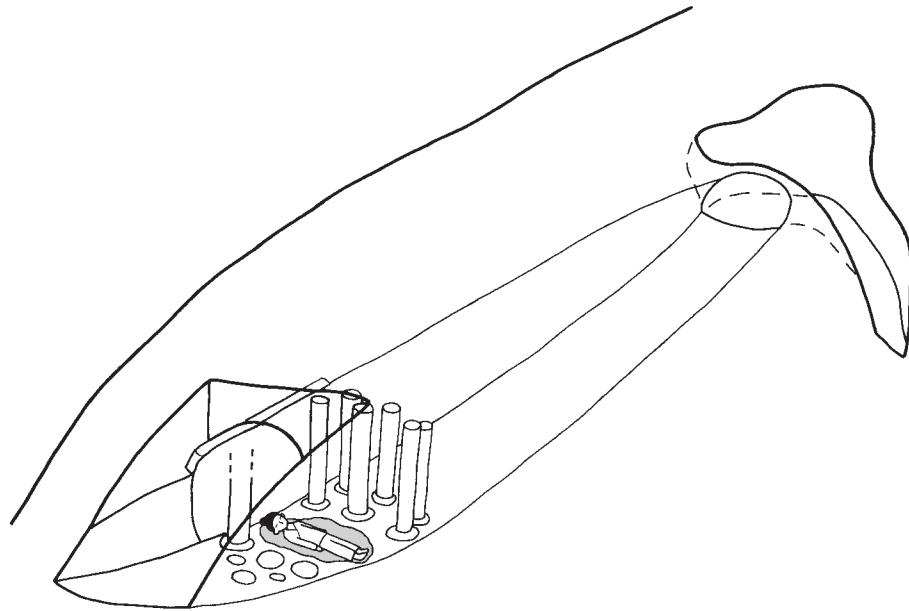
まず一致点としては、

1. 木・粘土で室的空間をつくる。
2. 遺体が火にかけられた痕跡がある。
3. 時期が一致する。

これに対し、相違点としては、

1. 規模が異なる。
2. 柱・粘土の配置が異なる。
3. 横穴式木室は出入りができる構造であるが、カマド塚状遺構では確認できない。
4. 副葬品をもたない。

以上の点が挙げられる。ただし、横穴式木室が横穴式石室と同じような墓坑掘方をもつのに対し、カマド塚状遺構は須恵器窯の焚口・燃焼部を改造して構築される点が基本的に異なっており、単純に比較は難しい。このため、形状・規模において相違点は大きいものの、構造材の選択・火化の痕跡・時期の一致からカマド塚状遺構は横穴式木室の影響下に発生した特異な墓制と考えられる。た



第53図 牛頸梅頭遺跡第3次2号窯跡カマド塚状遺構構造推定復元図

だし、先に挙げた人骨・副葬品の欠落と、カマド塚状遺構の上部構造の復元は今後問題となろう。

梅頭遺跡群では、これまで4次にわたる調査がおこなわれた。このうち、梅頭1次1号窯跡・2次1号窯跡では先に報告したとおり、須恵器窯の操業終了後に墳墓として利用されたと考えた（註9）。これに3次調査の成果を含めると、3基の墳墓転用例が確認できる。いずれも6世紀末～7世紀前半の操業後に墳墓に転用しており、須恵器窯を使用することから被葬者は須恵器工人であることは疑いようがない。また、この種の葬法自体は在地の墓制から自生的に発生したと考えることは難しい。このことから、被葬者自体は在地工人ではなく外来工人である可能性が高い。その故地と目されるのは、陶棺・ヘラ書き須恵器・銀象嵌鉄刀など上大利土地区画整理事業地内で出土した遺物を見ていくと、陶邑窯跡群において他には考えられず、梅頭遺跡群の須恵器窯を転用した墳墓は陶邑から工人が派遣され、牛頸窯跡群が九州におけるヤマト政権の直轄窯として機能していることを示す極めて重要な遺跡と考える。

註1 石木秀啓・早瀬賢・井上愛子2008『牛頸本堂遺跡群Ⅴ』大野城市文化財調査報告書第76集

註2 『春日市史 上巻』（1995）

註3 石木秀啓2005「第3章第5節 須恵器工人の墳墓」『大野城市史 上巻』

註4 丸山康晴・平田定幸1985『春日地区遺跡群Ⅲ』春日市文化財調査報告書第15集

註5 森浩一1956「大阪府泉北郡陶器千塚」『日本考古学年報9』日本考古学協会

註6 柴田稔1983「横穴式木芯粘土室について」『考古学雑誌』第68巻第4号 日本考古学会

註7 鈴木敏則1991「横穴式木室雑考」『三河考古』第4号 三河考古刊行会

註8 風間栄一1993「横穴式木室研究の現状と課題」『遡航』第11号 早稲田大学大学院文学研究科考古談話会

註9 石木秀啓2007『牛頸梅頭遺跡群Ⅰ』大野城市文化財調査報告書第60集

石木秀啓・平島義孝2008『牛頸梅頭遺跡群Ⅱ』大野城市文化財調査報告書第84集

圖 版



(1) 1区全景（西から）



(2) 2区全景（南から）



(1) 3区全景（南から）



(2) 4区全景（北東から）



(1) 5区全景（南東から）



(2) 6区全景（北東から）



(1) 1号窯跡全景（東から）



(2) 2号窯跡検出状況（南から）



2号窯跡柱穴検出・焼成部床面粘土層検出状況（南から）



2号窯跡柱穴検出状況（南から）



(1) 2号窯跡窯体内左側壁全景（南東から）



(2) 2号窯跡窯体内右側壁全景（南西から）



(1) 2号窯跡焚口部左側壁粘土壁全景（東から）



(2) 2号窯跡焚口部～焼成部左側壁全景（南東から）



(1) 2号窯跡焼成部左側壁全景（南東から）



(2) 2号窯跡焼成部左側壁還元面残存状況（南東から）



(1) 2号窯跡焚口部右側壁粘土壁全景（西から）



(2) 2号窯跡焚口部～焼成部右側壁全景（南西から）



(1) 2号窯跡焼成部右側壁全景（南西から）



(2) 2号窯跡焚口部炭化材検出状況（南から）



(1) 2号窯跡焚口部左半部炭化材検出状況（南から）



(2) 2号窯跡焚口部右半部炭化材検出状況（南から）



(1) 2号窯跡焚口部SP05検出状況（南西から）



(2) 2号窯跡焚口部SP12検出状況（南から）



(1) 2号窯跡焚口部SP02
土層（西から）



(2) 2号窯跡焚口部SP05
土層（西から）



(3) 2号窯跡焚口部SP07
土層（西から）

(1) 2号窯跡焚口部SP09
土層（東から）



(2) 2号窯跡焚口部SP11
土層（西から）



(3) 2号窯跡焚口部SP12
土層（西から）





(1) 2号窯跡焚口部炭化材除去状況（南東から）



(2) 2号窯跡焚口部炭化材・焼土完掘状況（南東から）



(1) 2号窯跡窯体G-G'面横断土層（南から）



(2) 2号窯跡窯体焼成部下位
縦断土層（南西から）



(3) 2号窯跡窯体F-F'面
横断土層（南から）



(1) 2号窯跡窯体E-E'面
左半部横断土層 (南から)



(2) 2号窯跡窯体E-E'面
右半部横断土層 (南から)



(3) 2号窯跡窯背部土坑縦断土層 (南西から)

(1) 2号窯跡断割後全景
(南から)



(2) 2号窯跡c-c'面
断割土層 (南から)



(3) 2号窯跡f-f'面
断割土層 (南東から)





(1) 2号窯跡灰原右下区
西壁（南東から）



(2) 2号窯跡灰原中央西壁
（南東から）



(3) 2号窯跡灰原
確認トレンチ（南西から）



(1) SX01完掘状況（北西から）



(2) SX01土層（南西から）



(3) SX02完掘状況（北西から）



(4) SX02土層（南西から）



(5) SX06土層（南西から）



(6) SX06遺物出土状況（北西から）



(7) SX09土層（東から）



(8) SX10検出状況（南東から）



(1) SX11完掘状況（南東から）



(2) SX12・13完掘状況（南東から）

(1) SX12完掘状況
(南東から)



(2) SX12-2遺物出土状況
(南東から)



(3) SX12c-c' 面土層
(南東から)

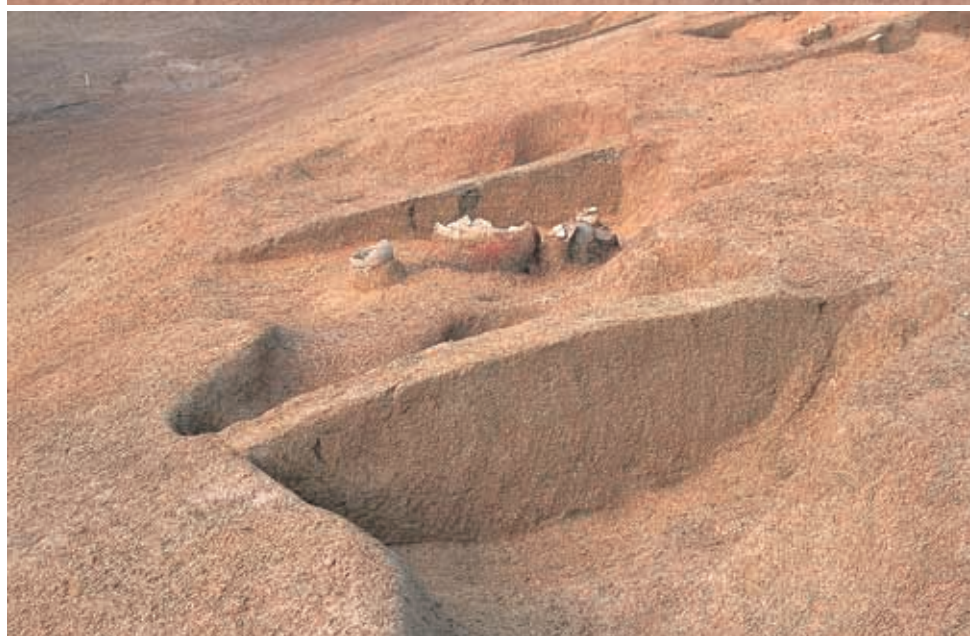




(1) SX13d-d' 面土層
(南東から)



(2) SX15完掘状況
(南東から)



(3) SX15c-c' 面土層
(東から)



(1) SX17完掘状況（東から）



(2) SX17土層（南西から）



(3) SX18完掘状況（南東から）



(4) SX18土層（南東から）



(5) SX19完掘状況（南西から）



(6) SX19土層（南西から）



(1) SX21完掘状況（北西から）



(2) SX22完掘状況（北西から）



(3) SX23完掘状況（北西から）



(4) SX24完掘状況（北東から）



(5) SX25完掘状況（南東から）



(6) SX25土層（南東から）



(1) SX25・26完掘状況（南東から）



(2) SX26土層（北東から）



(1) SX26- 2遺物出土状況
(南東から)



(2) SX27完掘状況
(南東から)



(3) SX27土層 (北東から)



(1) SX28完掘状況 (南から)



(2) SX28d-d' 面土層
(北東から)



(3) SX28b-b' 面土層
(北東から)



(1) SX29完掘状況（東から）



(2) SX29-2遺物出土状況（東から）



(1) SX30完掘状況（南から）



(2) SX30h-h' 面土層（東から）



(3) SX30m-m' 面土層（東から）



(4) SX30-3遺物出土状況（南西から）



(5) SX30-5焼土・遺物出土状況（南東から）



(1) SX31完掘状況（北から）



(2) SX32完掘状況
（北西から）



(3) SX32土層・遺物
出土状況（南西から）

(1) SX32焼土検出状況
(南西から)



(2) SX33完掘状況 (東から)



(3) SX33土層 (西から)





(1) SX34半截状況
(北東から)



(2) SJ01出土状況
(北西から)



(3) SJ01下甕底部
出土状況 (南西から)



(1) SD01a-a' 面土層 (南から)



(2) SD01d-d' 面土層 (南から)



(3) SD01j-j' 面土層 (南から)



(4) SD02・03a-a' 面土層 (南から)



(5) SD04a-a' 面土層 (南から)



(6) SD05a-a' 面土層 (南から)









57



69-71



87-88



122



139



127



143



128



144



131



145



134



146





154



155

出土遺物⑦



162



163



164



165



166



178

179



SX15



SX30





3次調査地周辺の現況（南西から）（平成20年3月撮影）

報告書抄録

ふりがな	うしくびうめがしらいせきぐん さん							
書名	牛頸梅頭遺跡群Ⅲ							
副書名	上大利北土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	ⅩⅡ							
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第85集							
編著者名	平島義孝・石木秀啓							
編集機関	大野城市教育委員会							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目2番1号 電話092(501)2211							
発行年月日	2008年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 。 ’ ”	東経 。 ’ ”	調査期間	調査面積	調査原因
うめがしらいせき 梅頭遺跡 第3次調査	ふくおかけんおおのしょうしおおあざかみおおり 福岡県大野城市大字上大利573-1他			33° 30′ 55″	130° 28′ 40″	2004.11.11 ～ 2003.5.13	13,000㎡	区画整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
梅頭遺跡 第3次調査	生産遺跡 集落	弥生 古墳～飛鳥 平安	窯跡・竪穴住居 跡・土坑・溝・甕棺 墓	須恵器・土師器・弥 生土器・瓦・鉄器				
要約	調査地は、大野城市の南に位置する牛頸山から北方へ派生する狭長な丘陵に位置し、現在三兼池となる谷部から北側に入り込むヤツデ状の小谷に面する。遺構は斜面上に立地し、窯跡・竪穴住居跡・土坑・溝・甕棺墓などがある。住居跡は略方形で、内部にカマドを備えるものと考えられる。斜面上の土坑からは、たくさんの土器が出土した。また、土坑の中には粘土が入ったものがあり、粘土を貯留していたと考えられる。このことは、斜面上で確認された竪穴住居跡・土坑が須恵器工人の住居であり、作業場でもあった可能性を示すと考えられる。 窯跡は全長10mを越す大型のもので、牛頸窯跡群特有の多孔式煙道窯と考えられる。操業がおこなわれた後、窯体内全体を還元層から酸化層まですべて削り落としていた。さらに焚口・燃焼部の両側壁を掘り込んで粘土で壁を作り、床面には柱穴群が確認された。柱穴群の中には炭が広がることから、近畿から東海にかけて分布する横穴式木室の影響を受けた遺構と考えられる。科学分析結果では、炭の周りの土からリンの値が高く出ており、ここで遺体に火をかけた可能性が非常に高いと考えられ、梅頭遺跡1・2次調査とともに窯を墳墓に転用した事例とすることができる。							

大野城市文化財調査報告書 第 85 集

牛頸梅頭遺跡群Ⅲ

平成 20 年 9 月 30 日

発行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町 2-2-1

印刷 大同印刷株式会社
佐賀市久保泉町大字上和泉 1848-20